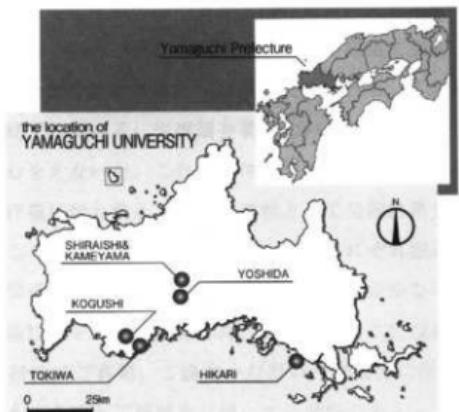


山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII

2004

山口大学埋蔵文化財資料館

山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII



2004

山口大学埋蔵文化財資料館

序 文

この年報には、山口大学埋蔵文化財資料館が実施した平成8年度ならびに平成9年度の発掘調査成果を収録する。そのため、本誌の番付をXVI・XVIIと連番にした。それ以前の平成7年度分の発掘調査報告については、まだ未報告であるので、追って刊行する予定である。

周知のとおり山口大学埋蔵文化財資料館は、山口大学構内に所在する遺跡を開発工事の事前に発掘調査し、文化財としての資料作成に考古学上従事している。その結果は本誌をもって正規のものとするけれども、建物建設その他、営繕分野の工事は予算の執行を伴う事業であるから、遺跡の破壊や保存にかかわる重要な案件は、本資料館を運営する委員会の審議事項であって、この報告の刊行以前にはすでに審議が終了している。発掘調査費じたいが営繕費と一体で執行されるのでこの現実はやむをえないが、これで一件が落着したのではなく、後は資料館が営々として室内作業に切り換えて、学術情報として発掘結果をこのように報告することになる。この後段の地味な作業は各大学がそれぞれ独自、かつ自前で行う事業であって、関係機関及び部局の理解なしには立ちゆかない。

運営委員会、施設部をはじめ関連部局のご高配にここに改めて御礼申し上げるとともに、遺跡研究にご寄稿、ご協力いただいた先生方に深甚の感謝を呈する。併せて、今後ともご支援とご鞭撻をお願いする次第である。

山口大学埋蔵文化財資料館

館長 中村友博

例　　言

1. 本書は、山口大学埋蔵文化財資料館が、埋蔵文化財資料館運営委員会の指示を受けて、平成8・9年度に山口大学構内で実施した調査の報告書である。
2. 現地における調査・研究は、大学院人文科学研究科院生 中村利至久の協力を得て、資料館員 村田裕一・田畠直彦・八杉幸子が担当した。

また、出土遺物の整理と報告書の作成は平成8年度から15年度の間に行い、同館員 品川直江（～平成11年3月30日）・八杉幸子（～平成10年3月30日）・金子大輔（平成10年4月1日～平成13年3月30日）・中村仁美（平成11年4月1日～平成14年3月30日）・神田真理子（平成13年4月1日～平成16年3月30日）・菊本裕美（平成14年4月1日～）が携わった。整理と報告書作成の統括は当初、村田・田畠で行っていたが、村田の転出により、後任の横山成己（平成15年5月1日～）の補佐を得て、田畠が行った。
3. 本調査・研究における事務一般は、平成8・9年度は事務局庶務課庶務係が統括し、実施面においては、各関係部局の事務部があたった。
4. 現地における遺構の実測などは、村田・田畠・八杉・中村（利）が行った。
5. 遺物実測は、弥生土器・土師器・須恵器を田畠・菊本・中村（仁）が、石器・鉄製品・青銅製品を村田・田畠・横山が、陶磁器を中村（仁）が行った。

製図は神田が行い、遺物の一部については鳴谷みね子氏にお願いした。
6. 本文の執筆分担は目次に記した。
7. 現地の写真撮影は、八杉の補佐を得て、村田・田畠が行った。遺物写真はPL4（2）を村田、他を田畠が撮影した。
8. 近世陶磁器については、山口県埋蔵文化財センター 岩崎仁志・谷口哲一氏に、石器の石質鑑定は山口大学理学部助教授 永尾隆志氏に、墨書き器の釈読については山口大学人文学部教授 橋本義則氏にそれぞれ助言を仰ぎ、懇切なご教示を得た。また、北九州市立大学教授 野井英明氏に花粉分析を依頼し、玉穂をいただいた。記して感謝の意を表したい。
9. 本書の編集は館員の補佐を得て田畠が行った。
10. 調査・研究においてはカラースライドを作成しており、出土遺物と合わせて埋蔵文化財資料館で保管している。

11. 調査担当は次のとおりである。

平成8年度

調査主体	埋蔵文化財資料館	館長	森 茂晚
		館員	豆谷 和之 [～平成8年6月30日]
		同	村田 裕一
		同	田畠 直彦 [平成8年8月1日～]
		同	八杉 幸子
		同	品川 直江
事務局		事務局長	山木 俊助
本部庶務部		部長	松尾 義輝
庶務課		課長	伊森 保
		課長補佐	原 和男
庶務係		係長	岡村 秀幸
			笠井 政雄
			深尾ヒロ子

平成9年度

調査主体	埋蔵文化財資料館	館長	中村 友博
		館員	村田 裕一
		同	田畠 直彦
		同	八杉 幸子
		同	品川 直江
事務局		事務局長	山木 俊助
本部庶務部		部長	橋 仁至
庶務課		課長	久保田俊三
		課長補佐	原 和男
庶務係		係長	小野 静生
			坂本 昇
			深尾ヒロ子

平成15年度

調査主体	埋蔵文化財資料館	館長	西山 壮一 [～平成15年7月15日]
------	----------	----	---------------------

	同	中村 友博 [平成15年7月16日～]
	館 員	田畠 直彦
	同	横山 成己 [平成15年5月1日～]
	同	菊本 裕美
	同	神田真理子
事務局	事務局長	櫻井 清 [～平成15年9月30日]
	同	松山 豊 [平成15年10月1日～]
本部総務部	部 長	國守 勝巳
研究協力課	課 長	下川 辰彦
	課長補佐	河村 憲生
研究協力第二係	係 長	常國 武志
		和泉由美子

12. 調査研究にあたって下記の方々の多大なご協力と援助をうけた。

平成8年度

事務局庶務部	人事課長 宮田久義、同課長補佐 柳 洋二、同専門職員 川口正人、任用係長 金子孝志、同係 多賀谷勇治、岡村竜也
経理部	部長 田村幸男、主計課長 太田正信、同課長補佐 梅村 零、経理課長 栗原晴壽、同課長補佐 藤川年章、総務係長 荒石光明、予算係長 牧原和仁、監査係長 高林昭夫、管財係長 谷本信之、用度係長 山崎昭博、同係 安食一二三、森重一雄
施設部	部長 黒岩七三、企画課長 蒲池祥昭、建築課長 山地久司、同課長補佐 岡崎正則、設備課長 八木吉次、総務係長 平川和孝、同係伊藤伸司、企画係長 小川賀津夫、建築第一係長 河田徹也、同係武市佳人、新里英明、建築第二係長 中谷幸一、同係 澤谷弘美、電気係長 松田清司、同係 岡野友資、弘中智則、前田康孝、機械係長鹿島正則、同係 岡田吉彦、板垣健一、中村兵衛
学生部	部長 輔中憲治、次長 池邊満紀、学生課長 古谷博昭、同課長補佐 中元常美、総務係長 中光博輝
教育学部	事務長 兵頭欣二、事務長補佐 中島岩弘、会計係長 伊藤敏穂、附属光小学校校長 田代直人、同副校長 石田克夫、附属光中学校長

	宮崎廣道、同副校長 平元榮治、光附属学校係長 宮本 秀、同係 三原敏秀、坂井貞彦、伊東明美
農学部	事務長 野村宗成、事務長補佐 作良初義、会計係長 上田隼一、 同係 金子淑子
医療技術 短期大学部	事務長 西野雅博、会計係長 三原秀鶴、同係 安永 渉、戸部敬博
吉田構内の発掘調査作業員	
足達世津子、茨木重美、岡野美智恵、金海美代子、金子万代、金子芳子、杉山久枝、 津野田志津子、原 千寿恵、原 百合子、深野生恵、亦野芳江、宮内和子	
平成9年度	
事務局庶務部	人事課長 宮田久義、同課長補佐 岩佐豈典、同専門職員 金子孝志、 任用係長 宮田滿茂、同係 後藤安倫、多賀谷勇治、龍野康幸、岡村 竜也
経理部	部長 田村幸男、主計課長 及川洋輝、同課長補佐 中村文穂、経理 課長 栗原壽晴、同課長補佐 梅村 馨、総務係長 高林昭夫、予算 係長 中川憲治、監査係長 伊藤篤紀、管財係長 篠原敏夫、用度係 長 久保賢治、同係 安食一二三、森重一雄
施設部	部長 梅村征男、企画課長 蒲池祥昭、建築課長 澄川 昇、同課長 補佐 岡崎正則、設備課長 八木吉次、総務係長 中光博輝、同係 伊藤伸司、企画係長 小川賀津夫、建築第一係長 河田徹也、同係 新里英明、末廣康之、建築第二係長 中谷幸一、同係 澤谷弘美、 電気係長 松田清司、同係 岡野友資、前田康孝、機械係長 岡田吉 彦、板垣健一、中村兵衛
学生部	部長 岩田允夫、次長 池邊満紀、学生課長 兵地正彬、同課長補佐 田村博幸、総務係長 佐村研治
教育学部	事務長 野村宗成、事務長補佐 中島岩弘、会計係長 伊藤敏穂、附 属養護学校校長 堂野佐俊、同副校長 平田弘幸、同係長 新徳法正、 同係 山本文子
医学部	事務部長 脇坂重秋、同次長 粒見和義、総務課長 由川博通、同課 長補佐 野澤章三、管理課長 新垣隆二、同課長補佐 田中善人、

中島一雄、総務係長 前田 崇、経理係長 有近博成、施設管理係長
萬代英夫、同係 山本加代子、山本真司、建築係長 川西智信、設備
係長 山本安雄

農学部 事務長 松本正史、事務長補佐 作良初義、会計係長 平川和孝、同
係 金子淑子、附属農場長 龜谷滿朗、同主事 濱古秀文、同事務長
藤川年章、同係 角井隆志

吉田構内の発掘調査作業員

茨木重美、金子万代、金子芳子、杉山久枝、津野田志津子、中村 節、原千寿恵

凡 例

- 吉田構内における調査区および層位・遺構の位置は、日本測地系に基づいた国土座標を基準として北から南へ1~24、西から東へA~Zの番号を付して50m方眼に区画した、構内地区割の A-24区南西隅を起点（構内座標 x = 0, y = 0）とする構内座標値で表示している。なお、平面直角座標系第Ⅲ系における座標値（X, Y）と構内座標値（x, y）とは下記の計算式で変換される。

$$x = X + 206,000$$

$$y = Y + 64,750$$

- 各遺構は下記の記号で表記することがある。

竪穴住居 …… SB, 土坑 …… SK, 溝 …… SD, 柱穴 …… Pit, 落ち込み …… SX

- 本書に使用した方位は、吉田構内では国土座標を基準とした真北、他の構内では磁北を示す。

- 標高数値は海拔標高を示す。

- 本文中の遺物番号は、挿図・図版・出土遺物観察表の番号と一致させた。

- 土層および土器の色調記号は、農林省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(1976)に準拠した。

- 土器・陶磁器の実測図は、下記のように器種分類した。

断面黒塗り……須恵器、陶器、磁器

断面白抜き……縄文土器、弥生土器、土師器、土師質土器、瓦質土器

本文目次

第1章 平成8年度山口大学構内遺跡調査の概要(田畠).....	1
第2章 常盤構内国際交流会館新宮に伴う発掘調査(村田).....	5
1 調査の経過	5
2 基本層序	7
3 遺構	14
4 遺物	15
5 小結	16
第3章 平成8年度山口大学構内の試掘調査(村田・田畠).....	17
第1節 吉田構内の試掘調査	17
1 吉田構内基幹環境整備 (独身宿舎・国際交流会館排水管布設)に伴う試掘調査	17
2 吉田構内基幹環境整備(外灯新設)に伴う試掘調査	21
3 吉田構内農学部附属農場排水管布設に伴う試掘調査	35
第4章 平成8年度山口大学構内の立会調査(村田・田畠).....	41
第1節 吉田構内の立会調査	41
1 陸上競技場鉄棒取設工事に伴う立会調査	41
2 農学部附属農場排水溝改修工事に伴う立会調査	42
3 桜野寮バリカー新設工事に伴う立会調査	42
4 サッカー場給水管取替工事に伴う立会調査	43
5 基幹環境整備 (共通教育センタースロープ・テラス新設)に伴う立会調査	44
6 九田川河川局部改良工事に伴う立会調査	45
7 農学部附属農場道路舗装工事に伴う立会調査	45
8 本部裏排水管取替工事に伴う立会調査	57
9 農学部附属農場家畜病院患畜舍間障取設工事に伴う立会調査	57

第2章	小串構内の立会調査	58
	医療技術短期大学部屋外排水管布設工事に伴う立会調査	58
第3章	光構内の立会調査	59
	教育学部附属光小・中学校囲障（外周フェンス・ 防球ネット）取設工事に伴う立会調査	59
第5章	平成9年度山口大学構内遺跡調査の概要	61
第6章	平成9年度山口大学構内の試掘調査	63
第1節	吉田構内の試掘調査	63
1	農学部附属農場堆肥舎新営に伴う試掘調査	63
2	農学部バイオ環境制御施設新営に伴う試掘調査	67
第2節	小串構内の試掘調査	77
	医学部慰靈碑・納骨堂新営に伴う試掘調査	77
第7章	平成9年度山口大学構内の立会調査	79
第1節	吉田構内の立会調査	79
1	カーブミラー新設工事に伴う立会調査	79
2	基幹環境整備（外灯新設）工事に伴う立会調査	80
3	共通教育棟エレベーター新設工事に伴う立会調査	82
4	九田川局部改良工事に伴う立会調査	82
5	本部2号館西側バリカー新設工事に伴う立会調査	83
6	教育学部附属養護学校時計塔新設工事に伴う立会調査	83
7	基幹環境整備 (教育学部附属養護学校排水管取替)工事に伴う立会調査	84
8	基幹環境整備(焼却場裏表土すき取り)工事に伴う立会調査	84
第2節	小串構内の立会調査	85
1	基幹環境整備(看護婦宿舎浄化槽撤去)工事に伴う立会調査	85
2	医学部剖検棟移設工事に伴う立会調査	85

第8章	平成7・10～14年度山口大学構内遺跡調査の概要	（田畠）	87
1	平成7年度山口大学構内遺跡調査の概要		87
2	平成10年度山口大学構内遺跡調査の概要		87
3	平成11年度山口大学構内遺跡調査の概要		89
4	平成12年度山口大学構内遺跡調査の概要		89
5	平成13年度山口大学構内遺跡調査の概要		90
6	平成14年度山口大学構内遺跡調査の概要		90

付 篇

付篇I			
山口大学構内吉田遺跡における官衙遺構立地前後の植生変化	（野井英明）	97	
付篇II			
吉田構内農学部附属農場の分布調査	（田畠）	101	
山口大学構内遺跡調査要項		109	
山口大学埋蔵文化財資料館規則		109	
山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則		110	
山口大学構内の主な調査		112	
Summary		127	

図 版 目 次

<常盤構内国際交流会館新館に伴う発掘調査>

- PL. 1 常盤構内全景（西から）
- PL. 2 (1) 調査区全景（北東から）
 (2) 北拡張区完掘状況（南東から）

- PL. 3 (1) 段状遺構土層（AA'断面・東から）
(2) 段状遺構完掘状況・北拡張区北西壁土層断面（東から）
(3) 南拡張区南東半部第IV・V層上面検出状況（北西から）
(4) 南拡張区完掘状況（北西から）
- PL. 4 (1) 南拡張区南東壁土層断面（北西から）
(2) 出土石器
- <吉田構内基幹環境整備（独身宿舎・国際交流会館排水管布設）に伴う試掘調査>
- PL. 5 吉田構内全景（南から）
- PL. 6 (1) 独身宿舎調査区全景（北から）
(2) 独身宿舎調査区東壁土層断面（西から）
(3) 国際交流会館調査区全景（北から）
(4) 国際交流会館調査区西壁土層断面（北東から）
- <吉田構内基幹環境整備（外灯新設）工事に伴う試掘調査>
- PL. 7 (1) 調査区全景（北東から）
(2) 河川1検出状況（北西から）
(3) 河川1流木検出状況（北西から）
(4) 河川1完掘状況（西から）
- PL. 8 (1) 河川1土層断面・木杭断ち割り状況（南東壁部分・西から）
(2) 河川1北東－南西方向搅乱土層（南から）
(3) 河川2土層断面（南東壁部分・西から）
(4) 河川3土層断面（南東壁部分・西から）
- PL. 9 河川3出土縄文土器
- PL. 10 (1) 河川3出土弥生土器
(2) 河川3出土敲石
(3) 河川1出土遺物
- PL. 11 河川1搅乱溝出土遺物①
- PL. 12 河川1搅乱溝出土遺物②
- PL. 13 河川1搅乱溝出土遺物③
- PL. 14 (1) 河川1搅乱溝出土遺物④
(2) 河川1搅乱溝出土遺物⑤

- (3) 河川 1 掘乱溝出土鉄器
- (4) 河川 1 掘乱溝出土石器

<農学部附属農場排水管布設に伴う試掘調査>

- PL.15 (1) 調査前全景（南から）
 - (2) 調査区全景（南から）
- PL.16 (1) 北調査区全景（北から）
 - (2) 南調査区全景（北から）
 - (3) 南調査区西壁土層断面（x = 680 ~ 690 付近・南東から）
 - (4) 南調査区包含層検出状況（南東から）
- PL.17 (1) ピット群検出状況（南東から）
 - (2) ピット群完掘状況（南東から）
 - (3) 南調査区西壁土層断面（x = 665 ~ 675 付近・南東から）
 - (4) 出土遺物

<農学部附属農場道路舗装工事に伴う立会調査>

- PL.18 (1) 4 トレンチ北西壁土層断面（南から）
 - (2) 4 トレンチ土器出土状況（南西から）
- PL.19 (1) 2 トレンチ出土遺物・4 トレンチ溝状落ち込み出土遺物①
 - (2) 4 トレンチ溝状落ち込み出土遺物②
- PL.20 4 トレンチ溝状落ち込み出土遺物③
- PL.21 4 トレンチ溝状落ち込み出土遺物④
- PL.22 4 トレンチ溝状落ち込み出土遺物⑤
- PL.23 (1) 4・5 トレンチ出土遺物
 - (2) 5 トレンチ出土磁器
 - (3) 6 トレンチ近世用水路出土土師質土器・粗陶器・瓦質土器
- PL.24 6 トレンチ近世用水路出土陶器・磁器
- PL.25 (1) 6 トレンチ近世用水路出土磁器
 - (2) 6 トレンチ近世用水路出土瓦
 - (3) 8 トレンチ出土遺物

<農学部附属農場堆肥舎新営に伴う試振調査>

- PL.26 (1) 調査前全景（南から）

- (2) 調査区全景（南から）
- (3) 調査区北部東壁土層断面（南西から）
- (4) 調査区南部東壁土層断面（西から）

<農学部バイオ環境制御施設新營に伴う試掘調査>

- PL.27 (1) 調査前全景（北から）
 - (2) 調査区全景（北から）
- PL.28 (1) 河川 1 東壁土層断面（調査区北端・南西から）
 - (2) 河川 1 検出状況（北西から）
 - (3) 河川 2 北肩検出状況（西から）
 - (4) 河川 2 南肩検出状況（北西から）
- PL.29 (1) 河川 1 ~ 河川 3 北肩検出状況（南西から）
 - (2) 河川 3 東壁・南壁土層断面（調査区南端・北西から）
 - (3) 第 1 号溝検出状況（西から）
 - (4) 第 1 号溝遺物出土状況（西から）
- PL.30 (1) ピット群検出状況（西から）
 - (2) ピット群完掘状況（西から）
 - (3) 第 1 号土坑（西から）
 - (4) 水田暗渠・溝（x = 440 ~ 445 付近・西から）
- PL.31 (1) 河川 1・2 出土遺物
 - (2) 河川 3 出土遺物
 - (3) 第 1 号溝出土遺物
- PL.32 清掃時出土遺物・採集遺物

<医学部慰靈碑・納骨堂新營に伴う試掘調査>

- PL.33 小串構内全景（南から）
- PL.34 (1) 調査区全景（北から）
 - (2) 調査区北壁土層断面（南から）

<平成 7・10~14 年度山口大学構内遺跡調査の概要>

- PL.35 (1) 吉田構内第 2 学生食堂増築に伴う発掘調査・調査区全景（南から）
 - (2) 吉田構内総合研究棟新營に伴う発掘調査・調査区全景（西から）

- PL.36 (1) 吉田構内農学部校舎改修（解剖実習棟新営）に伴う発掘調査・
調査区全景（南から）
(2) 挖立柱建物 SB 8・SB 9（北から）
- PL.37 (1) SB 9（東から）
(2) 河川 1 土器出土状況（東から）
(3) 河川 1・2 南壁土層断面（調査区南西隅・北から）
(4) 河川 1・2 南壁花粉分析試料採取地点土層断面（北から）
- PL.38 (1) 吉田構内総合研究棟新営に伴う発掘調査出土須恵器円面硯
(2) 吉田構内農学部校舎改修（解剖実習棟新営）に伴う発掘調査出土遺物①
- PL.39 吉田構内農学部校舎改修（解剖実習棟新営）に伴う発掘調査出土遺物②
- 付篇Ⅱ <吉田構内農学部附属農場の分布調査>
- PL.40 吉田構内農学部附属農場採集遺物①
- PL.41 吉田構内農学部附属農場採集遺物②

挿 図 目 次

<平成8年度山口大学構内遺跡調査の概要>

Fig. 1 山口大学吉田・亀山構内位置図 2

Fig. 2 山口大学小串・常盤構内位置図 3

Fig. 3 山口大学光構内位置図 4

<常盤構内の発掘調査>

常盤構内国際交流会館新営に伴う発掘調査

Fig. 4 調査区位置図 5

Fig. 5 調査区設定位置図 6

Fig. 6 試掘調査 A～D トレンチ土層断面図 8

Fig. 7 調査区北西壁土層断面図① 9

Fig. 8 調査区北西壁土層断面図② 10

Fig.9	調査区北西壁土層断面図③	11
Fig.10	北拡張区遺構配置図	12
Fig.11	北拡張区土層断面図	13
Fig.12	南拡張区土層断面図	14
Fig.13	出土石器実測図	15
<吉田構内の試掘調査>		
吉田構内基幹環境整備（独身宿舎・国際交流会館排水管布設）に伴う試掘調査		
Fig.14	調査区位置図	17
Fig.15	独身宿舎調査区設定位置図	18
Fig.16	独身宿舎調査区土層断面図	18
Fig.17	国際交流会館調査区設定位置図	19
Fig.18	国際交流会館調査区土層断面図	19
吉田構内基幹環境整備（外灯新設）に伴う試掘調査		
Fig.19	調査区位置図	21
Fig.20	調査区設定位置図	22
Fig.21	河川1平面図・断面図	23
Fig.22	河川2平面図	24
Fig.23	B調査区遺構配置図	25
Fig.24	河川2・3土層断面図	26
Fig.25	河川3出土遺物実測図	27
Fig.26	河川1出土遺物実測図	28
Fig.27	河川1搅乱溝出土遺物実測図①	29
Fig.28	河川1搅乱溝出土遺物実測図②	30
Fig.29	河川1搅乱溝出土遺物実測図③	31
農学部附属農場排水管布設に伴う試掘調査		
Fig.30	調査区位置図	35
Fig.31	調査区設定位置図	36
Fig.32	南調査区遺構配置図・西壁土層断面図①	37・38
Fig.33	南調査区遺構配置図・西壁土層断面図②	39
Fig.34	北調査区北西壁土層断面図	39

Fig.35 第V層出土遺物実測図	40
<吉田構内の立会調査>	
Fig.36 調査区位置図	41
Fig.37 調査区位置図	42
Fig.38 調査区位置図	42
Fig.39 調査区位置図	43
Fig.40 調査区位置図	44
Fig.41 調査区位置図	45
農学部附属農場道路舗装工事に伴う立会調査	
Fig.42 調査区位置図	45
Fig.43 トレンチ設定位置図	46
Fig.44 4トレンチ平面図・断面図	47
Fig.45 2トレンチ出土遺物実測図・ 4トレンチ溝状落ち込み出土遺物実測図①	48
Fig.46 4トレンチ溝状落ち込み出土遺物実測図②	49
Fig.47 4トレンチ溝状落ち込み出土遺物実測図③	50
Fig.48 4・5トレンチ出土遺物実測図	51
Fig.49 6トレンチ近世用水路出土遺物実測図	53
Fig.50 6トレンチ近世用水路・8トレンチ出土遺物実測図	54
Fig.51 調査区位置図	57
Fig.52 調査区位置図	57
<小串構内の立会調査>	
Fig.53 調査区位置図	58
<光構内の立会調査>	
Fig.54 調査区位置図	59
<吉田構内の試掘調査>	
農学部附属農場堆肥舎新營に伴う試掘調査	
Fig.55 調査区位置図	63
Fig.56 調査区設定位置図	64
Fig.57 調査区土層断面図	65

農学部バイオ環境制御施設新営に伴う試掘調査

Fig.58	調査区位置図	67
Fig.59	調査区設定位置図	68
Fig.60	調査区遺構配置図・土層断面図①	69・70
Fig.61	調査区遺構配置図・土層断面図②	71
Fig.62	第1号溝平面図・断面図	72
Fig.63	ピット群平面図・断面図	72
Fig.64	第1号土坑平面図・断面図	73
Fig.65	出土遺物実測図	74

<小串構内の試掘調査>

医学部慰靈碑・納骨堂新営に伴う試掘調査

Fig.66	調査区位置図	77
Fig.67	調査区設定位置図	77
Fig.68	調査区土層断面図	78

<吉田構内の立会調査>

Fig.69	M - 11区調査区位置図	79
Fig.70	N - 21区調査区位置図	79
Fig.71	調査区位置図	80
Fig.72	調査区位置図	82
Fig.73	調査区位置図	82
Fig.74	調査区位置図	83
Fig.75	調査区位置図	83
Fig.76	調査区位置図	84
Fig.77	調査区位置図	84

<小串構内の立会調査>

Fig.78	調査区位置図	85
Fig.79	調査区位置図	85

<平成7・10～14年度山口大学構内遺跡調査の概要>

Fig.80	第2学生食堂調査区位置図	88
Fig.81	農学部解剖実習棟調査区遺構概略図	91

Fig.82	総合研究棟・農学部解剖実習棟敷地出土遺物実測図	92
付篇 I		
<山口大学吉田構内吉田遺跡における官衙遺構立地前後の植生変化>		
Fig.83	花粉分析試料採取層準（河川1・2南壁）	98
Fig.84	花粉ダイアグラム	99
付篇 II		
<吉田構内農学部附属農場の分布調査>		
Fig.85	調査区位置図①	101
Fig.86	調査区位置図②	102
Fig.87	採集遺物実測図	103
<山口大学構内の調査区位置図>		
Fig.88	吉田構内地区割及び主な調査区位置図	131・132
Fig.89	小串構内調査区位置図	133・134
Fig.90	常盤構内調査区位置図	135・136
Fig.91	亀山構内（幼稚園・小学校）調査区位置図	137・138
Fig.92	亀山構内（中学校）調査区位置図	139・140
Fig.93	光構内調査区位置図	141・142

表 目 次

<平成8年度山口大学構内遺跡調査の概要>		
Tab.1	平成8年度山口大学構内遺跡調査一覧表	1
<常盤構内の発掘調査>		
国際交流会館新館に伴う発掘調査		
Tab.2	出土遺物観察表（石器）	16

<吉田構内の試掘調査>	
吉田構内基幹環境整備（外灯新設）に伴う試掘調査	
Tab. 3 出土遺物観察表（土器）	33
Tab. 4 出土遺物観察表（石器）	34
Tab. 5 出土遺物観察表（鉄製品）	34
農学部附属農場排水管布設に伴う試掘調査	
Tab. 6 出土遺物観察表（土器）	40
<平成8年度山口大学構内の立会調査>	
農学部附属農場道路舗装工事に伴う立会調査	
Tab. 7 出土遺物観察表（土器）	55
<平成9年度山口大学構内遺跡調査の概要>	
Tab. 8 平成9年度山口大学構内遺跡調査一覧表	61
<吉田構内の試掘調査>	
農学部バイオ環境制御施設新営に伴う試掘調査	
Tab. 9 出土遺物観察表（土器）	76
Tab. 10 出土遺物観察表（石器）	76
<平成7・10～14年度山口大学構内遺跡調査の概要>	
Tab. 11 出土遺物観察表（土器）	94
Tab. 12 出土遺物観察表（青銅製品）	94
付篇 II	
<吉田構内農学部附属農場の分布調査>	
Tab. 13 採集遺物一覧表	107
Tab. 14 採集遺物観察表（土器）	107
Tab. 15 山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会委員	111
Tab. 16 山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員	111
Tab. 17 山口大学構内の主な調査一覧表	112

第1章 平成8年度山口大学構内遺跡調査の概要

山口大学の関連諸施設は、山口市（吉田・亀山構内）、宇部市（小串・常盤構内）、光市（光構内）の県内各市に分散している。各構内には、縄文時代後・晩期から江戸時代にかけての複合集落遺跡として著名な吉田構内をはじめとして、旧石器時代の遺物が出土する小串構内など、周知の遺跡が埋蔵している。山口大学埋蔵文化財資料館は学内共同利用施設として、これら各構内において現状変更を伴う工事に対し、埋蔵文化財保護の立場から調査・研究を行っている。埋蔵文化財の調査を必要とする場合は、工事地域周辺での既往の調査結果や工事の内容、埋蔵文化財に対する影響の度合いなどを勘案し、埋蔵文化財資料館運営委員会の議を経て、事前・試掘・立会の三種の方法によって調査を実施している。

平成8年度は下記のように、事前調査1件、試掘調査3件、立会調査11件の計15件の調査を実施した。

Tab.1 平成8年度山口大学構内遺跡調査一覧表

調査区分	調査名	調査地区	構内地図	面積(m ²)	調査期間	調査番号
事前	国際交流会館新宮	常盤		352	5月13日～ 6月13日 7月1日～ 7月31日	Fig.90 No.18
試	基幹環境整備 (独立宿舎・国際交流会館排水管布設)	吉田	M-23.O-22	22.5	10月9日～ 10月25日	Fig.88 No.188
	基幹環境整備(外灯新設)	吉田	H-1-21-22	306	10月9日～ 11月24日	Fig.88 No.189
施	農学部附属農場排水管布設	吉田	S-10-11	93	2月18日～ 2月28日	Fig.88 No.190
	陸上競技場鉄塔取扱	吉田	G-18	5.5	8月6日	Fig.88 No.191
	農学部附属農場排水溝改修	吉田	R-11	2.2	9月11日	Fig.88 No.192
	植野野菜パリカー新設	吉田	O-20-21	7	10月23日	Fig.88 No.193
立	サッカーフィールド水管取扱	吉田	H-19-20,I-19	12	10月28日	Fig.88 No.194
	基幹環境整備 (共通教育センターースロープ・テラス新設)	吉田	J-K-17	14.3	1月27・30日	Fig.88 No.195
	九田川河川部改良	吉田	E-14	18	2月19日	Fig.88 No.196
	農学部附属農場道路舗装	吉田	K-12-13,L-12,M-11	27.6	2月24日～ 3月6日	Fig.88 No.197
合	本部裏排水管取扱	吉田	K-14	2	3月18・19日	Fig.88 No.198
	農学部附属農場家畜病院畜舎西側取扱	吉田	S-T-19	1	3月27日	Fig.88 No.199
	医療技術短期大学部屋外排水管布設	小串		6	8月1日	Fig.89 No.27
	教育学部附属農場北小中学校周囲 (外周フェンス・防球ネット)取扱	光		7	9月12・17日	Fig.93 No.17

吉田構内の調査（本部・人文・教育・経済・理・農の各学部：山口市大学吉田1677-1、教育学部附属農場学校：同吉田3003番地）

試掘調査3件、立会調査9件を実施した。

基幹環境整備（独身宿舎・国際交流会館排水管布設）に伴う試掘調査で、独身宿舎敷地では現地表下約1.3m、国際交流会館敷地では現地表下約1mで河川を検出したが、遺物は出土しなかった。また、基幹環境整備（外灯新設）に伴う試掘調査では、3条の河川を検出した。このうち、河川3からは、縄文時代後期から晩期の土器、弥生時代前期の土器

が少量出土した。また河川1及び同河川の搅乱溝からは、弥生時代中期から古墳時代前期の土器が多数出土し、河川1では護岸用の杭を検出した。

農学部附属農場排水管布設に伴う試掘調査では、調査区の南部で古墳時代～中世の遺物包含層とピット群を検出した。調査地周辺は、これまで発掘調査がほとんど行われておらず、今後の調査が期待される。

立会調査でも、遺構と遺物を確認している。陸上競技場鉄棒取設工事に伴う立会調査では、22ヶ所について調査を行った結果、現地表下約20cmで、河川と考えられる砂礫層、及び弥生土器を含む遺物包含層を検出した。サッカー場給水管取替工事に伴う立会調査では、現地表下約50cmで既設管の掘り方の土層を観察し、遺物包含層ないし遺構の埋土と思われる土層を確認した。調査地は遺跡保存地区に近いことから、竪穴住居などの関連する遺構が分布している可能性が高い。基幹環境整備（共通教育センター スロープ・テラス新設）工事に伴う立会調査で



Fig.1 山口大学吉田・亀山構内位置図



Fig.2 山口大学小串・常盤構内位置図

は、調査区の北部において現地表下約50cmで、河川堆積によると思われる包含層から縄文土器の小片が出土した。農学部附属農場農道舗装工事に伴う立会調査では9ヶ所設けたトレーニングのうち、4トレーニングでは溝状落ち込みを検出し、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての多数の土器が出土した。また、6トレーニングでは木杭による護岸を備えた、近世から統合移転前まで機能していたと考えられる用水路を検出し、多數の陶磁器が出土した。各トレーニングでは盛土が厚く、調査地近辺では旧地形が良好に残存することが想定される。その他の立会調査では、顕著な遺構・遺物は検出できなかった。

小串構内の調査（医学部、附属病院、医療技術短期大学部：宇都宮市南小串1丁目1-1）

立会調査1件を実施した。医療技術短期大学部屋外排水管布設工事に伴って、立会調査を実施したが、顕著な遺構・遺物は検出できなかった。

常盤構内の調査（工学部：宇都宮市常磐台2丁目16-1、尾山宿舎：河上野中町2658-3町付）

事前調査1件を実施した。国際交流会館新館に伴う発掘調査では、造成工事による削平が著しいものの、調査区の最北部では、近世から近代にかけてのものとみられる段状遺構を検出した。また、北拡張区では剝片、南拡張区でナイフ形石器が出土した。残念ながら、これらの石器が本来所属する文化層を明らかにすることはできなかった。しかし、常盤構内の東側には全国的に著名な旧石器時代遺物の散布地である常盤池遺跡が所在する。このことから、常盤構内にも常盤池遺跡と関連する遺跡が分布する可能性が残されており、今後の継続的な調査が期待される。



Fig.3 山口大学光構内位置図

その時期は出土した少量の陶磁器から、近世から近代と推測される。

(田畠)

光構内の調査 (教育学部附属光小学校、河光中学校:
光市大字室根瀬1-1所在)

立会調査1件を実施した。囲隙（外周フェンス・防球ネット）取設工事に伴う立会調査では、海岸に沿って、北西部のA地区（外周フェンス）、南東部のB地区（防球ネット）で調査を行った。その結果、A地区の一部では、時期不明であるが、現地表下約60cmで丸石による護岸を検出した。B地区では、現地表下約70cmで黄褐色及び黄白色砂層を検出した。この砂層の上面が旧地表面と考えられ、

第2章 常盤構内国際交流会館新営に伴う発掘調査

1 調査の経過

常盤構内の東端部、学生寮の東側の駐車場に国際交流会館の新営が計画された。埋蔵文化財資料館運営委員会の判断により、埋蔵文化財資料館では平成7年5月23日から5月30日まで試掘調査を行っている。以下に調査の概要を示す。

試掘調査では、A～Dの4つのトレンチを設定して基本層序を確認した。第I層：表土、第II層：造成土、第III層：耕作土または客土、第IV層以下が地山となる。第IV層：茶褐色粘質土、第V層：黄橙色砂質土・橙褐色粘質土、第VI層：黄橙褐色砂質土、第VII層：黄褐色粘土、第VIII層：暗赤褐色粘質土・黄橙褐色粘質土、第IX層：黒色・暗赤褐色・黄橙褐色が縞状を呈する岩盤となる。第VII層は岩盤風化土、第IX層は軟化した岩盤であるが、第IV～第VII層は火山灰土、もしくはその二次堆積層と考えられた。

常盤構内の東方約300mにある常盤池の周囲は、旧石器時代から縄文時代にかけての遺物が濃密に分布しており、常盤池遺跡として知られている。常盤池は、浸食作用により先端部が樹状になった低丘陵が、せめぎ合うように張り出することで形成された、小規模の谷地形の、狭まった出口を堰止めて作られた灌漑用水池である。およそ8.5kmの池の周囲から発見される遺物は、池の汀線際で多く採集されているよう、これは水の作用により遺物包含層の一部が洗い出されているためと考えられている。そして、この包含層は、水面下も含めた丘陵平坦部に広がっていることが推定されている。¹¹

常盤構内は、常盤池遺跡B地点¹²が立地している低丘陵を東に派生する丘陵本体の頂部平坦地に位置する。しかも、常盤構内の北側には東から西に開ける谷があり込んでおり、新営予定地はこの谷へ向かう丘陵縁辺にあたる。新営予定地のこのようない地には、常盤池遺跡の遺物包含層の所在推定場所との類似性がみられる。このため、試掘調査で確認した火山灰関連の土層と推定される第IV～第VII層は、遺物を包含してい

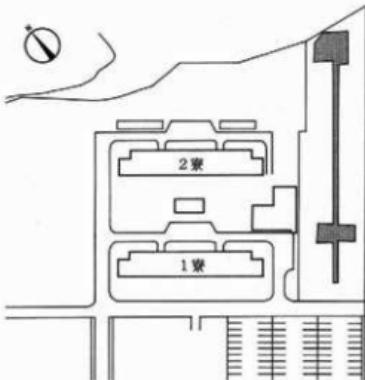


Fig.4 調査区位置図



Fig.5 調査区設定位置図

地の北端に任意の点を設定しこれを基準点 ($x = 0\text{ m}$ 、 $y = 10\text{ m}$) とし、ここで x 軸に直交する軸を y 軸とした。平面位置は、基準点からの x 軸方向及び y 軸方向への移動距離によって表示する。基本調査区は、北西辺を x 軸から南東方向に50cmほど離して設定した。

る可能性が推察された。また、近接する畠地より姫島産黒曜石製の石器脚部が採集されたことが、この可能性をさらに強めるものとして捉えられた。このようなことから、埋蔵文化財資料館運営委員会において、試掘調査トレンチでは遺構及び遺物を検出することはできなかったものの、新営予定地に旧石器時代を中心とした遺物包含層の所在を確認するため、新営工事に際して事前の発掘調査が必要であるとの判断がなされた。

平成8年度に予算措置がなされるに至って工事計画が具体化した。これを受け、埋蔵文化財資料館では、平成8年5月13日から6月13日、7月1日から7月31日の2期間、約2カ月にわたる発掘調査を実施した。調査では、工事用地に幅2m、長さ90mの南北方向基本調査区を設定し、さらにこの基本調査区の北端と南半の2ヶ所で東西両側に張り出すように北拡張区及び南拡張区を設定した。北拡張区は東西12m、南北11.4m、南拡張区は東西13.8m、南北6mで、基本調査区と合わせた調査総面積は352m²となった。

調査に際しては、左図に示すように任意の座標点を設定した。設定方法は以下の通りである。先ず、新営予定地を東西にほぼ2等分する直線を定めこれを南北方向の基準軸すなわち x 軸とした。次に、 x 軸上にあって予定

2 基本層序 (Fig.6 ~ 9, 11 · 12, PL.3 (1) (2) · 4 (1))

第Ⅰ層：表土

第Ⅱ層：造成土

第Ⅲ層：畑耕土

第Ⅳ層以下：地山

新営予定地は調査直前まで非舗装パラス敷の駐車場として利用されていた。また、これ以前はこの地には旧職員宿舎が建っていた。このため、基本層序の第Ⅰ · 第Ⅱ層はこれらを反映した土層となっている。第Ⅰ層はマサ土及びパラスによる表土である。第Ⅱ層は造成土で、これには最初の土地造成によるもの、職員宿舎建設の際のもの、職員宿舎取り壊しの際のもの、駐車場整備の際のものがみられる。擾乱土の多くは職員宿舎建設の際の掘削によるものである。第Ⅲ層は畑耕土と考えられるが、基本調査区北西壁土層でみると北東端の $x = 2$ m付近以北と南西端の $x = 84$ m以南でみられるだけである。北東端での堆積は厚い。南拡張区北東壁土層で見ると $y = 13$ mより東側で比較的安定してみられる。試掘Aトレンチの第Ⅲ層は畑開墾の際の客土と推定される。第Ⅳ層は茶褐色系統の砂質土と粘質土である。第Ⅳ層は、上層の影響で大きく変質しているようなところが多く、このような場所では漸移層的な性格の強い土層となっている。第Ⅴ層は、橙色または黄色ないし褐色系統の粘質土と砂質土である。第Ⅵ層は、白色砂を含む黄橙褐色砂質土で固く締まっている。岩盤及び岩盤風化土の上に堆積した基盤堆積土と考えられる。第Ⅶ層は黄褐色粘土だが、事前調査の調査区では全く見ることができず、試掘Aトレンチだけでもみられる薄い土層であることから、第Ⅷ層と同一層と判断する。試掘調査時にトレンチにたまつた雨水の影響で土色が変化したと思われる。第Ⅸ層は、暗赤褐色粘質土の岩盤風化土である。第Ⅹ層は、黄色 · 橙色 · 赤褐色または黒色 · 暗赤褐色が縞状を呈する。おそらくは蛇紋岩の風化岩盤である。

調査区内での地山堆積状況を概観する。第Ⅵ層は、基本調査区のほぼ全域で確認できるが、検出面の深さに特徴がある。基本調査区 $x = 5 \sim 61$ mの区間では第Ⅵ層の検出位置は現地表下約20~40cmと比較的浅く、第Ⅰ · 第Ⅱ層の下がすぐに第Ⅶ層となる。ところが第Ⅵ層は $x = 61$ mあたりで南に落ち込んでいるようで、検出位置が急に深くなる。また、南拡張区北東壁土層で見ると、第Ⅵ層の上面は東に向かってなだらかに深くなつて行く様子がわかる。そして、このように第Ⅵ層が深くなったようなところでは、第Ⅳ · 第Ⅴ層の堆積を見る能够である。

今回の事前調査では、原則として基盤堆積土と考えている第Ⅵ層上面を検出したところで、掘り下げを停止している。このため、第Ⅵ層より下の土層は、調査区の一部で確認し

常盤構内国際交流会館新館に伴う発掘調査

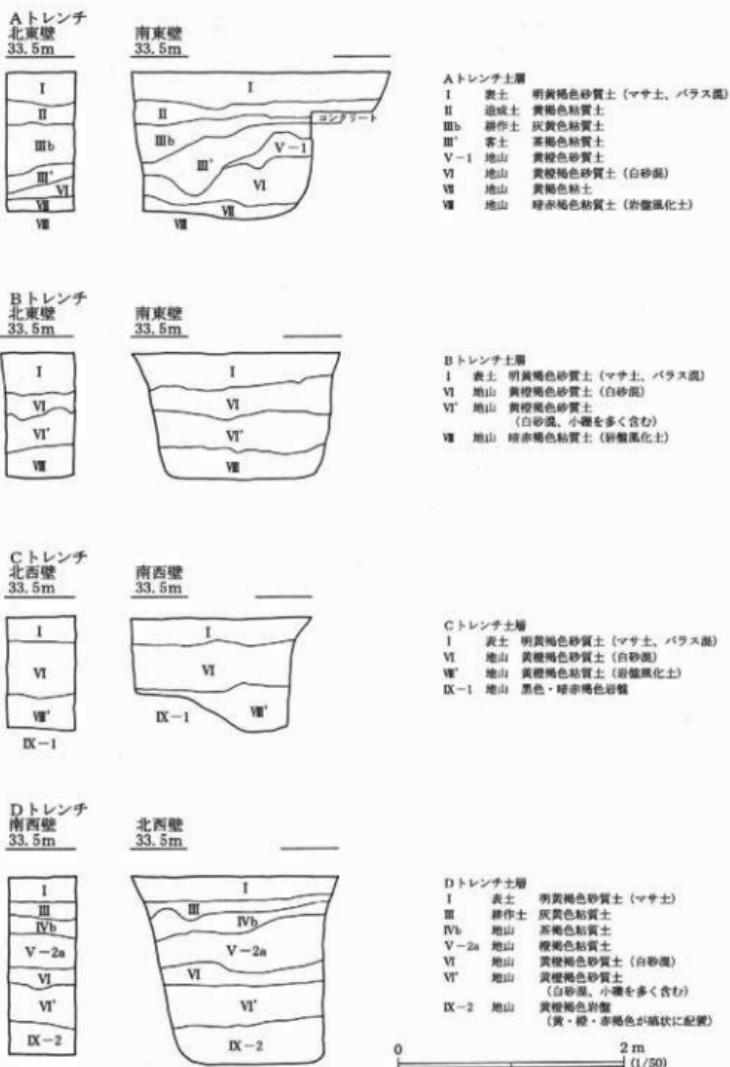


Fig.6 試掘調査A～D トレンチ土層断面図

基本層序

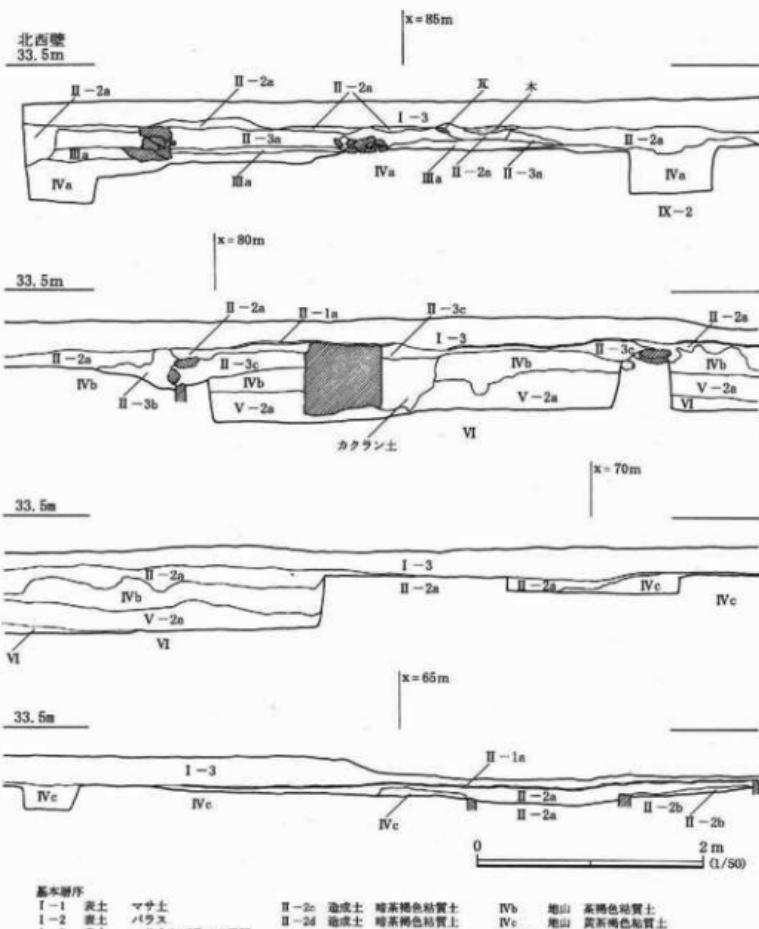
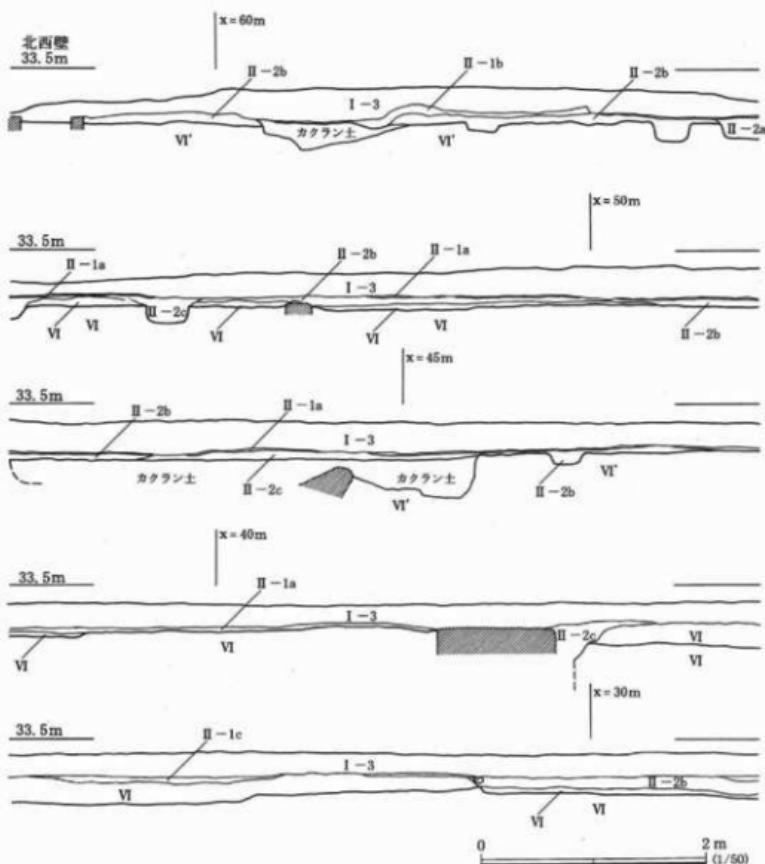


Fig.7 調査区北西壁土層断面図①

常盤橋内国際交流会館新館に伴う発掘調査



基本層序

I-1	表土	マサ土	II-2c	造成土	暗茶褐色粘質土	IVb	地山	茶褐色粘質土
I-2	表土	パラス	II-2d	造成土	暗茶褐色粘質土 (やや明るい)	IVc	地山	黄茶褐色粘質土
I-3	表土	マサ土とパラスの混層	III-1a	造成土	暗茶褐色粘質土	V-2a	地山	褐褐色粘質土
II-1a	造成土	褐茶褐色粘質土	III-2e	造成土	暗黃茶褐色粘質土	VI	地山	青褐色粘質土(白砂混)
II-1b	造成土	暗茶褐色粘質土	III-3a	造成土	暗黃茶褐色粘質土	VI'	地山	褐褐色粘質土 (白砂混、小礫を多く含む)
II-1c	造成土	暗茶褐色粘質土	III-3b	造成土	灰色砂	VII	地山	暗赤褐色粘質土 (鉄錆風化土)
II-1d	造成土	茶褐色粘質土	III-3c	造成土	黃茶褐色粘質土			
II-1e	造成土	褐褐色粘質土	IIIa	耕作土	暗黃茶褐色粘質土			
II-2a	造成土	黑茶褐色粘質土	IIIb	耕作土	灰黃色粘質土	IX-2	地山	黃褐色粘質土 (黄・橙・赤褐色が縦状に配置)
II-2b	造成土	茶褐色粘質土	IVa	地山	暗黃茶褐色砂質土			

Fig.8 調査区北西壁土層断面図②

基本層序

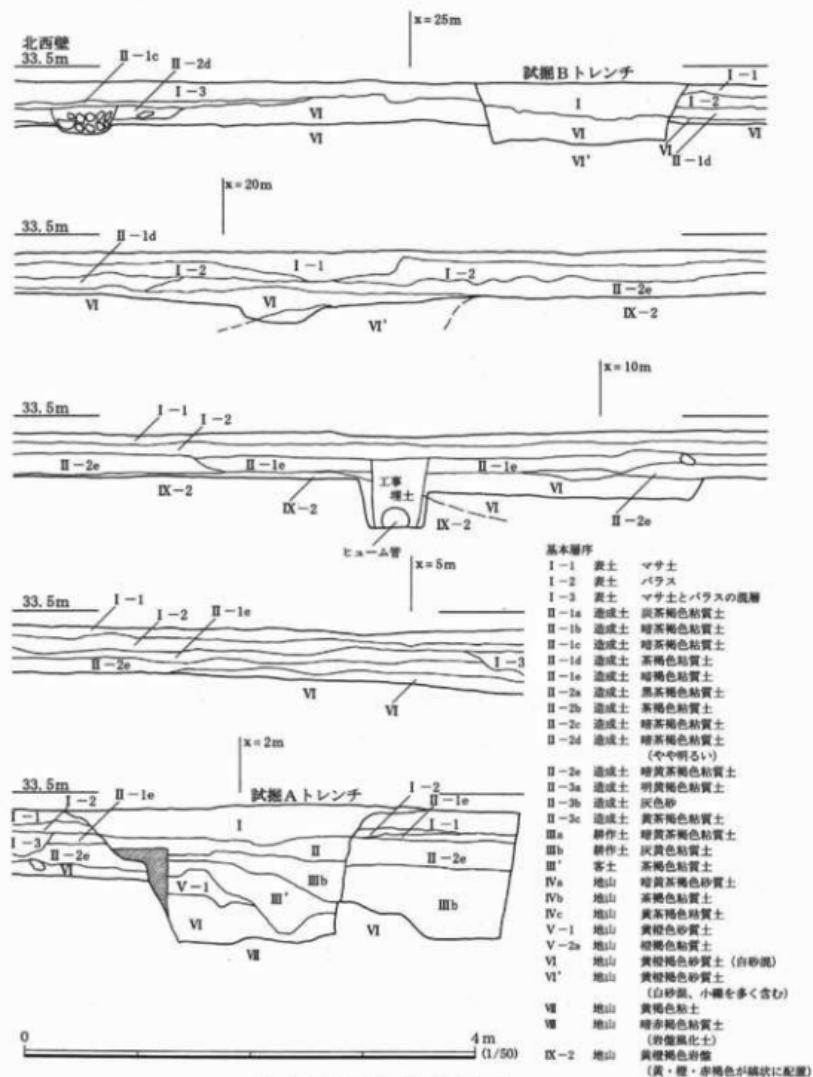


Fig.9 調査区北西壁土層断面図③

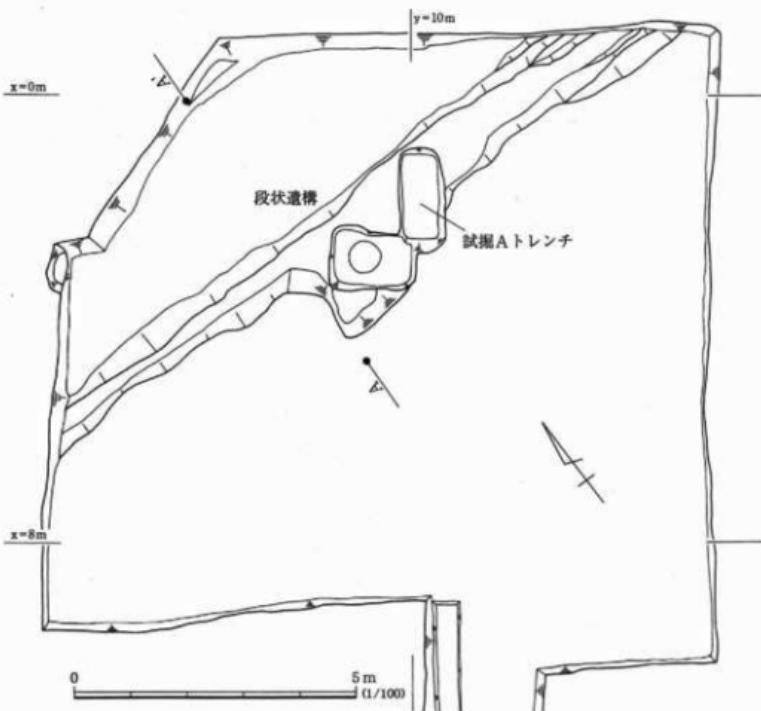


Fig.10 北拡張区遺構配置図

ているだけである。第VII層は、第VI層以下を調査している試掘A～Cトレンチと北拡張区段状遺構の遺構底面で確認した。第IX層は、基本調査区 $x = 12.5\sim 17.5$ mの区間、基本調査区 $x = 82.5$ m付近の土層確認用のサブトレンチ、試掘C・Dトレンチで確認している。基本調査区 $x = 12.5\sim 17.5$ mの約5mの区間では、第VI層の検出面と同じ現地表下約40cmの深さで検出した。この付近は岩盤が隆起していたと考えられる。第IX層は、基本調査区 $x = 12.5\sim 17.5$ mの以北については、試掘Aトレンチでは確認できないことから、急激に落ち込み第VI層との間に埴層を形成すると考えられる。以南については、第IX層が $x = 82.5$ m付近で確認されていることから、上下しながらも次第に深くなっていると推定できる。

以上にみられるような第VI層の検出位置、あるいは第IX層の確認状況から調査区周辺の

基本層序

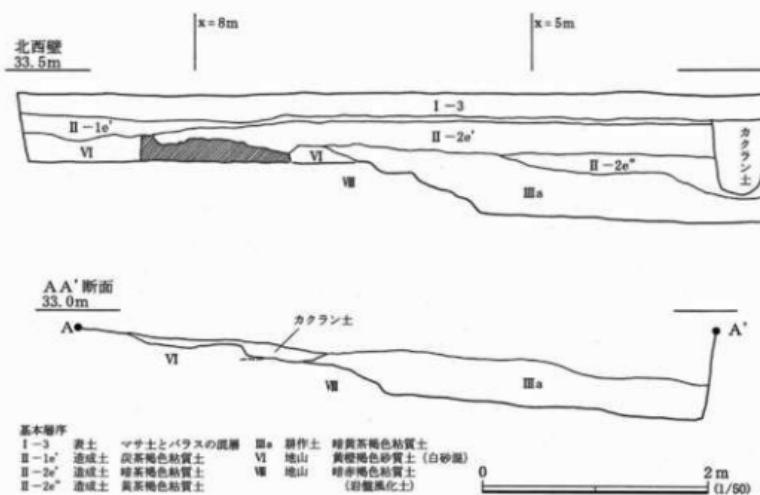


Fig.11 北拡張区土層断面図

旧来の地形を復元してみよう。南北方向については、岩盤が隆起していたと考えられる $x = 12.5 \sim 17.5$ mあたりが最も高く、南に行くにしたがい、なだらかに下降していたと考えられる。また、最高所から北にかけては、やや急峻に落ち込んでいたと考えられる。東西方向については、西に高く東かけてなだらかに下降していたと考えられる。このように、調査区周辺は、北に谷を控え、南と東になだらかに下降する丘陵状地形を呈していたと考えられるのである。

ところで、上記のように復元できる旧来のこの丘陵では、本来は広い範囲で第VI層の上に第V・第IV層が堆積していたと考えられる。ところが、後世の畑の開墾によって北側部分では第VI層はもとより第V層に至る掘り込みがなされたことがわかる。さらにその後、丘陵頂部を平坦にカットする大規模な造成工事が行われたために、最高所付近では第IV・第V層までもが完全に消滅し、一部では第IX層がむき出しとなった。また、南側部分でも削平が第VI層に到達したところもあった。この結果、第IV・第V層は、もともとの丘陵が低くなっていた南半に残るのみとなってしまったと解釈することができよう。第III層も同様にこの造成で大部分を削平された。このような状態の上に第II・第I層が形成されたのが調査時における新営予定地の状態であろう。

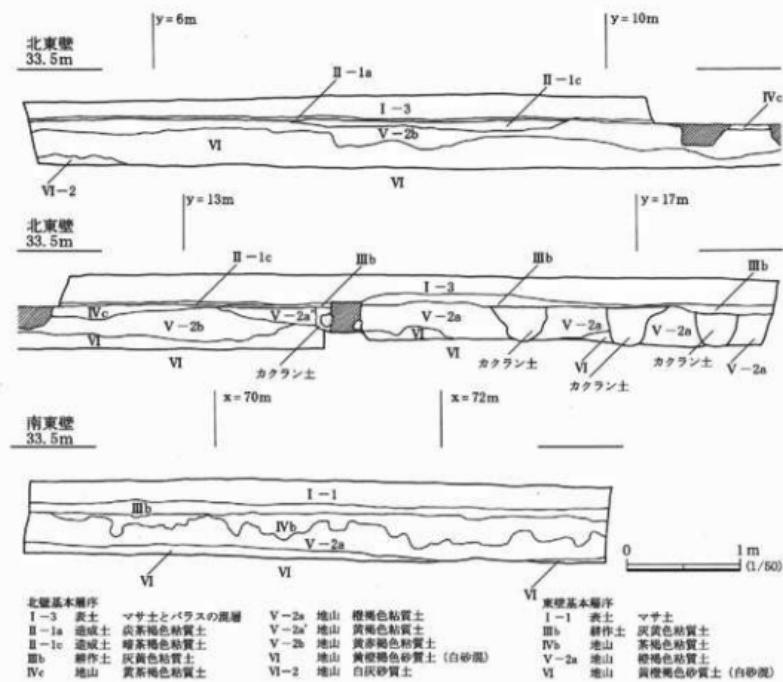


Fig.12 南拡張区土層断面図

3 遺構 (Fig.10・11, PL.2 (2)・3 (1) (2))

調査区の最北部、北拡張区北半で段状遺構を検出した。遺構検出面は調査区西寄りで第VII層上面、調査区中央部から東にかけては第VI層上面である。この遺構は、本来は第VI層以上から掘り込まれておらず、これは北拡張区北西壁土層で見ても明らかである。調査区西寄りで第VII層上面が検出面となったのは、造成のために第VI層が安定していなかったからである。遺構は、検出長13mで調査区を東西に横断しており、ほぼ東西の方位に沿っているようである。北に向かって下降する2段の段を持ち、上段平坦部の幅は約30~60cm、下段の平坦部は検出しているだけで幅約2.8mを測り、調査区外にさらに延びている。削平されている第VI層上面と上段の比高は北拡張区北西壁及びAA'断面でもみられるように約30~60cmである。上段と下段の比高は同様に約50~80cmである。調査区北東壁付

近では、検出面と上段の間、上段と下段それぞれに幅約20cmの小段がみられる。この遺構の性格は、埋土が第Ⅲa層すなわち畑耕土であることから、畑を開墾した際の地山の削り込みと考えられるが、段状を呈することの理由が不明である。また、第Ⅲa層と第VI・第V層は、土色・土質から見て大きな隔たりがあることから、第Ⅲa層は他所から客土された可能性が高いと考える。

4 遺物 (Fig.13, PL.4 (2))

今回の調査で出土した遺物は極めて少量で、期待した地山からの遺物の出土はみられなかった。第I・第II層からは、少量の陶磁器片が出土しているが小片で図示し得ない。第III層からは注目すべき遺物として水晶製の石器が2点出土した。

1は、北拡張区第Ⅲa層中より出土した調整加工・使用痕のある剥片である。水晶の六角錐状を呈する結晶の頂部を取り込んだ剥片で、これを尖頭部として利用している。左側縁部上半と基部右半に主要剥離面側からの調整剥離痕が、右側縁部上半に剥離痕がみられる。左側縁部上半の調整剥離痕は素材の主要剥離面に対して角度が大きく、プランティング加工に近い調整がなされたようである。基部右半の調整剥離痕は大きさ、角度ともに大きく、素材にノッチを加えることを目的とした可能性がある。これらに対して、右側縁部上半の剥離痕は大きさが小さく横長で、剥離痕相互の重複も多く衝撃剥離痕の可能性が高い。

2は、南拡張区南東部第Ⅲb層から出土した二側縁加工のナイフ形石器である。先端部が欠損しているが、左側縁下部及び右側縁部に主要剥離面側からの調整剥離痕がみられる。右側縁部の剥離痕は剥離方向に素材に沿って回り込んでおり、素材を抉り込むような一般的なプランティングに比べるとやや違和感を覚える。

このため、石鎚あるいはその未完成品である可能性を検討したが、左右両側縁部とともに調整剥離痕が素材の片面に偏在していること、右側縁部とは異なり、左側縁部の調整剥離痕は主要剥離面との角度が大きいこと、石鎚としては素材の厚みが大きいことから判断してナイフ形石器としておく。

先端部を欠損してはいるのだが、現存長1.9cm、幅1.0cmと小さく、欠損部を復元しても全長2.3cm

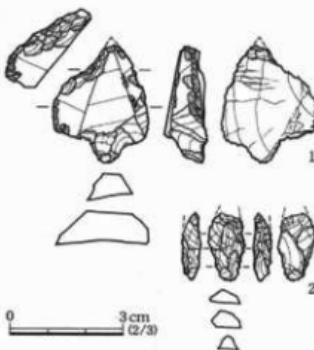


Fig.13 出土石器実測図

までであろう。宇部台地に広くみられる小型ナイフ形石器の一群に属すと考えられる。出土位置が、第V-2a層との境に近い第IIIb層下部であったため、これが仮に第V-2a層に属すならば、遺物包含層の認定につながることから、遺物を取り上げた後にも土層の微妙な起伏に注意して再度慎重に調査したが、第V-2a層からの出土とは認定できなかった。

5 小結

今回の調査は、調査面積、調査期間ともに常盤構内では過去最大であり、常盤構内で実施したはじめての本格的な発掘調査となった。埋蔵文化財資料館では、昭和58年以降常盤構内の発掘調査を行ってきている。しかし、常盤構内では、これまで主要な施設整備が行われてきた構内南西部から中央部にかけては、旧来の地形が大きく削平されていると推定される場所であったため、調査の規模も小さくならざるを得なかつたのである。今回の調査地は、常盤構内の縁辺部にあたっているため、構内中央部に比べると削平の規模が小さいことが期待された。結果的には、構内中央部に比べると削平規模は小さいものの、それでも削平は地山層のかなりの部分に及んでいることが判明した。このようなことから、今回は北拡張区で段状遺構を検出した以外には、南北基本調査区、南拡張区とともに、旧職員宿舎に係わる基礎などの他には遺構を検出することができなかつたのは残念である。

今回の調査の成果は、調査地の土層堆積状況を確認し旧来の地形の復元をしたこと、北拡張区で段状遺構を検出したこと、本来の文化層から遊離してはいるが旧石器時代のものと考えられる遺物が出土したことである。特に、南拡張区から出土した小型ナイフ形石器は、常盤構内に後期旧石器時代の文化層の所在する可能性を示し、また近接する常盤池遺跡との関連性をも示唆するもので発見の意義は大きい。今回の調査で推定した調査地周辺の旧地形と重ね合わせて、今後の常盤構内における発掘調査の指針となるものである。

(村田)

[注]

- 1) 山口県旧石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡(8)・(9) - 常盤池遺跡 その(1)・(2) -」『古代文化』第41巻第1・3号、(財)古代学協会、1989年

Tab.2 出土遺物観察表(石器)

注量()は現存値

遺物 番号	出土遺物	層位	種類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
1	北拡張区	IIIb層	調整加工・使用痕のある剥片	(3.2)	2.6	1.1	8.1	水晶	先端部欠損・先端部衝撃剥離痕あり
2	南拡張区南東部	IIIb層下部	ナイフ形石器	(1.9)	1.0	0.5	1.0	水晶	先端部欠損・先端部衝撃剥離痕あり

第3章 平成8年度山口大学構内の試掘調査

第1節 吉田構内の試掘調査

1 基幹環境整備（独身宿舎・国際交流会館排水管布設）に伴う試掘調査

(1) 調査の経過

山口市による公共下水道本管の吉田構内南縁側市道への布設計画に伴い、構内でもいくつかの地点において、下水排出方法の変更がなされることになった。これに伴い埋蔵文化財資料館では、平成7年度には排水処理センターからこの本管への接続ルートについて、公共下水道布設接続に伴う試掘調査及び事前調査を行っている。今回の調査は、独身宿舎及び国際交流会館において公共下水道へ排水を接続するための工事が、吉田地区基幹環境整備の一環として予算措置されたことに伴い実施した。

調査期間は、同じ基幹環境整備として予算措置された、南門からの構内道路沿いの外灯新設に伴う発掘調査と一部重複しており、この間、実質的に2件の調査を並行して行った。10月9日に調査区設定を行ったのち、10月15・16日に独身宿舎、国際交流会館、外灯新設予定地の順で重機掘削を行い、10月25日に独身宿舎及び国際交流会館の調査区埋め戻しを行うまでの約2週間に費やした。

(2) 独身宿舎調査区 (Fig.15・16, PL.6 (1) (2))

排水管布設の計画管路は、独身宿舎南側ほぼ中央部に位置する、排水浄化槽のコンクリート構造物から、構内外の境界となる東西方向のブロック塀まで、南に一直線に延びるものである。調査では、この計画管路を中心にして東西方向に幅2m、南北方向はコンクリート構造物に接する位置を北端とし、南端はブロック塀の約1m手前までの長さ7mの調査区を設定した。このうち、ブロック塀側は、掘削による塀への影響と重機の取り回しを考えて、当初より掘り残しが出ること止むなしとしていたが、北側



Fig.14 調査区位置図

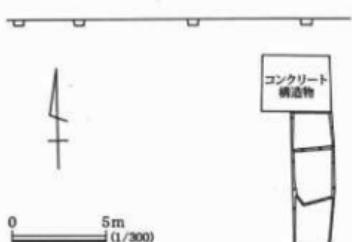


Fig.15 独身宿舎調査区設定位置図

についても、掘削開始直後に給水管に遭遇したために重機バケットの駆動半径を確保することができず、掘削を断念せざるを得なかつた。結果、遺構検出面となるべき位置まで調査できたのは調査区中央部の長さ約2.5m分、面積にして5m²にとどまった。

基本層序は、第Ⅰ層が黄灰褐色粘質土の造成土、第Ⅱ層が暗茶褐色粘質土の水田耕土、第Ⅲ層が暗黄褐色粘質土の水田床土である。第Ⅳ層以下が地山となる。第Ⅳ層は灰青色粘質砂、第Ⅳ'層は暗灰色粗砂でⅣ層中に部分的にブロック状に混入する。

遺構検出面として捉え得るのは第Ⅳ層上面であるが、今回は遺構及び遺物を検出することはできなかつた。第Ⅳ層は、河川堆積層のような明瞭な流れを想定できるものではないが、粘質砂層であり部分的な水流の影響による2次堆積土であることが推察された。そこで、調査区中央部全体で第Ⅳ層を約25cmほど掘り下げて遺物包含の有無を確認したが、遺物の出土はなかつた。調査面積は小さいのだが、結果的に工事予定地の約3分の1の面積を調査したことになり、工事予定地内に埋蔵文化財の所在は認められないと判断した。

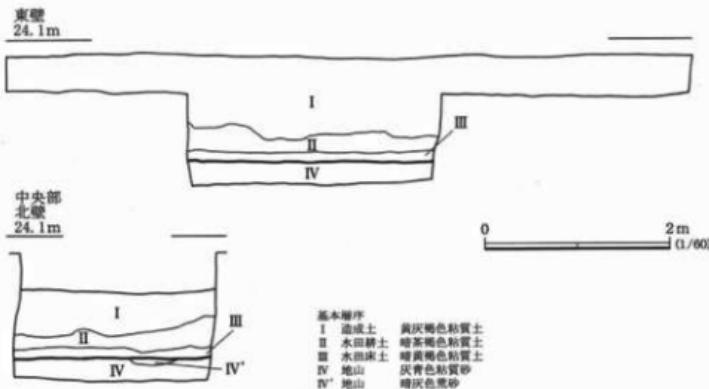


Fig.16 独身宿舎調査区土層断面図

(3) 国際交流会館調査区 (Fig.17・18, PL.6 (3)(4))
排水管布設の計画管路は、国際交流会館西端から、構内外の境界となる東西方向のブロック塀まで南に一直線に延びるものである。工事予定地の現況は芝生張りの国際交流会館前庭である。調査ではこの前庭に、排水管計画管路を中心東西方向に幅2.5m、南北方向には国際交流会館から南に約6m離れた位置からブロック塀の手前約2mまでの長さ7mの調査区を設定した。調査面積は17.5m²である。今回の調査では、河川及び水路を検出した。また、調査区の北西隅に搅乱がみられたが、これは昭和61年実施の国際交流会館新営に伴う試掘調査Aトレチーの一部と推定できる。

基本層序は、第Ⅰ層が黄灰褐色粘質土の造成土、第Ⅱ層が暗灰褐色粘質土の水田耕土、第Ⅲ-1層が黄茶色粘質土・第Ⅲ-2層が暗灰茶色粘質土の水田底土となる。第Ⅰ層は土壤改良が加えられているよう、土が固着しており、重機のバケットが滑ってなかなか

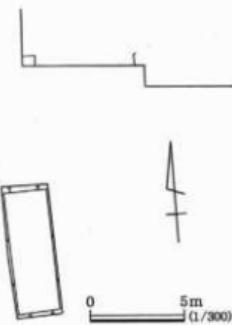


Fig.17 國際交流会館調査区
設定位置図

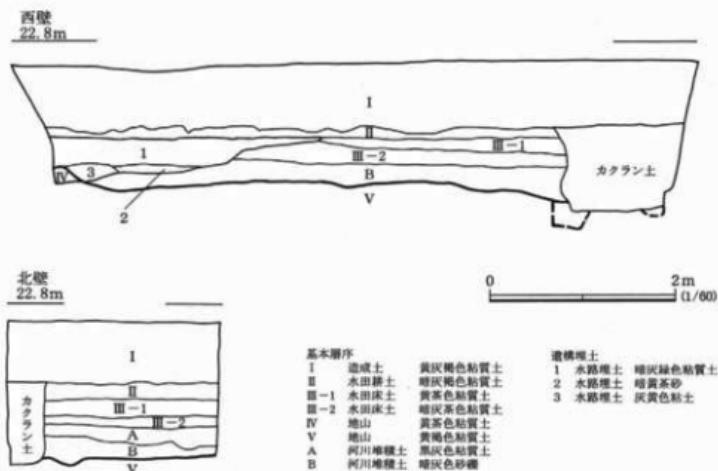


Fig.18 國際交流会館調査区土層断面図

か土を捕らえないため掘削に手間取った。第Ⅳ層以下が地山で、第Ⅳ層が黄茶色粘質土、第V層が黄褐色粘質土となる。A・B層は河川堆積土で、A層が黒灰色粘質土、B層が暗灰色砂礫である。A・B層は河川堆積土であるので、本来的には地山と称すべきものではないが、これらの土層、特にB層は今回調査区の全面に広がるものであり、A・B層の土色・土質から考えてこの土層を形成した河川は、昭和61年実施の国際交流会館新館に伴う試掘調査Aトレーナーで検出され、幅30m以上と推定された河川と同一のもの比定できる。そこで、堆積作用の大きさから判断して地山形成作用の一部として捉えることとした。B層は調査区西壁で見ると、北側で徐々に深くなっている。この様子は、北壁でも確認でき、北壁ではB層の上部にA層の堆積がみられる。広い河幅を持つため、川底の状態も一様ではなかったことが推察できる。旧地形から考えて、北西方向、すなわち現在の経済学部商品資料館の方向へ流れていると推定できる。

遺構としては調査区南半で水路を検出した。これは、第Ⅲ層の水田床土上面が検出面になることから、近世以降の水路と考えられる。調査区では東側の肩部をわずかに検出できただけであるが、旧地形から判断して流路方向は南南東から北北西と推定できる。人為的な溝であるのか自然流路であるのか不明瞭である。

遺物としては、調査区全体で少量の須恵器・土師質土器・弥生土器が出土しているがいずれも小片で図示できない。

(4) 小結

今回の調査では、調査面積が小さいこともあり、近世をさかのばる遺構は検出することができず、遺物の出土も少量にとどまった。しかし、独身宿舎調査区及び国際交流会館調査区の両調査地点で、水田耕土・水田床土が良好に残存していることを確認した。これにより両地点の周辺では、大学統合移転時造成による土地の削平が加えられておらず、旧地形の改変が最小限であることが判明した。標高の高い独身宿舎調査区では、吉田遺跡の低地部とは異なる地山堆積を見せており、昭和41年度に吉田遺跡調査団により実施された第Ⅱ地区の発掘調査で碁野寮から農学部附属家畜病院にかけて検出されているような、柱穴等の遺構が周辺に埋存している可能性が推定できる。今後とも施設整備計画にあたっては慎重に対応していく必要があろう。

(村田)

2 基幹環境整備（外灯新設）に伴う試掘調査

（1）調査の経過

外灯新設工事は、基幹環境整備の中でも重点的な項目として取り扱われており、ほぼ毎年予算化され計画的な整備がなされてきている。今年度は、南門から構内への構内幹線道路に沿った整備が計画された。計画は、野球場とサッカー場の間を通る道路の北西側の路肩に、外灯を新設するというものである。管路の起点が、平成6年度実施のグランド屋外照明施設新設に伴う発掘調査Aトレンチの位置にあたる照明塔であること、また管路が、昭和42年度に吉田遺跡調査団により発掘調査が行われた第Ⅲ地区南区を横断することから、これらの調査で検出した遺構に影響を及ぼすことが確実であった。このため、管路の敷設ルートの検討も含めた試掘調査が必要であるとの埋蔵文化財資料館運営委員会の判断により、埋蔵文化財資料館では10月9日から11月24日までの期間、発掘調査を実施した。

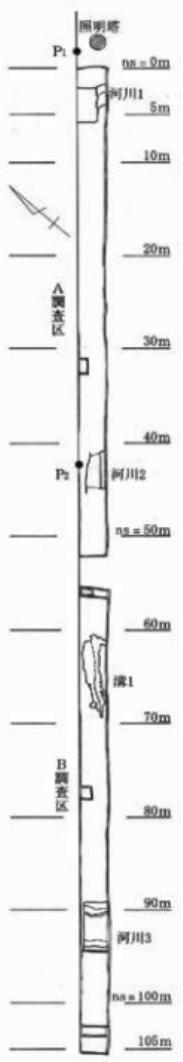
調査では、サッカー場南東縁辺に設置された排水側溝の南東縁に沿って東西幅3mの調査区を2つ設定し、北東側を南北長52mのA調査区、南西側を南北長50mのB調査区とした。この調査の平面基準については、調査区北西壁の設定ライン、すなわちサッカー場に既設されている排水側溝の南東縁により形成される南北方向の直線をns軸と設定した上で、A調査区北西隅を原点として南東方向への移動距離によって表示する。また、ns軸に直交する東西方向の直線をew軸として、ns軸同様にA調査区北西隅を原点とする。A調査区で河川1及び河川2を、B調査区で河川3及び溝1をはじめ多数の遺構を検出した。

（2）基本層序（Fig.21・24, PL8）

基本層序は次の順である。第Ⅰ層は褐灰
色粘質土・淡赤褐色砂質土（マサ土）によ
る表土である。第Ⅱ層は暗茶褐色粘質土・
暗灰緑色粘質土・砂礫土などの統合移転時
造成土で、調査区が長いためにそれぞれの
場所で土質は異なる。第Ⅲ層以下は地山と
なる。第Ⅲ層は黄灰色・黄灰褐色・黄茶褐色
シルトが中心であるが、B調査区ではns
=85m付近で青灰色シルトがみられる。B
調査区では、ns=90m付近から南西方向に
かけてには第Ⅲ層の暗灰色砂・暗黄灰色砂



Fig.19 調査区位置図



礫土がみられる。第Ⅲ層上面が遺構検出面であるため、基本的に第Ⅲ層以下の土層は遺構の周辺や遺構状況及び土層確認のための観察トレンチで確認しているだけである。第Ⅳ層はA調査区では青灰色シルトまたは青灰色粘土、B調査区では第Ⅳ'層の赤褐色粗礫となる。

調査区を設定した、構内幹線道路とサッカー場南東縁辺の既設排水側溝との間は幅約6mで、道路面はサッカー場グランドレベルよりも約1m高くなっている。その間は道路からサッカー場にかけて緩やかに傾斜する法面を形成している。第Ⅰ層及び第Ⅱ層の薄い堆積の下は直ぐに第Ⅲ層となり、地山検出面は法面と平行し南東-北西方向に傾斜している。このことから、法面は統合移転時造成に際して、削り取りにより形成されたことを推定できる。

(3) 遺構

3条の河川と1条の溝、大小の土坑と柱穴を検出した。調査後、遺構が完全に消滅するわけではないので、調査遺構の多くについて掘り込みは部分的であり、検出のみにとどめた遺構も多い。統合移転時造成による法面形成のために、遺構は概して南東側で残りが良く北西側で削平が大きい。また、A・B調査区北西側には溝状の搅乱があり、A調査区北東端では幅が大きく約2mである。調査区南西端に近づくと、幅は狭まり幅約60cmになる。これが、B調査区では幅約30cmになる。これは、この搅乱に3種類の内容が認められるからである。統合移転時造成の際に設けたと思われる素掘り仮設溝掘削による搅乱が幅約60~80cm、更に後の工事掘削による搅乱が幅約30~50cmである。前2者はA調査区で、後1者はA・B調査区でみられる。以下、掘り込みを加えた遺構について述べる。

河川1 (Fig.21, PL.7 (2)(3)(4)・8 (1)(2))

A調査区北東端で検出した。調査範囲では北西側及び北東側が搅乱されているため、河川の南肩を含む一部の検出である。搅乱は、北西側は上記の仮設溝掘削及び後の工事掘削によるもの、北東側はグランド照明塔の支柱基礎工事によるものである。このため、現況

吉田構内の試掘調査

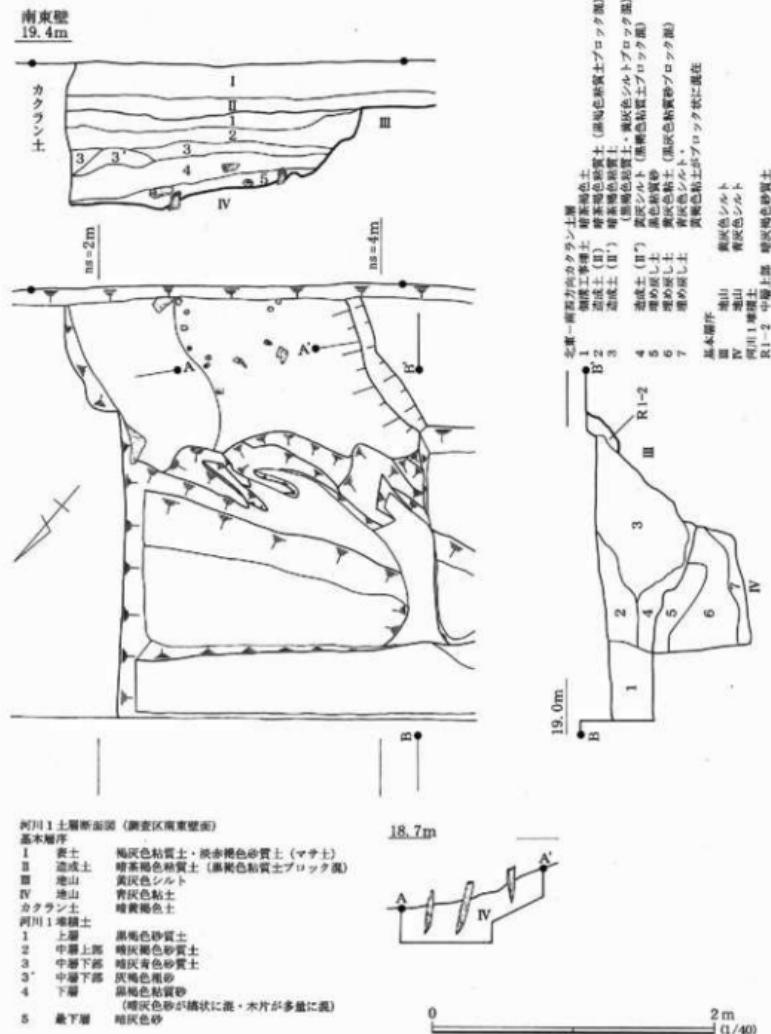


Fig.21 河川1平面図・断面図

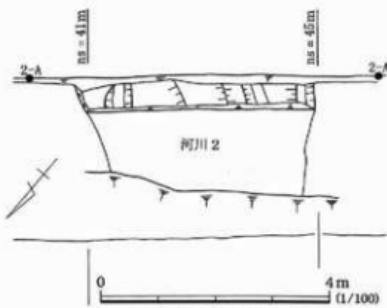


Fig.22 河川2平面図

で河幅約2m、延長約1.2m分を検出した。遺構検出面から最深部までの深さは約70cmである。検出した南肩の方向と、旧来の地形から推定すると、東から西への流路方向を持つと考えられる。また、河川1は平成6年度実施のグランド屋外照明施設新設に伴う発掘調査Aトレーニングで北肩を検出し、調査区外南側に広がる河川と同一のものであることは、2つの調査区の位置関係、河川埋土の堆積状況、出土遺物の内容から見えてほぼ確実である。平成6年度調査Aトレーニングの検出河川北肩は、搅乱が激しく完全な形での立ち上がりとしては確認し得ていない。しかし、今回の調査で検出した南肩と併せて、河川1の河幅は12m以上と推定できる。

遺構埋土は黒褐色あるいは暗灰褐色系統の砂質土と砂層で、全体を5層で構成するが不整合面はみられない。下層の4層と最下層の5層には流木が多量に含まれていた。河底には木杭が打ち込まれていた。直径3~6cmで河底から上方に約10cmほど残存する。断ち切った3本では河底から約15~30cmの深さまで打ち込まれていた。打ち込みの方向は河底に対して垂直ではなく、河底から肩部への立ち上がりに対して傾倒するような角度が付けられていた。調査範囲が狭いため、杭配列を検討できるほどの本数を検出してはいないが、杭の位置と打ち込み角度から考えて、河川の護岸施設のための杭ではないかと推定できる。杭の先端は、鋭く切り落とされて角錐状に仕上げられていた。遺物としては、弥生時代中期~古墳時代前期の土器が出土した。

河川1北西側の搅乱溝の埋土には、おそらくは本来河川1の埋土であったと推定できる黒色・黒灰色粘質砂が大量に含まれていた。この中には、多量の土器が含まれており、それは今回の調査で河川1から出土した土器量を凌ぐものであった。

河川2 (Fig.22・24, PL.8 (3))

A調査区南西寄りで検出した。河川1同様に北西側が搅乱されている。この遺構は、完掘は行わず、南東壁面に沿って設定した、幅20cmの観察トレーニングによる部分的な調査にとどめた。河川2は、検出面での河幅が3.4~4.2mで、南東壁面での深さは約50cmであることを確認した。遺構埋土は暗黄茶色砂礫土で遺物は出土しなかった。

吉田構内の試掘調査

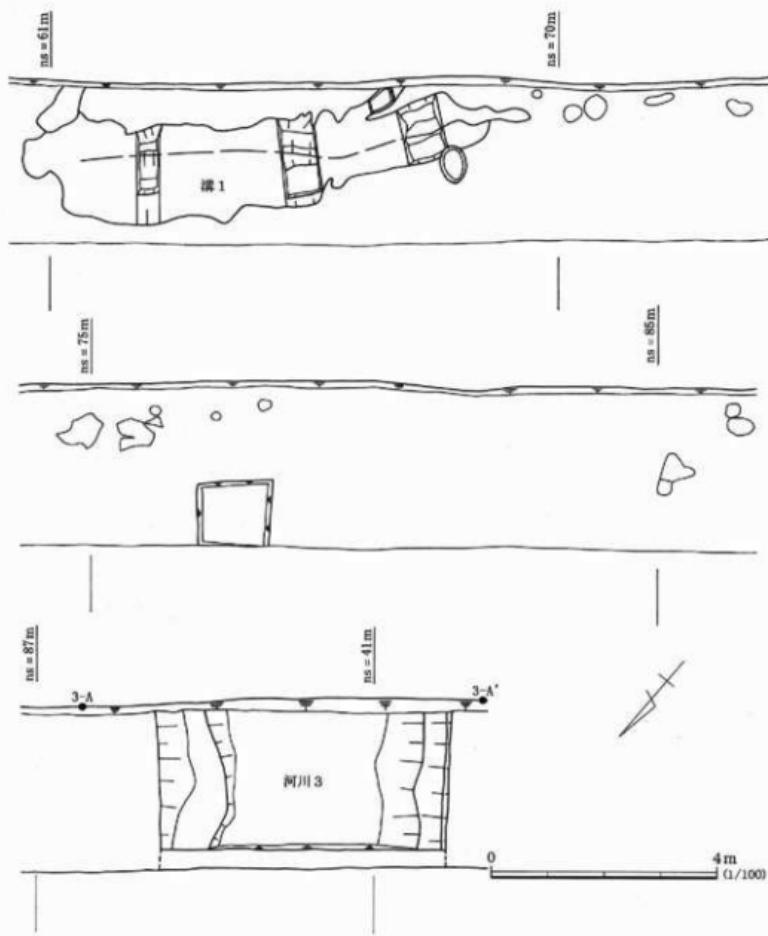


Fig.23 B 調査区遺構配置図

河川 3 (Fig.23・24, PL.8 (4))

B 調査区南西半で検出した。検出面での幅 5 ~ 6 m である。この遺構も完掘はしていないが、南東壁面で計測して、検出面から約 55cm の深さまでを調査した。流路の方向は南東

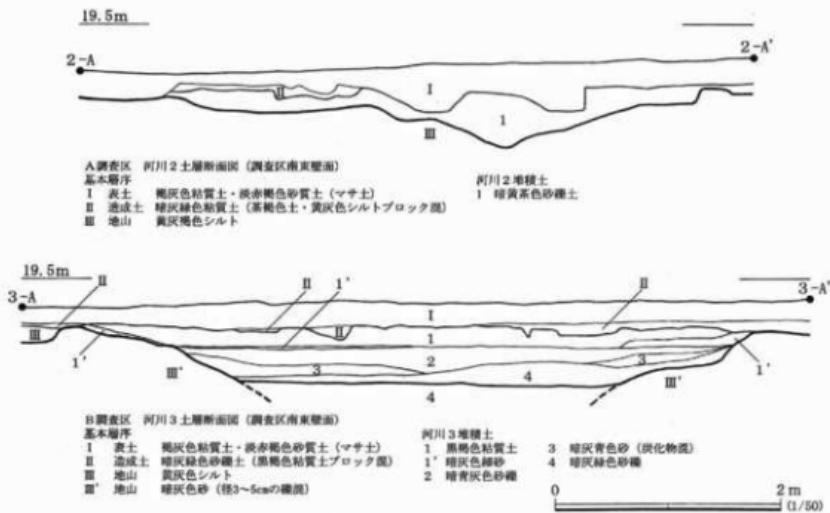


Fig.24 河川2・3土層断面図

から北西と考えられる。3-AA'の土層ではわかりにくいか、遺構の北東肩は主として第Ⅲ層：黄灰色シルトにより形成され、南西肩は第Ⅲ'層：暗灰色砂によって形成されている。これは、この遺構が南西方向に大きく広がる河川に包括できる可能性を示すと考えられる。逆に、そのように包括した上で、その一時の流路をまとまりとして捉えることが可能であったため、特に河川3として抽出したものある。埋土は、最上層は黒褐色粘質土であるが、以下は暗灰色系統の砂礫層では水平に堆積している。河川埋土3層では、小さな粒状の炭化物が混じる。縄文時代晩期～弥生時代前期にかけての土器が出土した。

溝1 (Fig.23)

B調査区北東半で検出した。検出面での遺構規模は幅約1～2mで、検出面からの深さは最深部で約10～20cmである。総延長約9mを検出した。この遺構も観察トレーナーを設定しての部分的な調査にとどめた。新旧2本の溝が切り合い関係にあるようだが、遺構上部が大きく削平されたと考えられ遺構の残りは非常に悪い。溝断面で観察しても2本の溝を明確には分離できなかった。遺物は少なく時期の明確なものは出土していないが、埋土の状況から判断して近世の耕作溝と考えられる。

(村田)

(4) 遺物

河川3出土遺物 (Fig.25, PL.9・10(1))

河川3からは縄文時代後～晩期の土器と弥生土器が少量出土した。土器は磨滅した小片が大半であり、時期と器種が判別できるものは少ない。

1は、巻貝による擬縄文とその下にL.Rの縄文を施す。岩田第二類aに相当する九州の西平系土器と考えられる。2～6は胴部片である。2は巻貝による条痕、3～6は内外面に二枚貝条痕を施す。7は深鉢の底部である。底面が外に張り出している。内外面の調整はナデである。8は浅鉢もしくは壺の底部である。底面がくぼんでおり、風化が激しい。9は弥生時代前期前半の壺の胴部片である。外面はタテハケ後ナデ、内面はナデで、段部に板状工具による刻目を施す。接合痕は確認できない。10は敲石である。円礫を使用しており、表は部分的に研磨を施す。左側の欠損部も再調整の後使用しており、敲打痕が認められる。石質は結晶片岩である。

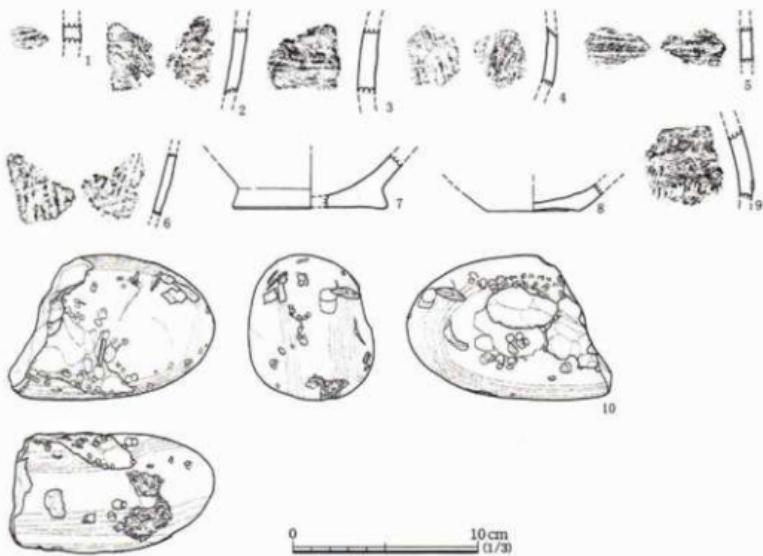


Fig.25 河川3出土遺物実測図

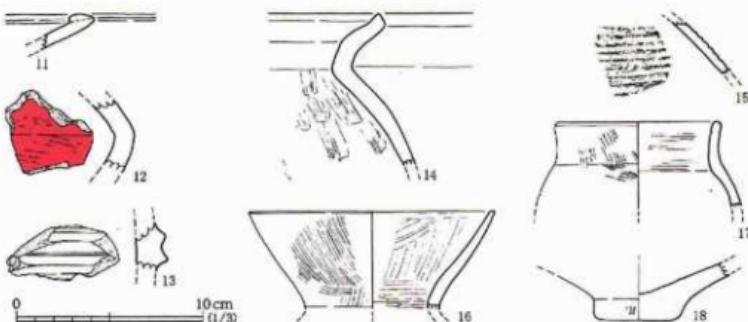


Fig.26 河川1出土遺物実測図

河川1出土遺物 (Fig.26, PL.10 (3))

河川1からは縄文時代晩期から古墳時代前期の土器が少量出土した。

11は縄文時代晩期の浅鉢口縁部である。口唇部をカマボコ状に肥厚させている。12は弥生時代中期の壺胴部である。外面に丹塗り磨研を施す。13は弥生時代中期の垂下口縁壺の胴部である。14は弥生時代後期の壺口縁部である。口唇部は横ナデにより跳ね上げ、内面には削りを施す。15は弥生時代終末期～古墳時代前期のタタキ壺である。外面に1条2.5mm、1cm/2本のタタキを施す。16は土師器壺の口縁部である。口縁部は内湾ぎみに立ち上がり、内外面にミガキを施す。17は土師器壺の口縁部である。口縁部が直立する。外面にタテハケ、内面にミガキを施す。18は土師器壺の底部である。底面は突出ぎみの平底で、風化が激しい。この他に姫島産黒曜石剥片1点が出土した。

河川1攪乱溝出土遺物 (Fig.27～29, PL.11～14)

河川1攪乱溝からは、本来河川1に含まれていたと考えられる土器が大量に出土した。

19・20は須恵系壺の胴部である。胴部にM字状の貼付突帯を持ち、内外面にヨコナデを施す。21,22は跳ね上げ口縁の甕である。23・24は北部九州系の器台である。時期は弥生時代中期と考えられるが、後期に下る可能性もあり今後の検討を要する。23は口縁部、24は胴部で、同一個体と考えられる。外面はタテミガキ、内面はナデを施し、指頭痕が残る。25～28は弥生時代後期の壺口縁部である。外面には煤が付着する。29～32は弥生時代後期後半～古墳時代初頭の甕である。いずれも外面は被熱しており、煤が付着する。29は胴部外面にタテハケ、内面にケズリを施す。30は胴部外面にタテハケ、内面にヨコハケを施す。31は胴部外面にタテハケ、内面にヨコハケを施す。32は胴部内外面にヨコハケを施す。

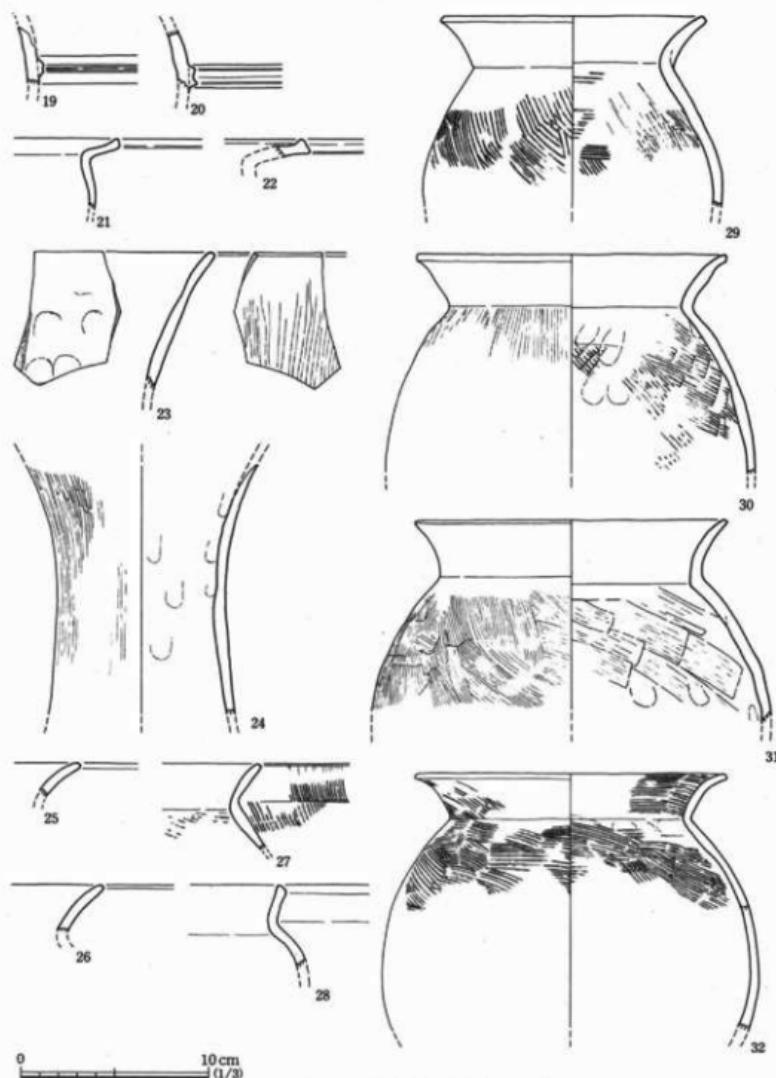


Fig.27 河川1 掘乱溝出土遺物実測図①

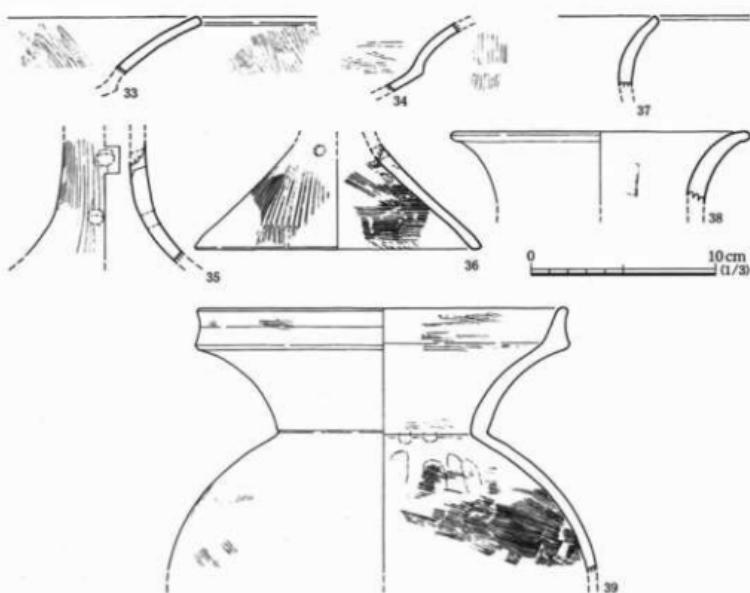


Fig.28 河川1号乱溝出土遺物実測図②

33・34は弥生時代後期の高環壺部である。内外面にミガキを施す。35は高壺の脚部である。上下2段の透かし孔が認められ、四方透かしと考えられる。36は高壺の裾部である。透かし孔が1ヶ所残存する。外面にタテミガキ、内面にヨコハケを施す。37・38は土師器直口壺の口縁部である。39は類例が少ないが、在地系の複合口縁壺の最終形態と考えられる。口縁部の立ち上がりは短く、緩やかに外反する。胴部は球形で、頸部には浅い段を持つ。胴部外面は被熱している。内面にはヨコハケを施す。40～46は山陰系の壺である。45以外は屈曲部がヨコナデによって鋭く突出する。40～43は胴部上半が残存し、口縁部内外面にヨコナデ、胴部外面にヨコハケ、内面にケズリを施す。外面には部分的に煤が付着する。47・48は弥生時代終末～古墳時代初頭のタタキ壺で、外面には煤が付着する。47は口唇部に1条の沈線を施す。胴部外面には1条2mm、1cm/3本のタタキを施す。48は1条2mm、1cm/4本のタタキを施す。49は土師器壺の底部である。底部は上底で、外面にはナデを施す。内面には煤が付着する。50・51は弥生時代後期～古墳時代初頭の在地

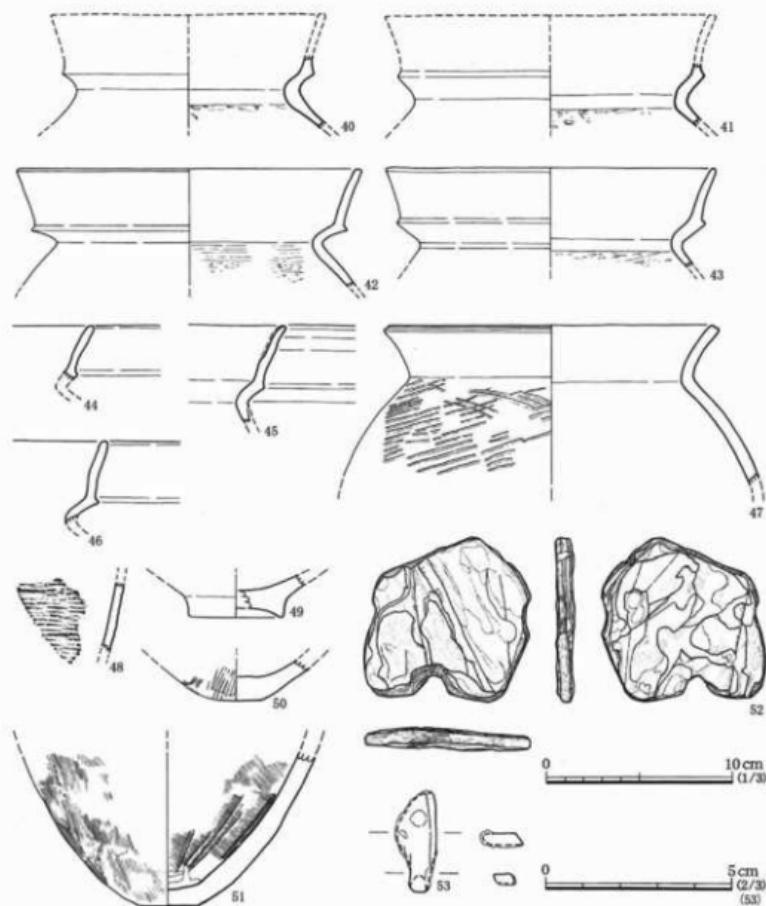


Fig.29 河川1番乱溝出土遺物実測図③

系壺の底部である。いずれも小さな平底で、外面にタテハケを施す。50は内面が風化しており、51はヨコハケを施す。52は石錘である。左右の抉りは浅いが、摩耗している。下部にも抉りを1ヶ所持つ。石質は結晶片岩である。53は用途不明鉄製品である。最大長2.7cm、最大幅1.15cm、最大厚0.33cmで、先端は欠損していると考えられる。（田畑）

(5) 小結

今回の調査の成果は、河川1の検出により、平成6年度実施のグランド屋外照明施設新設に伴う発掘調査Aトレンチで、北肩しか検出していなかった河川の規模をほぼ確定することができたこと、調査区を南北に長細く設定したことで、周辺の地山堆積状況や遺構の分布状況、さらには本学統合移転時造成による削平の状況を広範に確認できたことである。

地山の土層堆積については、従来吉田遺跡での遺構検出面となっている黄灰色あるいは青灰色シルトが広範に所在することを確認した。ただし、調査区の南西端周辺ではやや状況を異にすることがわせて明らかとなった。

B調査区南西寄りでみられる第Ⅲ'層：暗灰色砂は河川堆積土である。B調査区ではns=89~94.5mで河川3を検出しているが、この河川は、ns=89m付近を北東側の肩として、南西方向に長大な河幅をとる、更に大きな河川の一時の流路と考えられる。この大河川による大規模な堆積作用は、第Ⅲ'層：黄灰色・青灰色シルトと同様に吉田地区における地山形成作用の一つと位置付けられよう。この大河川の堆積作用によって、ns=90m付近から南西方向にかけては、第Ⅲ'層のような砂質土または砂礫土が地山を形成することになるのである。先後関係では第Ⅲ'層に遅れる堆積と考えられる。B調査区の南西端で第Ⅲ'層以下65cmまで掘り下げて確認した土層では、第Ⅲ'層：暗黄灰色砂礫土、第Ⅳ'層：赤褐色粗礫、第V'層：黄赤褐色砂礫、第VI'層：黒褐色礫であった。第Ⅳ'層は直径6cm程度、第VI'層は直径3cm程度の礫層でいずれも酸化鉄分が強く付着しており、現在も伏流水があるらしく激しい湧水がみられた。昭和42年度に吉田遺跡調査団により行われた第Ⅲ地区南区の発掘調査では、やはり大きな河川が検出されている。調査区の位置関係が明確ではないため不確定の要素を残すが、今回の調査で検出した河川3及びns=90m付近から南西方向にかけての大河川は、昭和42年度調査の河川と同一のものである可能性が高いといえよう。

今回の調査では、各種の遺構を検出することができたが、遺構密度はそれほど濃厚とは言えない。その一因には、統合移転時造成による法面形成により、多くの遺構が消滅している可能性が考えられる。逆に、今回の調査地点より約1.5mほど高所に位置する野球場備では、遺構の残存状況が良好であることを推定できる。

河川1の調査では、遺構北西側の既設排水側溝南東側に沿った搅乱が大規模であることが判明した。そこで、外灯配線の管路をこの搅乱部分に埋設するように工事計画を策定することで、埋蔵文化財への影響を最小限におさえることができると考えられた。関連部局との協議によりこの工法が採択されるに至ったことを付記しておく。

(村田)

Tab.3 出土遺物観察表（土器）

法量（　）は復元値

遺物番号	出土遺物	層位	基盤	形状	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	主な構造内部	胎土	備考
1	河川3	3層	縄文土器 深鉢	胴部				①灰青色 ②黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	兔貝による模擬文 縄文LX 天地迷の可能性あり
2	河川3	3層	縄文土器 深鉢	胴部				黒褐色	1~5mmの砂粒を含む	外表面に兔貝条痕
3	河川3	3層	縄文土器 深鉢	胴部				にぶい黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	外表面に二枚貝条痕
4	河川3	3層	縄文土器 深鉢	胴部				灰青褐色	1~3mmの砂粒を含む	外表面に二枚貝条痕
5	河川3	3層	縄文土器 深鉢	胴部				①暗褐色 ②黒褐色	1~3mmの砂粒を含む	外表面に二枚貝条痕
6	河川3	3層	縄文土器 深鉢	胴部				①灰褐色 ②暗褐色	1~3mmの砂粒を含む	外表面に二枚貝条痕
7	河川3	3層	縄文土器 深鉢	底部				灰黄褐色	1~5mmの砂粒を含む	
8	河川3	2層	縄文土器 浅鉢	底部				①にぶい黄色 ②灰褐色	1~3mmの砂粒を含む	風化が激しい
9	河川3	1層	弥生土器 鉢	胴部				①灰褐色 ②灰褐色	1~3mmの砂粒を含む	
11	河川1	1層	縄文土器 浅鉢	口縁部				にぶい黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	風化が激しい
12	河川1	1層	弥生土器 鉢	胴部			51	①赤色 ②灰白色	1~3mmの砂粒を含む	外表面に丹赤り磨研を施す
13	河川1	床面清掃時	弥生土器 鉢	胴部				①灰褐色 ②灰褐色	1~5mmの砂粒を含む	
14	河川1	1層	弥生土器 鉢	口縁部~胴部				①灰褐色 ②にぶい黄褐色	1~5mmの砂粒を含む	
15	河川1	1層	土師器 鉢	胴部				灰白色	1~3mmの砂粒を含む	
16	河川1	清掃時	土師器 鉢	口縁部	(13.0)			灰褐色	1~3mmの砂粒を含む	
17	河川1	清掃時	土師器 鉢	口縁部~胴部	(9.0)			①にぶい黄褐色 ②灰褐色	1~3mmの砂粒を含む	
18	河川1	1層	土師器 鉢	底部		51		①にぶい黄褐色 ②灰褐色	1~3mmの砂粒を含む	
19	河川1	復元庫	弥生土器 鉢	胴部				灰褐色	1mmの砂粒を含む	北部九州系
20	河川1	復元庫	弥生土器 鉢	胴部				灰白色	1~3mmの砂粒を含む	北部九州系
21	河川1	復元庫	弥生土器 鉢	口縁部				にぶい黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	
22	河川1	復元庫	弥生土器 鉢	口縁部				灰白色	1~3mmの砂粒を含む	
23	河川1	復元庫	弥生土器 蕎麦台	口縁部				にぶい黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	24と同一
24	河川1	復元庫	弥生土器 蕎麦台	胴部				にぶい黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	23と同一
25	河川1	復元庫	弥生土器 鉢	口縁部				にぶい黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	
26	河川1	復元庫	弥生土器 鉢	口縁部				①赤色 ②にぶい黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	外表面に腐食帶
27	河川1	復元庫	弥生土器 鉢	口縁部~胴部				①赤色 ②灰褐色	1~3mmの砂粒を含む	外表面に腐食帶
28	河川1	復元庫	弥生土器 鉢	口縁部~胴部				①暗褐色 ②灰褐色	1~3mmの砂粒を含む	外表面に腐食帶
29	河川1	復元庫	弥生土器 鉢	口縁部~胴部	(13.7)			にぶい黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	外表面に腐食帶 風化が激しい
30	河川1	復元庫	弥生土器 鉢	口縁部~胴部	(16.6)			にぶい赤褐色	1~3mmの砂粒を含む	外表面質熱 保付帯
31	河川1	復元庫	弥生土器 鉢	口縁部~胴部	(16.6)			淡褐色	1~3mmの砂粒を含む	外表面に保付帯
32	河川1	復元庫	弥生土器 鉢	口縁部~胴部	(16.1)			灰褐色	1~3mmの砂粒を含む	外表面質熱 保付帯
33	河川1	復元庫	弥生土器 高环	环部				①にぶい黄褐色 ②灰褐色	1~3mmの砂粒を含む	
34	河川1	復元庫	弥生土器 高环	环部				①灰褐色 ②灰褐色	1~3mmの砂粒を含む	
35	河川1	復元庫	弥生土器 高环	环部				①にぶい褐色 ②にぶい褐色	1~3mmの砂粒を含む	円形邊かし穴
36	河川1	復元庫	弥生土器 高环	环部	(15.6)			①灰褐色 ②にぶい褐色	1~3mmの砂粒を含む	円形邊かし穴

平成8年度山口大学構内の試掘調査

遺物 番号	出土遺跡	発　生	器　類	測定	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	色　面 (①～④の組合せ)	法量(　)は復元値	
									切削部	側面
27	河川1	復元土	土器部　底	口縁部				灰白色	1～3mmの砂粒を含む	
38	河川1	復元土	土器部　底	口縁部	(16.2)			①に赤い青緑色 ②明黄褐色	1～3mmの砂粒を含む	
39	河川1	復元土	土器部　底	口縁部～削部	(20.0)			橙色	1～3mmの砂粒を含む	外表面熱　爆付層
40	河川1	復元土	土器部　底	口縁部～削部				①に赤い青緑色 ②に赤い褐色	1～3mmの砂粒を含む	山崩系 外表面に爆付層
41	河川1	復元土	土器部　底	口縁部～削部				に赤い青緑色	1～3mmの砂粒を含む	山崩系 外表面に爆付層
42	河川1	復元土	土器部　底	口縁部	(18.4)			に赤い青緑色	1～3mmの砂粒を含む	山崩系　外表面に爆付層 45.3円～
43	河川1	復元土	土器部　底	口縁部～削部	(17.4)			弱黃褐色	1～3mmの砂粒を含む	山崩系 外表面に爆付層
44	河川1	復元土	土器部　底	口縁部				に赤い青緑色	1～3mmの砂粒を含む	山崩系 外表面に爆付層
45	河川1	復元土	土器部　底	口縁部				①に赤い青緑色 ②褐色	1～3mmの砂粒を含む	山崩系
46	河川1	復元土	土器部　底	口縁部				に赤い青緑色	1～3mmの砂粒を含む	山崩系　外表面に爆付層 45.3円～
47	河川1	復元土	土器部　底	口縁部～削部	(18.0)			褐色	1～3mmの砂粒を含む	山崩系　外表面に爆付層 風化が激しい
48	河川1	復元土	強化土 土器部　底	削部				①褐褐色 ②に赤い青緑色	1～3mmの砂粒を含む	外表面に爆付層
49	河川1	復元土	土器部　底	底部	(5.4)			灰褐色	1～3mmの砂粒を含む	内面に爆付層
50	河川1	復元土	強化土 土器部　底	底部	(2.6)			灰褐色	1～3mmの砂粒を含む	
51	河川1	復元土	強化土 土器部　底	底部	(3.4)			①に赤い青緑色 ②灰褐色	1～3mmの砂粒を含む	外表面に爆付層

Tab.4 出土遺物観察表（石器）

遺物 番号	出土遺跡	発　生	器　類	最大径 (cm)	最小径 (cm)	平均径 (cm)	重量 (g)	石　質	法量(　)は現存値	
									右　部	左　部
19	河川3	3層	鍬　石	11.0	7.9	6.7	826.1	結晶片岩	欠損部を再調整の後、使用している	
32	河川1	複乱土	石　鍬	8.9	8.85	1.05	124.8	結晶片岩	抉り部が摩耗している	

Tab.5 出土遺物観察表（鉄製品）

遺物 番号	出土遺跡	発　生	器　類	最大径 (cm)	最小径 (cm)	平均径 (cm)	重量 (g)	法量(　)は現存値	
								右　部	左　部
33	河川1	複乱土	不明	(2.7)	1.15	0.83	1.0	先端が欠損している	

3 吉田構内農学部附属農場排水管布設に伴う試掘調査

(1) 調査の経過

吉田構内の排水設備は敷設後30年以上経過しているため、平成8年8月山口市水道課の検査と指導が行われた。その結果、農学部附属農場の排水設備について補修が指示されたため、新たな排水管の布設工事が行われることとなった。調査区は、吉田地区への統合移転の際、第IV地区と呼ばれていた地区に相当する。調査区から東へ約20mの地点に位置する牛舎敷地では当時教育学部に在職していた小野忠熙氏らにより発掘調査が行われた。調査の結果、弥生時代の溝や土坑、古墳時代の竪穴住居などが検出され、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器などが出土したとされている^b。その後、平成7年度に牛舎の新營に伴って発掘調査が行われたが、顯著な遺構・遺物は認められなかった。しかし、その他に調査データではなく、地下の状況については不明な点が多い。

以上の状況を踏まえ、埋蔵文化財資料館運営委員会は協議の結果、試掘調査が必要であると判断した。これを受け、埋蔵文化財資料館は平成9年2月18日から2月28日にかけて発掘調査を実施した。調査面積は約93m²である。なお、調査区は牛舎から堆肥を常時排出する都合上、通路を確保する必要があるため、北調査区と南調査区に二分した。

(2) 基本層序 (Fig.32～34, PL.16(1)(3)・17(3))

調査区における基本層序は、次の順である。第I層：パラス（表土）、第II層：暗灰色、茶褐色、赤褐色粘質土を主とする大学統合移転時の造成土、第III層：暗灰色、暗茶褐色粘質土（水田耕土）、第IV層：暗黄灰色、暗黄灰色粘質土を主とする水田床土、第V層：暗黄赤茶褐色・暗茶褐色粘質土を主とする遺物包含層、第VI層：黄茶褐色、灰黄色、黄茶色粘質土（地山）、第VII層：岩盤風化土である橙黄褐色、黄灰青色粘質土（地山）、第VIII層：黄青灰色岩盤（地山）

第I層は調査直前までのパラス敷の路面に係わるもので、第II層は統合移転時の造成土である。

北調査区では第II層が約150cmと厚く、その直下が第VII層の地山となり、包含層や



Fig.30 調査区位置図

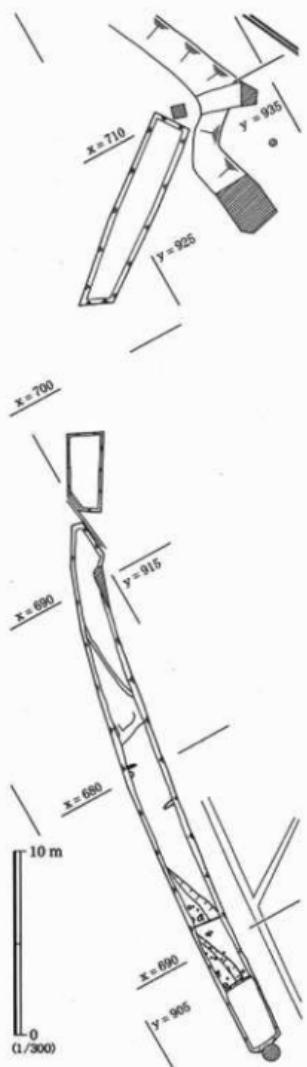


Fig.31 調査区設定位置図

遺構は検出できなかった。

南調査区でも $x = 689$ m付近まで厚さ約20cmの第I層の直下で第VII層を検出しており、統合移転時の削平が激しさがうかがえる。 $x = 689$ m付近より南では、第I層の直下が、厚さ約10~20cmの第II層、水田層である第III層・IV層、地山である第VI層の順となる。第III層は厚さ約10~25cmで、削平により部分的に残存しているにすぎない。第IV層は厚さ約5~25cmである。 $x = 680$ m付近から南においては、第VI層が西側へ緩やかに落ち込んでおり、第V層が厚さ約5~30cm堆積していた。第V層は土師器、須恵器のほか、磨滅した土師器壇と皿の小片を含んでおり、古墳時代後期から中世までの時期幅を持つ。

(3) 遺構 (Fig.32・33, PL.16 (2)・17 (1) (2))

南調査区では、地山を検出面として $x = 678$ ~ 690 m付近で統合移転前の水田に伴う水田暗渠・溝を検出した。また、 $x = 668$ ~ 673 m付近では、第VI層を検出面として、古墳時代~中世の柱穴とピット群を検出した。ピットの直径は3~10cmで、調査区が狭いため明確な規則性はみいだせなかつたが、横列の可能性がある。深さは西側の壁面沿いのもので約40cm、その他が約15cmで、埋土はいずれも黒褐色粘質土であった。時期については、遺物がほとんど出土していないため明確でないが、上を第V層に覆われていること、埋土の色調から中世以前と考えられる。

(4) 遺物 (Fig.35, PL.17 (4))

第V層から古墳時代後期~中世の土器が少量出土した。1は提瓶の胴部である。外面にカキメを施す。内面には回転ナデを施す。2は須恵器高壺の壺部で

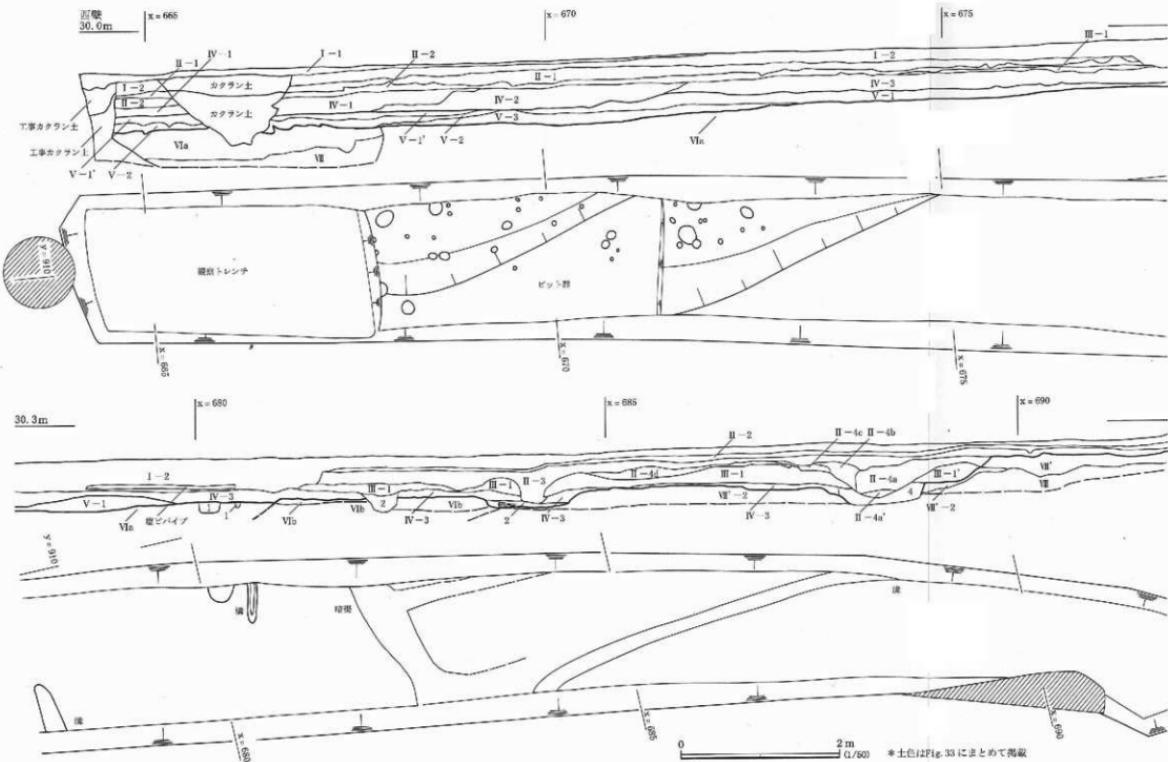
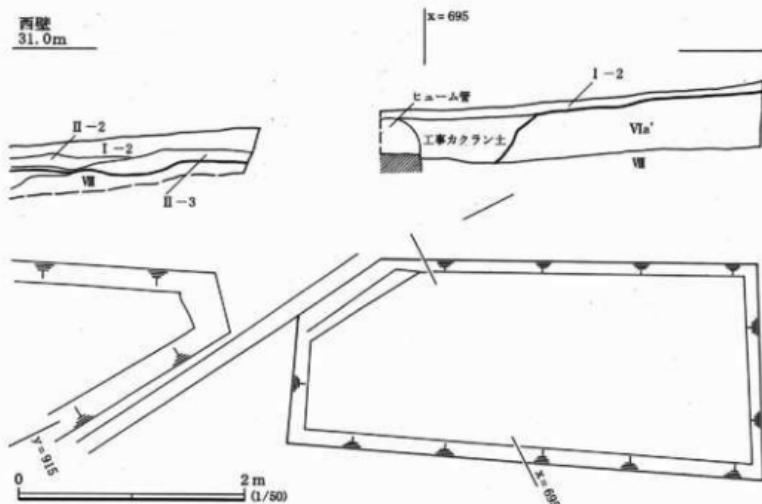


Fig.32 南調査区遺構配置図・西壁土層断面図①

吉田構内の試掘調査



I - 1	表土	パラス (径2~3cm程度)	IV - 1	水田床土	暗黃灰色粘質土 (薄褐色粘質土ブロック混)	VII	地山	棕黃褐色粘質土 (弱酸風化土)
I - 2	表土	パラス (径5cm程度)	IV - 2	水田床土	暗黃灰色粘質土	VI' - 1	地山	灰灰青色粘質土 (弱酸風化土)
II - 1	造成土	暗灰色・黒褐色粘質土 (風層)	IV - 3	水田床土	暗黃褐色粘質土	VI' - 2	地山	灰灰青色粘質土 (弱酸風化土)
II - 2	造成土	赤褐色粘質土	IV - 3'	水田床土	灰灰青色粘質土	VI'	地山	黃褐色粘質土 (弱酸風化土)
II - 3	造成土	黑褐色粘質土	V - 1	包含層	暗黃褐色粘質土	VII	地山	黃青灰無機
III - 1	造成土	褐褐色粘質土 (薄褐色粘質土ブロック混)	V - 1'	包含層	暗黃褐色粘質土			
III - 2	造成土	褐褐色粘質土	V - 2	包含層	無褐色粘質土			
III - 3	造成土	茶褐色粘質土	V - 3	包含層	暗黃茶褐色粘質土			
III - 4	造成土	暗褐色粘質土	VIa	地山	黃茶褐色粘質土			
III - 5	造成土	暗褐色粘質土	VIb	地山	灰黃色粘質土			
III - 6	造成土	暗褐色粘質土	VIa'	地山	黃茶褐色粘質土 (石英凹窪混)			
III - 7	造成土	暗褐色粘質土	VIb'	地山	黃茶褐色粘質土 (石英凹窪混)			
IV - 1'	水田土	暗褐色粘質土	VIc	地山	暗黃褐色粘質土			
IV - 2'	水田土	暗褐色粘質土						

Fig.33 南調査区造構配置図・西壁層断面図②

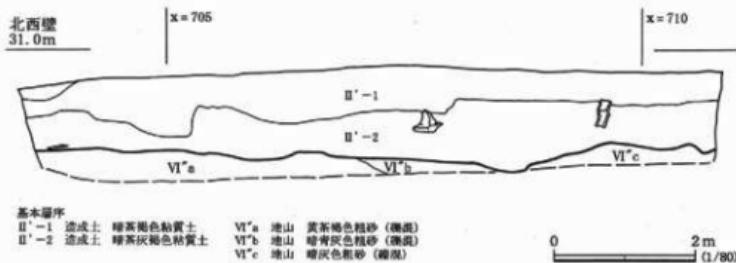


Fig.34 北調査区北西壁層断面図

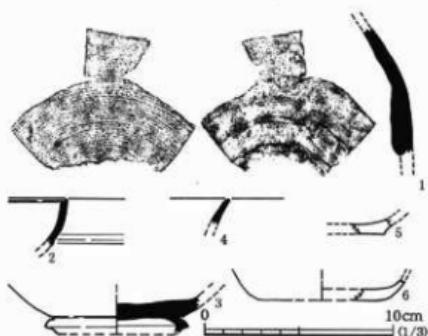


Fig.35 第V層出土遺物実測図

ある。外面に1条沈線を施す。3は須恵器壺の底部である。接地面を欠損する。5は土師器塊の底部である。底部外面は糸切りである。風化が激しい。6は土師器皿の底部である。底部は糸切りである。風化が激しい。

(5) 小結

今回の試掘調査の結果、北調査区では、統合移転時の造成による削平が激しく、遺構・遺物は検出できなかったが、南調査区で古墳時代後期～中世の

遺物包含層とピット群を検出した。これらは統合移転前の水田造成によって、少なからず削平を受けていると考えられる。また、調査面積が狭いため、詳細については、明らかにすることことができなかった。しかし、今回の調査によって、牛舎から調査地付近まで、遺構・遺物が存在する可能性が高まった。統合移転前の水田及び統合移転時の造成による消失の程度は不明であるが、今後の調査が待たれる。また、調査地と貯水池を挟んだ西側の、通称「もり山」の斜面には横穴墓が存在するといわれており、関連が注目されよう。

(田畠)

[注]

- 1) 山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』(山口大学、1976年)
- 2) 石川卓美『平川文化散歩』(山口市平川公民館、1972年)

Tab.6 出土遺物観察表（土器）

注量（）は復元量

遺物番号	出土層別	層次	器種	底径	口径 (cm)	底径 (cm)	厚さ (mm)	①外側 ②内側	地 土	備 考
1	南調査区	V-3層	須恵器 壺身	銅部				①灰オリーブ色 ②青灰色	1~2mmの砂粒を含む	
2	南調査区	V-1層	須恵器 環窓	坪窓				灰	粗砂をわずかに含む	
3	南調査区	V-1層	須恵器 環身	底部		(5.2)		明青灰色	粗砂をわずかに含む	
4	南調査区	V-1層	須恵器 環身	口縁部				明青灰色	1~2mmの砂粒を含む	
5	南調査区	V-1層	土師器 塊	底部				①黒褐色 ②褐灰色	1~2mmの砂粒を含む	底部糸切り
6	南調査区	V-1層	土師器 盆	底部		(6.4)		にぶい黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	底部糸切り

第4章 平成8年度山口大学構内の立会調査

第1節 吉田構内の立会調査

1 陸上競技場鉄棒取設工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 G-18

調査期間 平成8年8月6日

調査面積 約5.5m²

調査結果 陸上競技場の北東隅の区画に計画された鉄棒の取設工事に際して立会調査を行った。工事は、サッカー・ラグビー場北西隅の照明塔（グランド屋外照明施設新設に伴う発掘調査Cトレンチ相当部分）支柱から北西方向に約15~19m、北東方向に約13~46mの範囲の中で行われた。調査は、既設及び新設鉄棒の支柱の基礎部分、平面形50cm×50cm、深さ70cmについて合計22ヶ所で行った。調査の結果大まかに2種類の土層堆積状況を確認した。1つは現地表下約20cmまでが表土で、その下がすぐに灰褐色砂礫土もしくは青灰色または黄灰色シルトの地山になる堆積状況である。もう1つは現地表下約20cmまでが表土、約20~40cmが黒褐色粘質土、約40~70cmが灰褐色砂礫土となる堆積状況である。後者の黒褐色粘質土は弥生土器を含む包含層で、下部に砂礫土が統くことから河川の堆積作用により形成されたと考えられる。平成7年度に陸上競技場北西側と南西側で行った公共下水道布設に伴う発掘調査で検出した遺構、及びサッカー・ラグビー場と陸上競技場の境界で行った基幹環境整備（ATMネットワークケーブル埋設）工事に伴う立会調査で検出した河川との関連性が推察される。したがってこれらの所見より、現在の陸上競技場のほぼ全域にわたって、遺構及び遺物包含層が広範に分布している可能性が強くなったということができる。（村田）



Fig.36 調査区位置図

2 農学部附属農場排水溝改修工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 R - 11

調査期間 平成 8 年 9 月 11 日

調査面積 約 2.2m²



Fig.37 調査区位置図

調査結果 工事は幅約 40cm、長さ約 5.5m、深さ約 40cm の規模で行われた。工事掘削は全て造成土の範囲内であった。調査の所見及び現状の地形から判断すると、調査地点の周辺は統合移転時造成による削平と盛土がかなり大規模になされていると判断できる。したがって工事は埋蔵文化財には全く影響を与えることはなかった。

(村田)

3 樅野寮バリカー新設工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 O - 20・21

調査期間 平成 8 年 10 月 23 日

調査面積 約 7 m²



Fig.38 調査区位置図

調査結果 逆 U 字形のバリカー 13 基の基礎部分、平面形 50cm × 50cm、深さ 30cm について 26ヶ所、及び標識の基礎部分、平面形 70cm × 70cm、深さ 80cm について 1ヶ所の立会調査を行った。バリカー基礎部分は、既設櫟野寮スロープ工事による厚さ約 10cm のコンクリート舗装の下が厚さ約 20cm のグリ石となる。標識部分は、厚さ約 10cm の腐葉土の下が厚さ約 15cm のマサ土となり以下は統合移転時造成土及び側溝工事による搅乱土となることを確認した。

(村田)

4 サッカー場給水管取替工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 H-19・20, I-19

調査期間 平成8年10月28日

調査面積 約12m²

調査結果 遺跡保存地区の北西に位置する体育器具庫の西側をめぐる既設埋設給水管が、経年劣化のために破裂しサッカー場周辺に水があふれだした。このため、緊急にこの管の取り替えが必要となった。既設管の取り替えではあるが、遺跡保存地区に隣接する地点であること、及び平成6年度グランド屋外照明施設新設に伴う発掘調査、グランド屋外照明施設配線埋設工事に伴う立会調査、昭和58年度ラグビー場防球ネット新設に伴う発掘調査等の隣接地区の調査で住居跡などの遺構が検出されていることから、工事に際しては特に慎重を期す必要があるため、立会調査を実施することとした。このため工事は、既設管理設時の既掘削範囲内で行うこととし、工事開始時からの埋蔵文化財資料館の立ち会い及び指示のもと工事掘削を行った。調査では、幅約40cm、深さ約30~60cm、総延長約30mの既設管埋設溝の掘り方壁面の土層堆積状況を観察した。調査の結果、ほぼ全面において、現地表下約15~25cmまでがマサ土の表土で、その下に厚さ約10~25cmの遺物包含層、さらにその下が黄褐色及び青灰色シルトの地山層となる土層堆積状況を確認した。このシルト層は、吉田遺跡の低標高部において遺構検出面となる土層である。遺物は小片で図示できるものはないが、現地表下の非常に浅いところで、遺物包含層、地山層を確認したことは重要である。現在、体育器具庫の北西側には三角形の空閑地が広がるが、今回の立会調査及び隣接地区的諸調査での所見を総合すると、この地区には、住居跡をはじめとする遺構及び遺物包含層が広範に埋存していることは確実といえる。将来にわたって、この地区的施設整備等による現状変更に際しては、その計画段階から慎重に対処する必要性があることがいっそう明確になった。

(村田)



Fig.39 調査区位置図

5 基幹環境整備（共通教育センタースロープ・テラス新設）に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 J・K-17

調査期間 平成 9 年 1 月 27・30 日

調査面積 約 14.3m²

調査結果 共通教育センター講義棟の南側にスロープ及びテラスを新設する工事が計画された。これに伴い、新設予定地内の樹木の移植、既設の電話ボックスと掲示板の移設が必要となったため、これらの移植及び移設予定地について立会調査を行った。

樹木移植に際しては、講義棟に近接する直径約 1.5m の平面円形になる移植坑 2 地点の土層を観察した。それぞれ現地表下約 80~100cm までが表土及び造成土、約 100~120cm が水田耕土、約 120cm 以下が暗茶褐色粘質土の地山となる。ここでは造成土から底部裏面にヘラ記号のある須恵器坏 1 点を検出したが遺構は検出できなかった。以上の層序は、講義棟に接して建物基礎から南へ約 3m の範囲内で同様であると考えられた。この所見に基づき、同範囲で行われ、基礎部分の掘削が深さ 30cm 以内にとどまる電話ボックスの移設工事及びスロープ・テラス新設工事は、埋蔵文化財への影響は皆無であると判断した。

掲示板は共通教育センター複合棟の東側に移設されることになった。支柱の基礎部分、幅約 90cm、長さ約 12m について立会調査を行った。層序は現地表下約 20cm までが表土及び造成土、約 20~50cm が水田耕土と思われる暗褐色土、約 50cm 以下が厚さ約 10~15cm の灰暗青色砂を主とする河川堆積土であった。ただし、場所によっては造成による搅乱が深部に

まで及んでいたりと層序は一様ではない。調査範囲の最北部は搅乱の影響が少なく、灰暗青色砂の下で厚さ約 15cm の遺物包含層を検出することができた。この包含層はやはり河川堆積による暗灰褐色粗砂で、縄文土器の小片を含んでいた。この包含層は、調査範囲の周辺に広く分布していることが推定されるため、今後とも周辺の工事等に際しては慎重に対処する必要がある。包含層の下は黄茶褐色シルトの地山であった。



Fig.40 調査区位置図

(村田)

6 九田川河川局部改良工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 E-14

調査期間 平成9年2月19日

調査面積 約18m²

調査結果 この工事は昭和62年度から着手された護岸改修工事で、吉田遺跡の北限を知る手がかりとなるので、継続的に立会調査を行っている。今年度は長さ9m分の工事で、川底からの高さ約6.5mに及んだ。今回の調査範囲では、既設プールの工事に伴うと考えられる搅乱が、地表下約2mの深さにまで及んでいたため、埋蔵文化財の有無を確認することはできなかった。(村田)



Fig.41 調査区位置図

7 農学部附属農場道路舗装工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 K-12・13, L-12, M-11

調査期間 平成9年2月24日～3月6日

調査面積 約27.6m²

層序と造構 (Fig.43・44, PL.18)

農学部の牧草地と実験水田の間を通り、大学本部と吉田寮を結ぶ農道の路面透水舗装工事に際して立会調査を行った。牧草地と実験水田には現状で大きな標高差がある。実験水田は大学統合移転時造成により、大学会館側から延びる丘陵を大きく削り取った後に作られたと考えられる。この工事で削り取られた残りの丘陵の先端部が、農道部分にあたる。そこで、丘陵上面の削平の程度と、埋蔵文化財の残存状況の確



Fig.42 調査区位置図

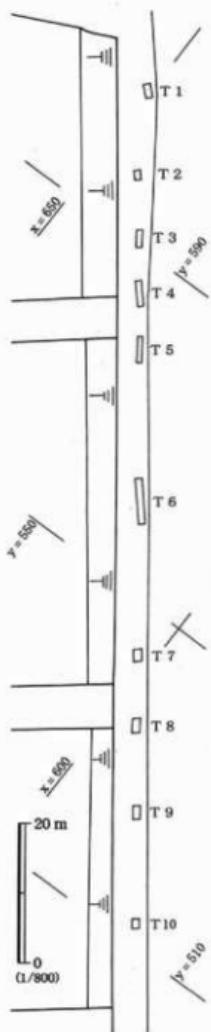


Fig.43 トレンチ設定位置図

認をこの調査の目的とした。調査では、道路上面のすき取りに先行して、合計10ヶ所の確認トレンチを設定し、北東から南西の順番に1~10のトレンチ番号を付した。

1トレンチは平面形約2m×1mで深さ約1m、現地表下約80cmまでが表土と黄橙褐色土の移転時造成土でその下が赤褐色土の地山になる。2トレンチは平面形約1.5m×1mで、深さ約1m、検出した第I~第IV層は後述の4トレンチと同様である。

2トレンチ現地表下1mで、第IV層上から掘り込まれ雑木を詰め込み透水管代わりにした暗渠を検出した。3トレンチは平面形約2.5m×1mで深さ約1m、2トレンチと同様の状況であった。

4トレンチは、平面形約3.8m×1mで深さ約2m、現地表下約5cmまでがバラスの第I層：表土、約5~40cmまでが黄橙褐色土の第II層：移転時造成土、約40~70cmまでが暗褐色土の第III層：水田耕土、約70~105cmまでが第IV層：水田床土で暗褐色土の上層と暗褐色土の下層の2層に分かれる。約105~190cmまでは溝状落ち込みの遺構埋土となる。黒褐色系統の土層で、微妙な違いはあるが土質から4層に分離できる。約105~135cmが1層/黒褐色粘質土で上面に小礫を含む、約135~150cmが2層/黑色シルト質粘土、約150~160cmが3層/黒褐色砂礫、約160~190cmが第4層/黒灰色粘土となる。埋土1・2層からは弥生時代から古墳時代の土器が出土した。約190~200cmまでは灰黃白色粘土の第V層：地山で堆積は以下に統く。第V層は八女粘土の可能性がある。

溝状落ち込みは、約3.4mのトレンチ底面幅いっぱいに検出されており、トレンチの外側にさらに広がっている。遺構平面図は3層上面での検出状況で、3・4層は工事の都合により部分的な調査にとどまっている。1・2層は、北西壁面土層中央部付近が最も深くなる凹字状の堆積を示すが、第V層上面は西から東へと深くなっている。このため、溝状落ち込みという遺構名称は不適当かもしれないが、トレンチが遺構内的一部を観

吉田構内の立会調査

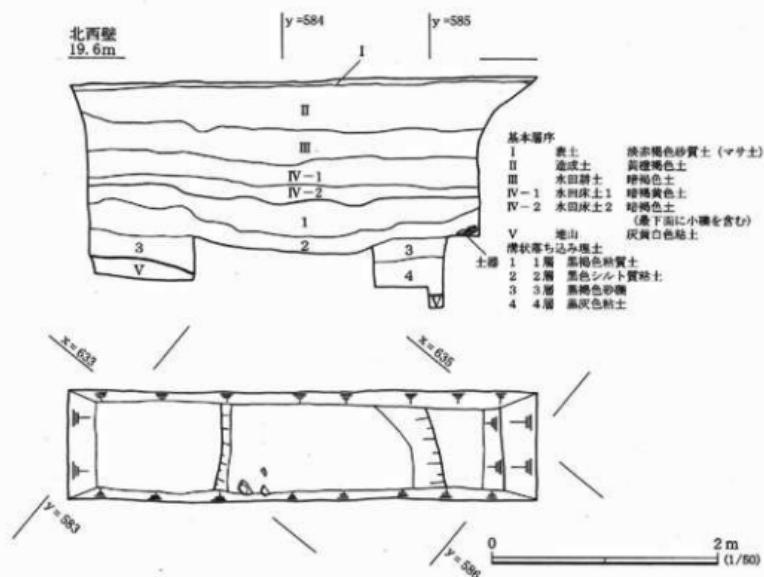


Fig.44 4 トレンチ平面図・断面図

察しているに過ぎない状態では遺構の性格について正確な把握は困難なので仮称しておく。

5～10トレンチでは、第I～第IV層の基本層序はほぼ同様であるが、統く土層の始まる深さと状況が異なる。5トレンチは平面形約3.8m×1mで現地表下約1.1mからが砂礫層、6トレンチは、平面形約6m×1mで現地表下約60cmで近世用水路の検出面となる。用水路はトレンチ内で東側の肩しか検出できず正確な幅は不明であるが2m以上になる可能性がある。また湧水のため正確な深さも確認していない。埋土からは近世の遺物が出土した。7トレンチは、平面形約2m×1mで現地表下約1.5mからが砂礫層、8トレンチは平面形約2m×1mで現地表下約1.8mからが砂層、9トレンチは平面形約2m×1mで現地表下約2mからが細砂層になる。10トレンチは工事の都合で掘削を深さ1m以内にとどめている。

遺物は、4・6トレンチ以外では2・5・7・8トレンチで出土しているが各1～2点である。5・7～9トレンチで確認した砂礫層・砂層は、一応、今回調査における地山と考えている。しかし、成因については旧谷地形による扇状地状の堆積が想定でき、より深部に遺構・遺物が埋存する可能性は否定できない。

(村田)

遺物

2 トレンチ出土遺物 (Fig.45-1, PL.19)

1は土師器皿の底部である。風化が激しい。

4 トレンチ溝状落ち込み出土遺物 (Fig.45-2~9・Fig.46・47, PL.19~22)

4 トレンチからは、溝状落ち込みの埋土1・2層から、弥生時代中期から古墳時代前期の土器が多数出土した。

弥生時代中期 (Fig.45-2~9・Fig.46, PL.19・20)

2は内折口縁壺の口縁部である。立ち上がりは欠損しており、内面に貼付突帯を持つ。3・4は垂下口縁壺の頸部で、いずれも1条の貼付突帯を持つ。3には刻目に布目を持つ。5は在地系壺で、須玖系土器の鋸先口縁の影響により、口縁部上面を肥厚させる。6は5と同一個体の頸部片である。2条以上の貼付突帯を施す。外面はタテハケ、内面にはヨコミガキを施す。7~9は垂下口縁壺である。いずれも垂下部に1条の山形文を施す。9は口唇部がヨコナデにより、上部に摘み出される。口縁部と頸部は接合しないが、3条以上の

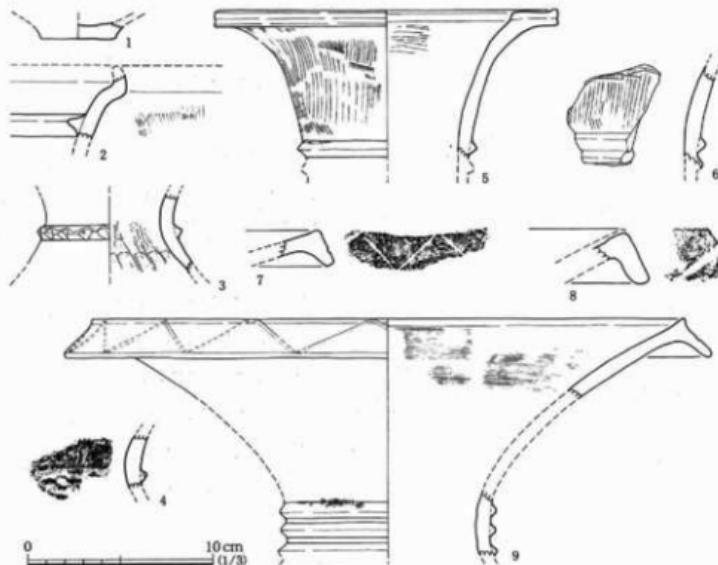


Fig.45 2 トレンチ出土遺物実測図・4 トレンチ溝状落ち込み出土遺物実測図①

貼付突帯を持つ。

10~13は跳ね上げ口縁の壺である。口縁部内外面にヨコナデを施す。13は外面にタテハケを施す。14は口唇部を丸くおさめる壺、15~17は口唇部に面を持つ壺で、いずれも口縁部内外面にヨコナデを施す。14・17は胴部が緩やかに張り出しており、14は胴部内外面にヨコナデ、17は胴部外面にタテハケ、内面にナデを施す。18・19は壺の底部で、内外面にヨコミガキを施す。20・21は壺の底部である。20は上底で外面・底面にナデを施す。内面は剥落している。21は外面がタテハケ、内面・底面にナデを施す。

弥生時代後期 (Fig.47 - 22~36, PL.21・22)

22は複合口縁壺の立ち上がり部である。外面に鋸歯文と竹管文を施す。23は壺の頸部である。頸部に刺突文を施す。24~31は壺である。24・26~29は口縁部が短く、胴部が緩やかに張り出す。いずれも風化しているが、胴部外面はタテハケ、内面はナデである。25は口唇部に面を持つ。口縁部内面にヨコハケが残る。30は口縁部が短く、胴部が強く張り出す。胴部外面は風化により調整は不明。内面に右から左方向のケズリを施す。31は舌状の

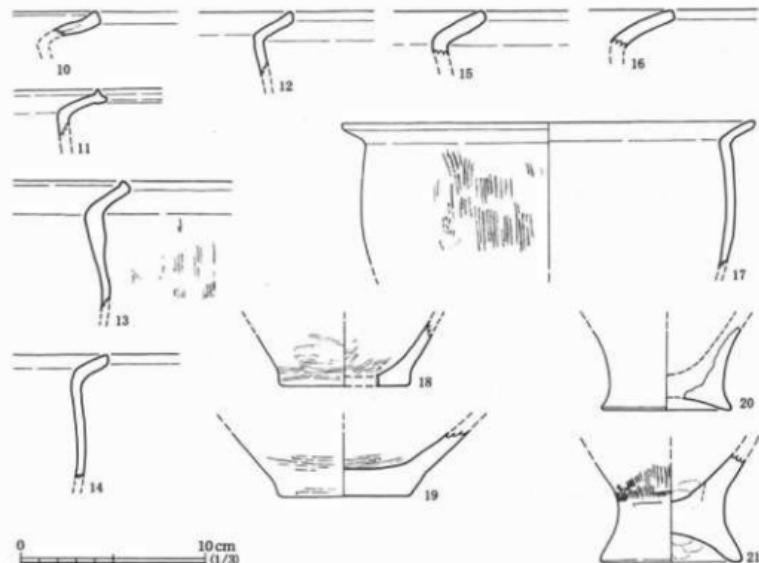


Fig.46 4 トレンチ溝状落ち込み出土遺物実測図②

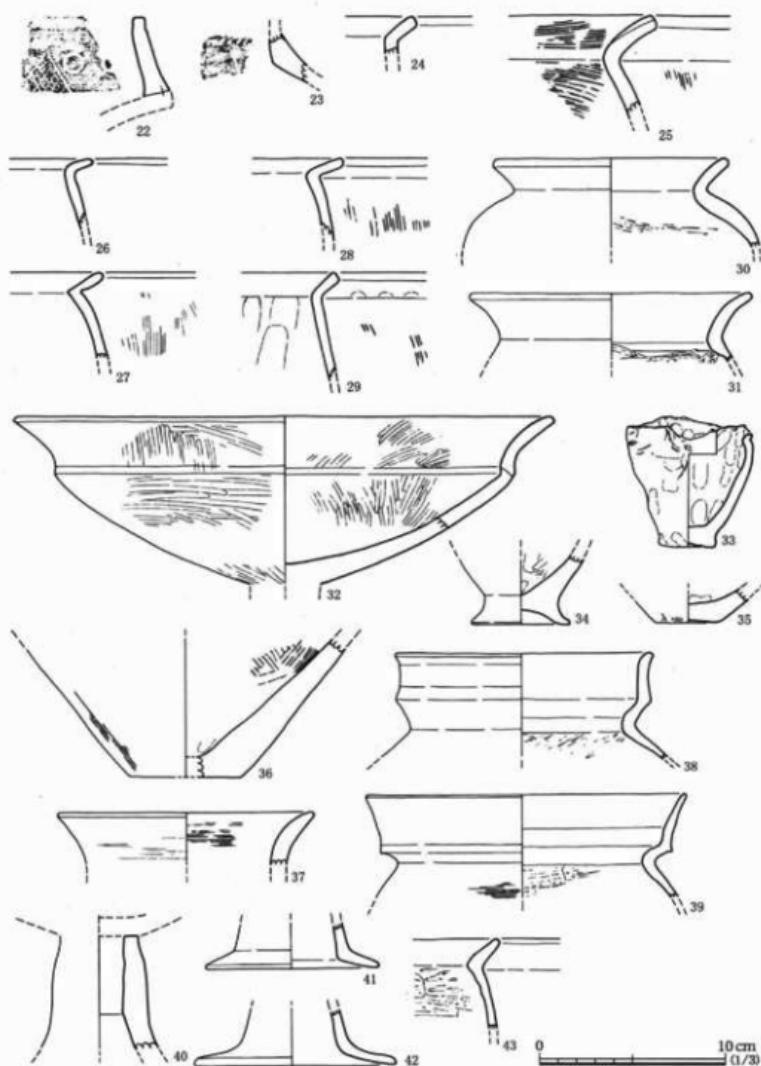


Fig.47 4 トレンチ溝状落ち込み出土遺物実測図③

口縁部を持つ。外面はヨコナデ、胴部内面は左から右方向と下から上方向のケズリを施す。古墳時代初頭に下る可能性もある。32は高坏坏部である。上半部と下半部は接合しないが、図上復元した。口縁部が直線的に短く外反する。内外面にミガキを施す。33はミニチュアの鉢である。完形で口縁部は歪んでおり、1ヶ所に注口部を設けている。全面ナデを施し、指頭痕、爪痕が顕著に残る。他時期の可能性もある。34～36は底部である。34は鉢の底部である。上底で、外に張り出す。外面・底面にナデを施し、内面に板状工具もしくは茎状の工具によるナデを施す。35は壺の底部である。わずかに上底となる。内外面ナデで、外面にタテハケを残す。36は壺の底部である。平底で内外面にタテハケを施す。

古墳時代前期以降 (Fig.47 - 37～43, PL.21・22)

37は直口壺の口縁部である。口唇部を丸くおさめ、外面にヨコナデ、内面にタテハケを施す。38・39は山陰系壺である。38は口唇部を折り曲げて外反させる。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面はヨコハケ、内面にはケズリを施す。40は高坏の脚部である。坏部との接合面で剥離する。風化が激しい。41・42は高坏の裾部である。端部を丸くおさめ、内外面にナデを施す。43は鉢の口縁部である。口縁部が短く直線的に外反する。胴部外面は風化により調整は不明。胴部内面は右から左方向のケズリを施す。

崩落土除去時・第Ⅲ層出土遺物 (Fig.48 - 44～47, PL.23)

44は須恵器壺の胴部である。外面にカキメ、内面にナデを施す。45～47は土師器塊である。45・46は低い高台を持つ。47は高台を持たない。風化が激しい。

5トレンチ第Ⅳ層出土遺物 (Fig.48 - 48・49, PL.23)

48・49は近世磁器である。48は白磁の仏飯器である。素地は白色、釉は灰白色で内底面に少量の砂が付着する。外底面は露胎である。在地系か。49は肥前産染付皿である。内面

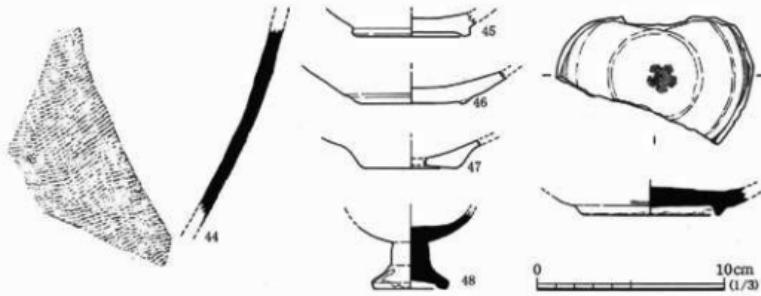


Fig.48 4・5トレンチ出土遺物実測図

の中心からややずれた位置に五弁花をあしらう。内底面を蛇ノ目状に釉剥ぎし、疊付も釉剥ぎする。18世紀後半。

6 トレンチ近世用水路出土遺物 (Fig.49・50-65, PL.23・24)

6 トレンチからは統合移転直前まで機能していた用水路の埋土から、近世の土器類が出土した。このうち、56~61は排土採集資料であるが、状況から用水路からの出土と考えられる。なお、図示したもの以外に擂鉢の胴部片、陶器臺の胴部片、萩焼、唐津系陶器の小片が出土した。これらの出土土器の時期は18世紀後半から19世紀と考えられる。

50は土師質土器の底部で、底面に回転糸切り痕が残る。在地産と考えられる。51~53は土師質陶器の臺で、いずれも在地産と考えられる。51は臺の口縁部である。口縁部を外側に折り曲げてヨコナデを施す。外面はナデ、内面はヨコハケ後ナデを施す。52は底部である。外面は不定方向のハケの後ナデ、内面はヨコハケを施す。53は口縁部である。口縁部を外側に巻き返して、ヨコナデにより、端部を平滑にする。外面はタテハケ後ナデ。内面にはミガキを施す。54~56は瓦質粗陶器である。54は器種は不明だが、火入れの可能性がある。上部は断面アンコ状を呈する。外型を用いて成型したものか。内面は回転ナデを施す。55・56は同一個体と考えられる。外面はヨコナデの後、スタンプ文を施す。口縁部内面にはヨコナデを施す。胴部内面はヨコナデ後ナデを施し、指頭痕とスタンプ時の突出がみられる。57は瓦質土器の羽釜である。外面は鈎を貼り付けた後に、ヨコナデを施す。内面は風化している。

58・59は施釉陶器である。58は瓶である。外面には回転ケズリを施す。2.5Y 8/4(淡黄)と10YR 5/4(にぶい黄褐)~2.5Y 6/4(にぶい黄)の二彩を施した後に透明釉をかける。葵筒状の底部で、高台は削りだしている。59は土瓶の底部である。内面のみに施釉する。

60~64は磁器である。60は染付皿である。内面に草花文をあしらう。肥前系。61は染付碗で、うがい茶碗か。内外面に施釉し、内面に風景画を染付ける。62は染付皿である。内外面とも白色不透明の釉を施す。内底面は蛇の目状の釉剥ぎし、重ね焼き時の癒着痕を残す。肥前系。63は染付の碗である。全面に施釉し、疊付を釉剥ぎする。内外面に染付を行う。在地系と考えられる。64は染付瓶である。外面上半に蜻唐草文、下半に雷文を染付ける。疊付はやや雑に釉剥ぎする。内面は無釉で一部釉が飛散する。在地系と考えられる。19世紀。

65は軒平瓦である。中心飾りには、五葉文の下に1点の点珠、脇に二葉の唐草文を配している。瓦当面には範傷が認められる。瓦当の外縁上端には甘い面取りを施す。瓦当裏には強いヨコナデ、平瓦部下面にはヨコナデを施す。焼成は良好で、胎土には、石英、長石のほかに雲母を大量に含んでいる。

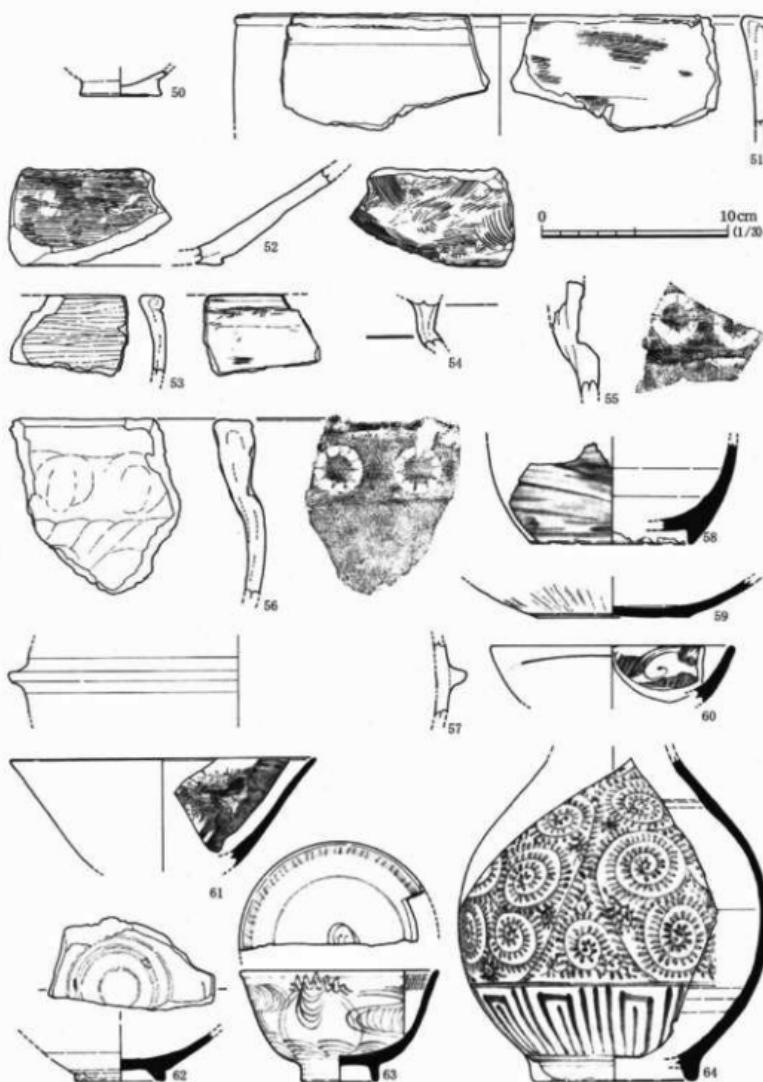


Fig.49 6 トレンチ近世用水路出土遺物実測図

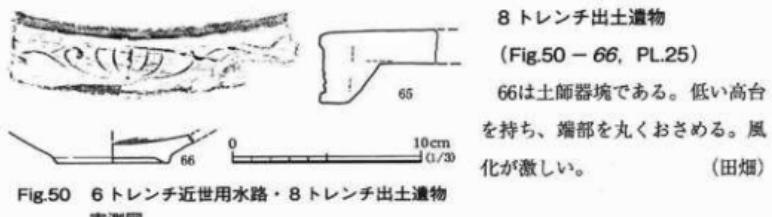


Fig.50 6 トレンチ近世用水路・8 トレンチ出土遺物
実測図

8 トレンチ出土遺物

(Fig.50-66, PL.25)

66は土師器塊である。低い高台を持ち、端部を丸くおさめる。風化が激しい。
(田畠)

まとめ

4 トレンチの溝状落ち込みは、トレンチを遺構内に設定した形となったため、詳細な遺構の規模や性格を把握できなかった。現時点では、南東の丘陵頂部の大学会館側から北西の丘陵麓部へ向かう大きな落ち込みとして捉えておく。これは、あるいは谷状と表現した方が良いかもしれない。大学会館新営に伴う発掘調査では、調査区から北西方向へ開析する谷地形が指摘されている。今回検出した遺構は、このような大きな谷地形に包括される、より小さな地形の一部と位置付けて、谷地形と区別する意味から溝状と仮称しておく。

6 トレンチの用水路には木杭による護岸がなされていた。本部裏給水管埋設に伴う発掘調査第Ⅰ調査区西端では、素掘りと考えられる近世大溝が検出されている。用水路の敷設方向は近世大溝の方向と一致しており、同一遺構の可能性もあるが、両者の検出地点にやはり距離があり、護岸の有無といった差異もみられるため関連性を指摘するにとどめる。

大学移転時造成による丘陵上の削平についてはほとんどみられず、むしろほぼ全域にわたって盛土がなされている状況を確認した。特に7~9トレンチでは盛土が厚い。このため、調査区一帯の旧来の地形に由来すると考えられる土層を確認することができた。

1 トレンチ以外で検出した第Ⅲ・第Ⅳ層の黒褐色系統の土層は、全般的に判断してそれぞれ水田耕土・水田床土としている。しかし、各トレンチで微妙に土質が異なり、場所によっては遺物包含層との関連も考えられる。5・7~9トレンチで確認した砂礫層・砂層の地山は、谷地形に由来する堆積土であろう。

今回の調査によって、丘陵上部に位置する大学会館北西に広がる牧草地、特に今回の調査区に近い部分では、旧地形が良好に残存することを想定できるようになった。また、谷地形に伴う堆積作用を考えると、かなりの厚さにわたる遺物包含層の存在や地中の深い場所での遺物包含層あるいは遺構の存在も推定できる。したがって、今後の施設整備計画にあたっては、埋蔵文化財の保護に十分な注意が必要と考えられる。
(村田)

Tab.7 出土遺物観察表（土器）

法量()は復元値

遺物 番号	出土遺物	層 位	形 態	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	色 調 (外見的外観)	地 土	備 考
1	2トレンチ		黒褐色土	土解器 瓦	底部	(40)		①灰褐色 ②淡黄褐色	1mmの砂粒を含む	風化が激しい
2	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	口縁部				灰黄色	1~3mmの砂粒を含む	風化が激しい
3	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	頭部				①灰白色 ②淡黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	貼付実測上の範囲に布目を持つ
4	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	頭部				に近い黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	
5	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	口縁部 (184)				①に近い黄褐色 ②淡黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	6と同一個体
6	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	頭部				に近い黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	
7	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	口縁部				に近い黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	
8	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	頭部				に近い黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	
9	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	口縁部 ~頭部 (320)				灰黄色	1~3mmの砂粒を含む	
10	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	口縁部				灰黄色	1~3mmの砂粒を含む	
11	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	口縁部				灰褐色	1~3mmの砂粒を含む	
12	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	口縁部 ~頭部				黑褐色	1~3mmの砂粒を含む	
13	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	口縁部 ~頭部				①淡黄色 ②に近い褐色	1~3mmの砂粒を含む	
14	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	口縁部 ~頭部				に近い黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	
15	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	口縁部 ~頭部				①灰黃褐色 ②に近い黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	
16	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	口縁部				に近い黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	
17	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	口縁部 ~頭部 (224)				に近い黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	
18	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	底部	(7.1)			①灰褐色 ②に近い黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	
19	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	底部	(7.1)			に近い黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	
20	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	底部	(7.0)			①に近い黄褐色 ②灰褐色	1~3mmの砂粒を含む	
21	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	底部	(7.7)			灰褐色	1~3mmの砂粒を含む	
22	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	口縁部				灰黄色	1~3mmの砂粒を含む	外側に網面文と竹管文
23	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	頭部 ~頭部				に近い黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	外側に刻印文
24	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	口縁部				に近い黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	
25	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	口縁部 ~頭部				①に近い黄褐色 ②に近い褐色	1~3mmの砂粒を含む	
26	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	口縁部 ~頭部				に近い黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	風化が激しい
27	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	口縁部 ~頭部				①灰褐色 ②淡黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	
28	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	口縁部 ~頭部				①灰褐色 ②淡黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	風化が激しい
29	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	口縁部 ~頭部				に近い黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	
30	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	口縁部 ~頭部 (124)				①に近い黄褐色 ②淡黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	
31	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	口縁部 ~頭部 (152)				①灰褐色 ②淡黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	外側に縦文有
32	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 高环	坏部 (286)				に近い黄色	1~5mmの砂粒を含む	
33	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 瓢(ミニチュア)	口縁部 ~底部	6.8	31	7.0	①灰褐色 ②淡黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	変形 口部あり 外側に刻文あり
34	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 瓢	底部	5.3			に近い黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	
35	4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	弥生土器 直	底部	3.4			淡黄色	1~3mmの砂粒を含む	

平成8年度山口大学構内の立会調査

法量()は復元値

遺物名	出土場所	層・段	基盤	年ば	口径(cm)	高さ(cm)	径(cm)	色・形 ①外観内面	断・土	備考
36 4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	先史土器 壺	胴部～ 底部		(6.0)			①灰青褐色 ②にぶい黄褐色	1～3mmの砂粒を含む	
37 4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	土師器 盆	口縁部	(13.8)				灰青褐色	1～3mmの砂粒を含む	
38 4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	土師器 壺	口縁部～ 胴部	14.2				灰青褐色	1～3mmの砂粒を含む	山鹿系
39 4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	土師器 壺	口縁部～ 底部	(17.6)				にぶい黄褐色	1～3mmの砂粒を含む	山鹿系
40 4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	土師器 高壺	胴部					灰青褐色	1～3mmの砂粒を含む	風化が激しい
41 4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	土師器 高壺	胴部	(9.4)				にぶい黄褐色	1～3mmの砂粒を含む	
42 4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	土師器 壺	胴部	(11.2)				明褐色	1～3mmの砂粒を含む	風化が激しい
43 4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	土師器 瓶	口縁部～ 底部					にぶい黄褐色	1～3mmの砂粒を含む	風化が激しい
44 4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	土師器 瓶	胴部					①暗褐色 ②中青褐色	1～3mmの砂粒を含む	
45 4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	土師器 壺	胴部					③灰青褐色 ④にぶい黄褐色	1～3mmの砂粒を含む	
46 4トレンチ 底状落ち込み	1・2層	土師器 壺	底部	(6.4)				灰青褐色 ④にぶい黄褐色	1～3mmの砂粒を含む	風化が激しい
47 4トレンチ	瓶豆層	土師器 瓶	底部	(5.6)				浅青褐色	1～3mmの砂粒を含む	風化が激しい
48 4トレンチ	帶豆層	土師器 瓶	底部	(6.0)				①黃色 ②灰白色	1～3mmの砂粒を含む	風化が激しい 且の可歎性あり
49 5トレンチ	革が層	磁器 伝皿器	胴部～ 底部	39				青地 灰白色 白地 灰白色	無	
50 5トレンチ	革が層	磁器 皿	口縁部～ 底部	(10.0)				青地 灰白色 白地 灰白色	無	発付 肥前系 見込 み辻の日状焼造
51 6トレンチ	清潔帯	土師質土器	底部	(4.2)				灰青褐色	0.5～15mmの砂粒を含む	表面回転ありで 風化が激しい
52 6トレンチ 用水路		土師質陶器 壺	口縁部	(26.0)				①にぶい黄褐色 ②ややくすむ褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	在地産
53 6トレンチ 用水路		土師質陶器 壺	胴部～ 底部					①にぶい黄褐色 ②灰青褐色	1～2mmの砂粒を含む	在地産
54 6トレンチ 用水路		土師質陶器 壺	口縁部					にぶい黄褐色	0.5～15mmの砂粒を含む	在地産
55 6トレンチ 用水路		瓦質土器 不明	胴部					黒色	無	火入れか
56 6トレンチ 用水路		瓦質土器 不明	胴部					灰青褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	火入れもしくは焼か 56と同一
57 6トレンチ 用水路		紺土 不瓦土器 不明	胴部					灰青褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	火入れもしくは焼か 56と同一
58 6トレンチ 用水路		紺土 不瓦土器 瓦器	胴部					黒色	0.5mm以下の砂粒を含む	
59 6トレンチ 用水路		紺土 瓦器 甌	胴部	(8.6)				青地 淡青褐色 白地 にぶい黄褐色～灰青褐色	0.5mm以下の砂粒をわざ かに含む	
60 6トレンチ 用水路		紺土 瓦器 甌	胴部～ 底部	(8.3)				青地 淡青褐色 白地 明褐色	0.5mm以下の砂粒を含む	内面のみ焼成 外腹回転削り
61 6トレンチ 用水路		紺土 甌 直	口縁部～ 底部	(12.7)				灰地 灰白色 白地 褐色	無	発付 肥前系 見込 み辻の日状焼造
62 6トレンチ 用水路		紺土 甌 直	口縁部～ 底部	(16.0)				青地 白色 白地 褐色	無	うがい系 内面に風景画を施付
63 6トレンチ 用水路		紺土 甌 直	胴部～ 底部	(4.8)				青地 浅青褐色 白地 褐色	無	発付 肥前系 見込 み辻の日状焼造
64 6トレンチ 用水路		紺土 甌 直	口縁部～ 底部	(10.4) (4.0)	6.0			青地 白色 白地 褐色	無	発付 在地産 在地産を施付
65 6トレンチ 用水路		紺土 甌 直	口縁部～ 底部	(8.6)				青地 白色 白地 褐色	無	発付 在地産 在地産を施付
66 6トレンチ 用水路		瓦瓦層						暗灰～灰白色	0.5～1mmの砂粒を含む	無
67 8トレンチ	革が層	土師器 瓶	底部	(6.6)				淡青褐色	1～3mmの砂粒を含む	

8 本部裏排水管取替工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 K-14

調査期間 平成9年3月18・19日

調査面積 約2m²

調査結果 この工事は、本部1号館と車庫との間のアスファルト舗装の中間地帯で計画された、排水管の付け替えのための小規模な工事である。一部で深さ2mに達する掘削が行われることから立会調査を行った。調査範囲では、僅かに水田耕土が残る部分もあったが大部分は大学統合移転時の造成と本部建物建設に伴う削平を受けており、埋蔵文化財には影響のないことを確認した。

(村田)

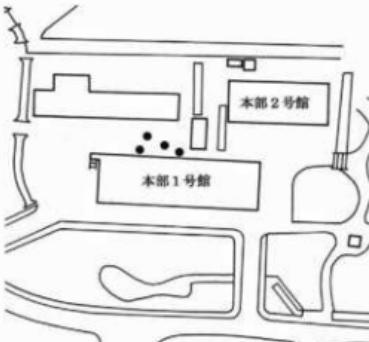


Fig.51 調査区位置図

9 農学部附属農場家畜病院患畜舍廻障取設工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 S・T-19

調査期間 平成9年3月27日

調査面積 約1m²

調査結果 囲障の基礎部分のうち4ヶ所を選んで立会調査を行った。厚さ約20~50cmの表土の直下が削平の進んだ赤褐色土の地山で、遺物・遺構の検出が望める土層堆積は認められなかった。したがって、工事は埋蔵文化財に影響のないことを確認した。調査地点は現状でも付近一帯の中でも高所に位置する。しかし、従来はもっと高かった旧地形が、大学統合移転時の造成によって大規模な削平を受けたことを想定することができる。

(村田)



Fig.52 調査区位置図

第 2 節 小串構内の立会調査

医療技術短期大学部屋外排水管布設工事に伴う立会調査

調査地区 小串構内

調査期間 平成 8 年 8 月 1 日

調査面積 約 6 m²

調査結果 排水管布設のための埋設溝、幅 1 m、深さ約 1.5 m、総延長約 100 m について、5ヶ所の地点を選んで立会調査を行った。調査順に A～E 地点として土層堆積状況を述べる。

A 地点は、現地表下約 5 cm まで：アスファルト舗装、約 5～110 cm：黒褐色石炭灰（せきたんばい）の造成土、約 110～122 cm：暗黄灰色シルト、約 122～145 cm と以下：暗青灰色シルトとなる。B 地点は、現地表下約 5 cm まで：アスファルト舗装、約 5～82 cm：バラスとマサ土の表土、約 82～118 cm：黒褐色石炭灰の造成土、約 118～140 cm：暗灰色シルト、140～154 cm と以下：暗黄褐色シルト及び暗青褐色シルトとなる。C 地点は建物基礎の埋存があり調査できなかった。D 地点は、現地表下約 5 cm まで：アスファルト舗装、約 5～45 cm：バラスとマサ土の表土、約 45～119 cm：黒褐色石炭灰の造成土、約 119～127 cm：暗灰色粘質土、約 127～143 cm：暗黄灰色シルト、約 143～155 cm と以下：暗青灰色シルトとなる。E 地点は、現地表下約 5 cm まで：アスファルト舗装、約 5～28 cm：バラスの表土、約 28～115 cm：黒褐色石炭灰の造成土、約 115～126 cm：暗灰色粘質土、約 126～140 cm：暗黄灰色シルト、約 140～150 cm と以下：暗青灰色シルトとなる。



Fig.53 調査区位置図

調査範囲の基本層序は、概ね現地表下約 1.2 m までが表土及び造成土、その下部が厚さ約 30～50 cm のシルト層となっている。このシルト層は、小串地区の過去の調査で検出されている遺物包含層に相当する可能性があり慎重に調査した。しかし、遺構、遺物等は検出できず、今回の調査範囲では、現地表下約 1.5 m までの深さには埋蔵文化財は濃密には分布していないことを確認した。
(村田)

第3節 光構内の立会調査

教育学部附属光小・中学校囲障（外周フェンス・防球ネット）取設工事
に伴う立会調査

調査地区 光構内

調査期間 平成8年9月12・17日

調査面積 約7m²

調査結果 A地区外周フェンスは、御手洗湾奥の砂浜から一段高くなる学校敷地盛土の擁壁の背後に設置された。この位置には、近世以降の護岸があったと思われるが、現状でみられる擁壁のために詳細は明らかではない。支柱基礎部分の平面形50cm×50cm、深さ60cmについて4ヶ所の調査を行った。基本的には盛土の範囲内にとどまるもので埋蔵文化財への影響は少ないことを確認した。ただし工事範囲北西部の一部（A地区1地点）で丸石による護岸を検出した。出土遺物は検出できず、正確な時期を判断するにはいたらなかった。今後、擁壁等の大規模な工事が計画される際には慎重に対処する必要がある。

B地区防球ネットは光地区南西部の中学校グランドの砂浜に面した部分に設置された。支柱基礎部分を平面形50cm×100cm、深さ80~100cmの規模で8ヶ所ほど立会調査を行った。いずれの地点でも厚さ70~100cmに及ぶ表土もしくは盛土があり、その下部が黄褐色または黄白色の砂層となっている。この砂層の上面が旧地表面と考えられ、ここから出土した少量の陶磁器によって、近世から近代の地表面であると判断できる。遺構の検出はできなかつたが調査規模が小さいため遺構の存在を否定する所見ではない。しかし、現状で遺物・遺構の密度が希薄であることに加えて、防球ネットの支柱基礎は深さ80cm以上では柱直径による円形の掘削のみとなるので、工事による埋蔵文化財への影響は最小限であると判断した。今後、深さ70cm以上にいたる大規模な掘削等が含まれる工事が計画される際には注意が必要であろう。

（村田）



Fig.54 調査区位置図

第5章 平成9年度山口大学構内遺跡調査の概要

平成9年度は下記のように、試掘調査3件、立会調査10件の計13件の調査を実施した。

吉田構内の調査（本部、人文学・教育・経済・理・農の各学部：山口市大字吉田1677-1、教育学部附属養護学校：同吉田3003所在）

試掘調査2件、立会調査8件を実施した。

農学部附属農場堆肥舍新営に伴う試掘調査では、造成による削平が著しく、顯著な遺構・遺物は検出できなかった。農学部バイオ環境制御施設新営に伴う試掘調査では、7世紀後半以降の古代の河川3条と溝1条、土坑1基、統合移転前の水田暗渠、ピットなどを検出した。また、造成土内からではあるが、円面硯、製塩土器が各1点出土した。これまで、大学会館敷地とその周辺においては、円面硯、墨書き器、綠釉陶器、製塩土器などが出土していることからも、調査区周辺には古代における何らかの官衙関連施設が存在していた可能性が極めて高くなかった。

立会調査では、基幹環境整備（外灯新設）工事に伴う立会調査が掘削は小規模ながら、調査対象が遺跡保存地区から人文学部、ハンドボール場の東側と南側、南門の北側と広範囲に及び、遺跡保存地区周辺と一部の地点で、河川、柱穴、遺物包含層を確認した。また、教育学部附属養護学校時計塔新設工事に伴う立会調査では土師器小片を含む遺物包含層

Tab.8 平成9年度山口大学構内遺跡調査一覧表

調査区分	調査地名	調査地区	施設地区	面積(㎡)	調査期間	調査番号
試	農学部附属農場堆肥舍新営	吉田	S-10	41.5	11月4日～ 11月12日	Fg.88 No.200
	農学部バイオ環境制御施設新営	吉田	Q-15・16	140	11月4日～ 12月12日	Fg.88 No.201
調	医学部型當碑・納骨堂新営	小串		15.2	10月28・29日	Fg.89 No.28
	カーブミラー新設	吉田	M-11, N-21	0.8	8月19日	Fg.88 No.202
立	基幹環境整備（外灯新設）	吉田	J-K-21, K-L-22, L-23	23.5	8月27日・ 9月1・8・9日	Fg.88 No.203
	共通教育棟エレベーター新設	吉田	K-16	42	10月2・8日	Fg.88 No.204
会	丸田川河川局部改良	吉田	E-14	48	11月21・26日 12月15日	Fg.88 No.205
	本部2号館西側バリカーサークル	吉田	L-13	0.5	3月12日	Fg.88 No.206
会	教育学部附属養護学校時計塔新設	吉田	D-21	1.4	3月24日	Fg.88 No.207
	基幹環境整備 (教育学部附属養護学校排水管取替)	吉田	C-D-21	17	平成10年4月6日	Fg.88 No.208
会	基幹環境整備（後却場裏表土すきとり）	吉田	O-16	40	平成10年4月6日	Fg.88 No.209
	基幹環境整備（看護婦宿舎浄化槽撤去）	小串		4	11月25日	Fg.89 No.29
会	医学部消防栓移設	小串		10	12月7日	Fg.89 No.30

を検出した。一方、基幹環境整備（養護学校排水管取替）工事に伴う立会調査では、遺物は出土しなかったが、河川の一部と考えられる土層を検出した。その他の立会調査では、顯著な遺構・遺物は検出できなかった。

小串構内の調査（医学部、同附属病院、医療技術短期大学部：宇部市南小串1丁目1-1所在）

試掘調査1件、立会調査2件を実施した。医学部慰靈碑・納骨堂新営に伴い試掘調査を実施したが、顯著な遺構・遺物は検出できなかった。基幹環境整備（看護婦宿舎浄化槽撤去）工事に伴う立会調査では遺物包含層と考えられる土層を検出したが、遺物は出土しなかった。医学部剖検棟移設工事に伴う立会調査では、工事による掘削が造成土内にとどまったため、遺構・遺物は検出できなかった。
(田畠)

第6章 平成9年度山口大学構内の試掘調査

第1節 吉田構内の試掘調査

1 農学部附属農場堆肥舎新営に伴う試掘調査

(1) 調査の経過

吉田構内の東部、牛舎西隣の放牧地に堆肥舎の新営が計画された。これまで、農学部附属農場では良質な堆肥を作るため、果樹の剪定枝、土手の草、畜産から出る厩肥や家畜の尿等を混合堆積していたが、堆肥舎がなく野積みしているため、肥料成分が大部分流失し、施用効果が著しく低下していた。加えて、平成7年8月30日に山口保健所環境指導課の視察があった際に、現状では廃棄物の処理及び清掃に関する法律等に抵触するとの指導があったためである。

調査区は、吉田地区への統合移転の際、第IV地区と呼ばれていた地区に相当する。調査区から南へ約50mの地点に位置する牛舎敷地では、小野忠熙氏らにより発掘調査が行われた。調査の結果、弥生時代の溝や土坑、古墳時代の堅穴住居などが検出され、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器などが出土したとされている¹⁾。また、平成8年度に行った農学部附属農場排水管布設に伴う試掘調査では、古墳時代後期から中世にかけての包含層、ピット群を検出した。²⁾しかし、平成7年度に調査地に隣接する牛舎の敷地で試掘調査が行われた際は顕著な遺構・遺物が認められなかつ

た。ただし、調査区周辺における埋蔵文化財の遺存状況を把握するには、依然としてデータが不足している。以上の状況を踏まえ、埋蔵文化財資料館運営委員会は協議の結果、試掘調査が必要であると判断した。これを受け、埋蔵文化財資料館は平成9年11月4日から11月12日にかけて発掘調査を実施した。

調査区の設定にあたっては、予定地のうち、平成7年度に試掘調査を行った牛舎敷地に近い東側は遺構が希薄である可能性が



Fig.55 調査区位置図

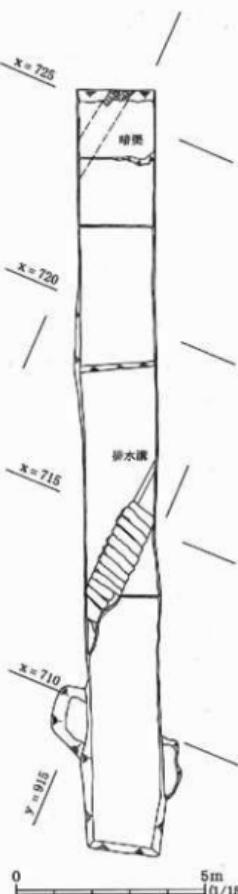


Fig.56 調査区設定位置図

高いため、予定地の西縁に沿って、幅約2m、長さ約20mの範囲で設定した。調査面積は約41.5m²である。

(2) 基本層序 (Fig.57, PL.26 (3) (4))

本調査区における基本層序は、次の順である。第Ⅰ層：茶褐色粘質土（表土）、第Ⅱ層：灰褐色土、暗オリーブ色土を主とする造成土、第Ⅲ層：灰オリーブ色粘質土（水田耕土）、第Ⅳ層：灰オリーブ色粘質土・オリーブ灰色シルトを主とする水田床土、第Ⅴ層：茶褐色土（盛土）、第Ⅵ層：明緑灰色シルトを主とする地山

調査地は直前まで放牧地として使用されるとともに、堆肥も近くに野積みされていたことから、第Ⅰ層が約40~80cmと厚く、極めて脆弱であった。また、第Ⅱ層も脆弱であったため、調査区南部では穀面が一部崩落し、調査に支障をきたした。

$x=718\text{m}$ 付近から以北では、第Ⅰ層の下に、第Ⅱ層が約40~70cm、2層に渡ってみられる。第Ⅱ層の下で水田層である第Ⅲ層、第Ⅳ層を検出した。第Ⅲ層は厚さが約20cm~30cmである。第Ⅳ層は厚さが約10~80cmで、暗渠埋設部分で厚くなる。このうち、部分的にみられる第Ⅳ~5層：黒褐色シルトは第Ⅲ層以前の耕土である可能性がある。第Ⅳ層の直下は第Ⅵ層となる。検出標高は約30.6mである。北西壁土層断面から、水田は第Ⅵ層を掘りこんどおり、水田造成時に大規模な削平があったことをうかがわせる。

0 5m
1/1500

$x=718\text{m}$ 付近から南では第Ⅲ層、Ⅳ層が認められず、第Ⅱ層の直下が第Ⅴ層の茶褐色土となる。この層は水田床土の可能性もあるが、 $x=718\text{m}$ 付近から北と土色が異なること、通常の床土とは異なり、非常に固くしまりがあることから、統合移転前の盛土として捉えた。上面が路面などの生活面であった可能性が考えられる。なお、統合移転時の牛舎敷地の調査では、移転直前まで民家が建っていたとされている。³⁾今回、附属農場関係者からも調査地近辺に民家が建っていたとの教示を受けた。第Ⅴ層の直下は第Ⅵ層となる。検出標

吉田構内の試掘調査

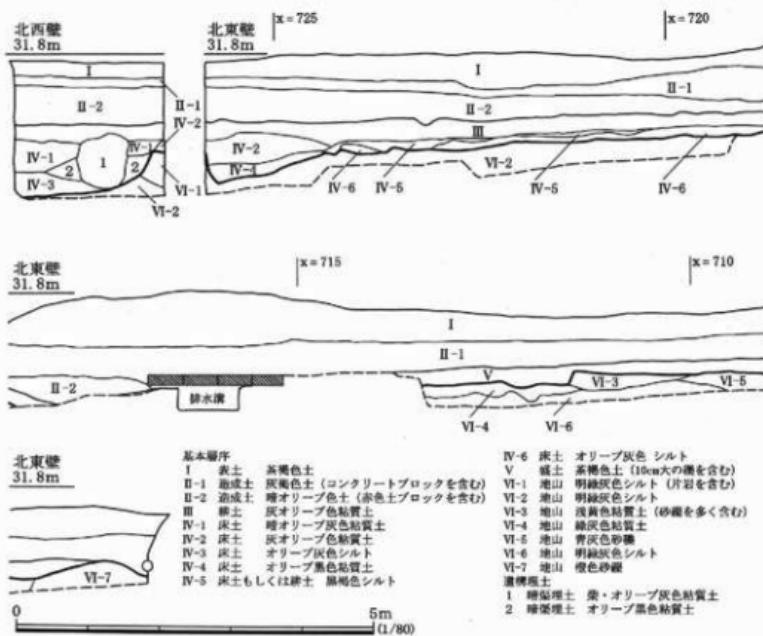


Fig.57 調査区土層断面図

高は約30.5~30.7mである。x=718m付近から北では第VI-2層：明緑灰色シルトのみが認められたのに対して、第VI-6層：明緑灰色シルトの上に第VI-3層：浅黄色粘質土、第VI-4層：緑灰色粘質土、第VI-5層：青灰色砂礫が堆積しており、安定していない。これらは河川堆積によるものと考えられる。第VI-2層と第VI-6層は同一層の可能性が高く、x=718m付近から北では、第VI-2層より上層は水田造成時に削平されたのである。

(3) 遺構・遺物 (Fig.56, PL.26 (2))

調査区北部で統合移転前の水田暗渠を検出した。北-南に流水方向を持つ。導水のため、柴を敷き詰めている。この他には、顯著な遺構は検出できなかった。水田造成時に大規模な削平が行われたためと考えられる。遺物は第IV-5層から時期不明の土器片が2点出土したのみである。

(4) 小結

今回の試掘調査の結果、検出したのは統合移転前の水田関連の土層と暗渠、盛土であり、それ以外に顕著な遺構と遺物はみられなかった。しかし、不明な点が多い調査区近辺のデータが得られたことは大きな成果であったといえる。

調査区における統合移転時の造成は基本的には埋め立てによるものと考えられる。一方、水田は地山を削って造成されており、調査区に隣接する牛舎敷地でも同じ状況を示している。また、統合移転時の試掘調査の際にも、遺構については「水田化の際に切り下げられて損壊が大きい」と報告されており³⁾、水田造成時の削平が大規模であったことがうかがえる。

しかし、調査区近辺は未調査部分が多く、地下の状況に不明な点が多いため、埋蔵文化財の遺存は否定できない。地点によって、地下の状況が異なることが十分に予想される。前述のように統合移転時の試掘調査と平成 8 年度に行った農学部附属農場排水管布設に伴う試掘調査の結果から、調査区近辺には弥生時代～中世の集落跡の存在が推測される。また調査区の北側の丘陵についても埋蔵文化財の存在が予想されるが、調査例がなく詳細は不明である。今後の継続的な調査によってさらにデータを蓄積する必要がある。（田畠）

〔注〕

1) 山口大学古田遺跡調査団『山口大学構内古田遺跡発掘調査概報』（山口大学、1976 年）

2) 第 3 章 - 3 参照

3) 前掲注 1) 文獻

2 農学部バイオ環境制御施設新営に伴う試掘調査

(1) 調査の経過

吉田構内の東部、農学部附属農場の実験水田に農学部バイオ環境制御施設の新営が計画された。予定地を含めた実験水田では、発掘調査は行われていないが、過去に遺物が採集されていることから、埋蔵文化材の存在が十分に予想された。また、予定地に隣接する農学部農業観測所実験施設新営に伴う試掘調査では、7~8世紀代と推測される土坑、溝が検出されており、周辺一帯に古代の遺構が分布する可能性が指摘されている。²⁾ 埋蔵文化財資料館運営委員会はこれらの状況を踏まえて取り扱いを協議した結果、埋蔵文化財の遺存状況を確認するために試掘調査が必要であると判断した。

これを受けて、埋蔵文化財資料館では平成9年11月4日から12月12日まで試掘調査を行った。調査は、1号田のやや西寄りに、幅2m、長さ約70mで南北方向のトレンチを設定して行った。調査面積は約140m²である。なお、予定地は当面調査後も現状通り水田として利用するため、確認した遺構の掘り込みは最小限にとどめた。

(2) 基本層序 (Fig.60・61, PL.28・29)

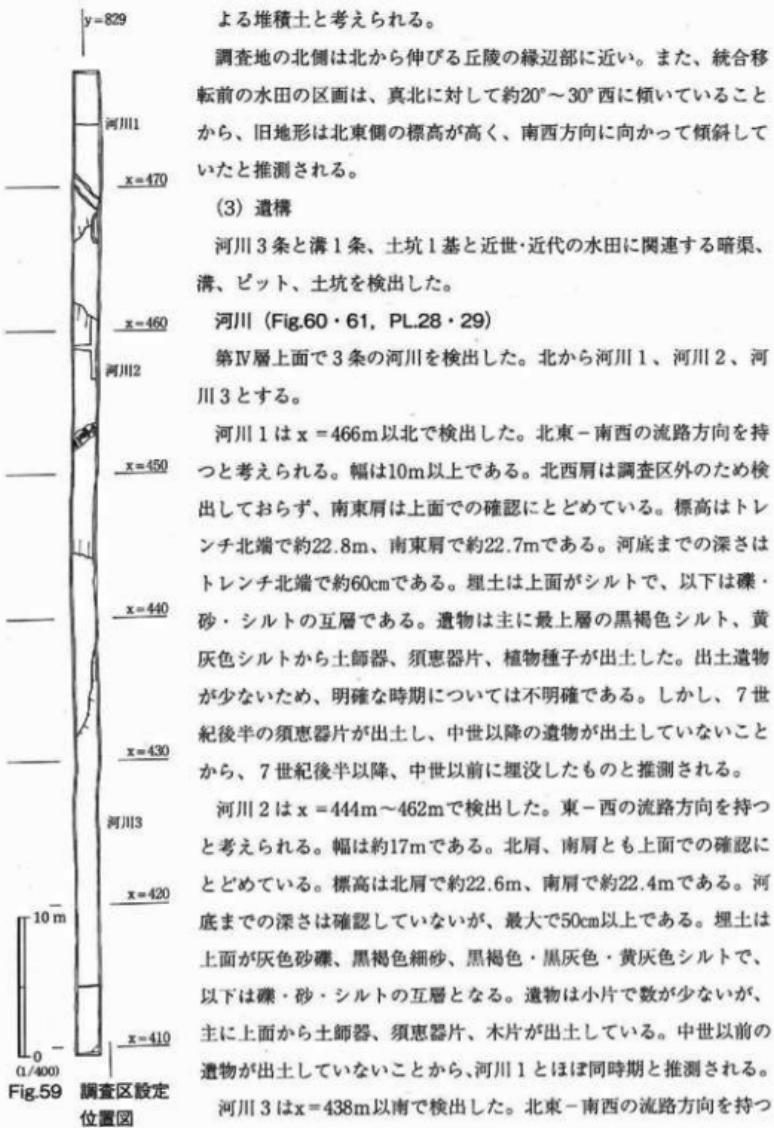
調査区における基本層序は次の順である。第Ⅰ層：灰色シルト（現水田床土）、第Ⅱ層：黄褐色土、黒褐色土を主とする造成土、第Ⅲ層：オリーブ灰色粘質土を主とする水田床土、第Ⅳ層：明緑灰色、緑灰色の砂礫、砂、シルト、粘土による地山

調査区は現在の水田床土である第Ⅰ層の直下に第Ⅱ層が客土されている。これは、統合移転時に既存の水田を区画整理した際の造成土である。第Ⅲ層は統合移転前の水田の床土である。第Ⅳ層は地山で、この上面が遺構と河川の検出面である。

調査区の北部、x=466m付近までは、第Ⅲ層ではなく、第Ⅱ層の直下、標高約22.9mで第Ⅳ層を検出しており、統合移転時の削平が著しい。x=466mから南では、第Ⅱ層が最大で約40cmに及んでおり、その直下に第Ⅲ層が認められた。第Ⅳ層は標高約22.5~22.6mで検出した。第Ⅳ層は礫・砂・シルトが互層となって堆積しており、河川に



Fig.58 調査区位置図



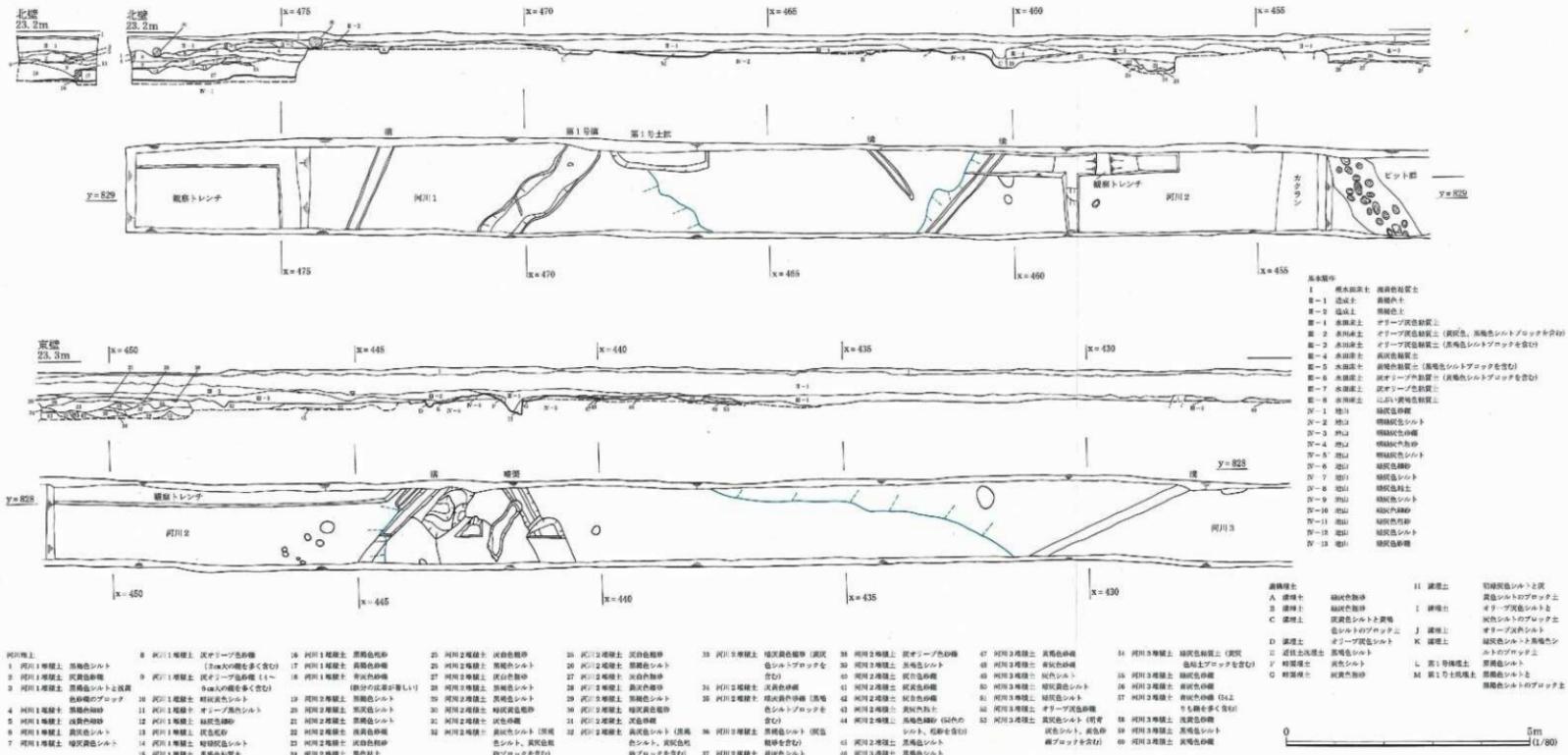


Fig.60 潘家区地层配置图·紫页土层断面图①

吉田構内の試掘調査

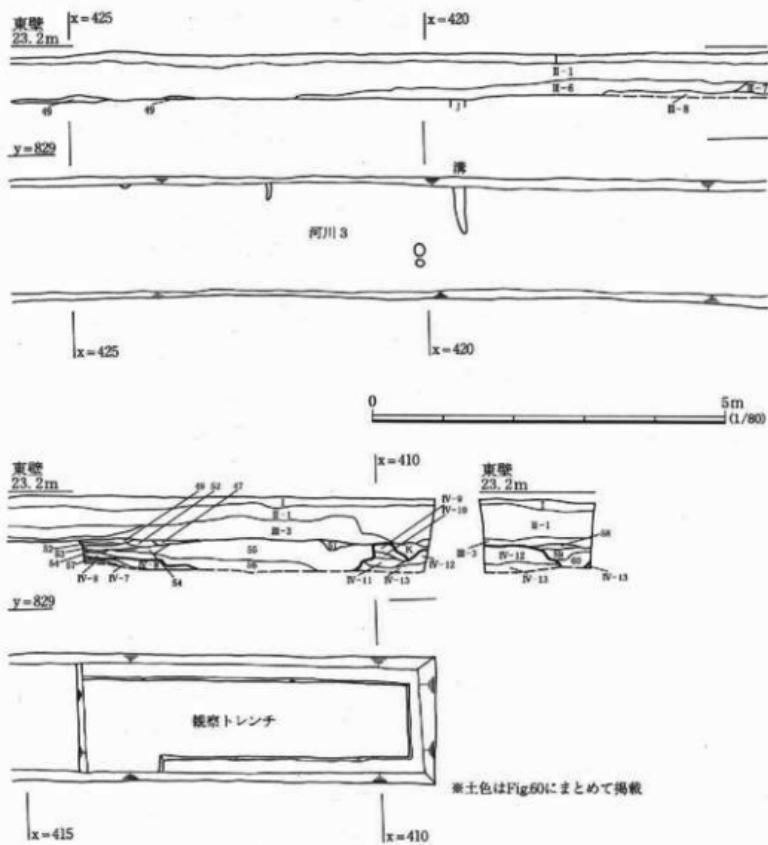


Fig.61 調査区造構配置図・土層断面図②

と考えられる。幅は約28mである。北西肩は上面での確認にとどめたが、南西肩はトレンチ南端の観察トレンチで確認できた。標高は北肩、南肩、いずれも約22.5mである。河底までの深さは観察トレンチで、約30~40cmである。埋土は上面が灰色シルト・緑灰色砂疊で、以下はシルト・疊の互層である。遺物は上面の灰色シルトで、土師器、須恵器の小片若干が出土した。このため、明確な時期については不明であるが、中世以降の遺物が出土地していないことから、河川1・2とはほぼ同時期と推測される。

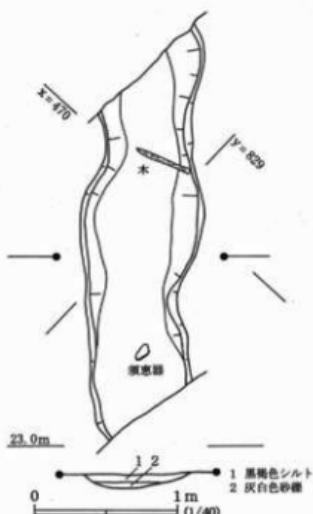


Fig.62 第1号溝平面図・断面図

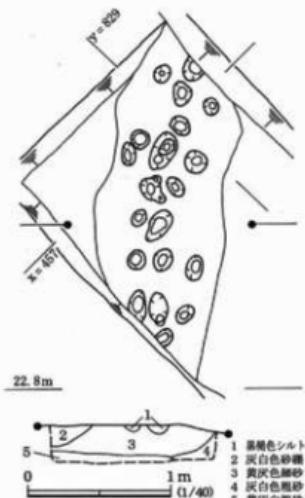


Fig.63 ピット群平面図・断面図

第1号溝 (Fig.62, PL.29 (3) (4))

$x = 469 \sim 471\text{m}$ 付近で検出された溝である。河川1の埋土を掘りこんでいる。長さ2.4m以上、幅が約90cmを測る。検出面での標高は22.9~22.8mである。深さは検出面から約10cmで、埋土は黒褐色シルト、灰白色砂疊層に分かれる。土師器、須恵器小片、木片が出土した。出土遺物は本来河川1に含まれていた可能性があり、遺構の時期を示すものとは断定できない。しかし、遺構の埋土の特徴から、河川1埋没以降の古代の溝と考えられる。

ピット群 (Fig.63, PL.30 (1) (2))

$x = 452 \sim 454\text{m}$ 付近で、河川2埋土の最上層、黒褐色シルトの直下にあたる黄灰色細砂の上面で検出された。この層は幅約90cm、長さ約2mに渡って検出された。ピット群の検出面での標高は約22.5mである。ピットの直径は約6~28cm、深さは約4~6cm、埋土はいずれも黒褐色シルトで、植物遺体を含むものもあった。これらは杭跡とするには深さが浅く、植物の根の痕跡などの可能性が考えられる。正確な評価を行うには、未調査部分を含めてさらに検討が必要である。

第1号土坑 (Fig.64, PL.30 (3))

$x = 466 \sim 468\text{m}$ 付近で検出された土坑である。大部分は東側の調査区外にあると考えられ、全形は不明である。検出面での標高は22.8mである。河川1の埋土を掘りこんでおり、深さは検出面から約10cmである。埋土は明緑灰色シルトと黒褐色シルトのブロック土である。遺物は出土していない。近世以降に下る可能性もある。

近世～近代の遺構

(Fig.60・61, PL.30 (4))

第IV層及び河川の上面から、統合移転前の水田に設けられていた暗渠と溝、それらに関連すると思われるピット、土坑が検出された。暗渠と溝は南東～北西方向のものとほぼこれに直交する北東～南西方向のものが主体であり、統合移転前の水田の区画の方向とほぼ一致している。

(4) 遺物 (Fig.65, PL.31～32)

河川1～3出土遺物 (Fig.65-1～16)

1～6は河川1出土遺物である。1は須恵器壺の胴部片である。外面は平行タタキ後、カキメを施す。内面には同心円のあて具痕を残す。土師質で焼成は不良である。2～5は須恵器壺身の口縁部である。5は外面に自然釉が付着する。いずれも立ち上がりは小さく、内外面回転ナデを施す。6は壺蓋の口縁部である。内外面回転ナデである。

7～15は河川2出土遺物である。7は土師器高壺の壺部である。風化が激しい。8は土師器高壺の裾部である。内外面にナデを施す。9・10は壺蓋の口縁部である。10は口縁部内面にかえりが付く。11は須恵器高壺の裾部、12～14は土師器壺の口縁部である。内外面にヨコナデを施す。15は須恵器壺身の口縁部である。内外面に回転ナデを施す。

16・17は河川3出土遺物である。16は須恵器壺身の口縁部である。直線的に外反し、内外面に回転ナデを施す。17は凹基式の石罐である。右側基部が欠損している。石質は安山岩である。

第1号溝出土遺物 (Fig.65-18～20)

18は須恵器壺の胴部片である。外面は平行タタキの後、カキメ、内面には同心円のあて具痕を残す。19は須恵器皿の口縁部、20は須恵器高壺の口縁部で、いずれも内外面に回転ナデを施す。

遺構に伴わない遺物 (Fig.65-21～30)

清掃時出土遺物や第I層、II層、排土採集、暗渠出土遺物を一括する。詳細については

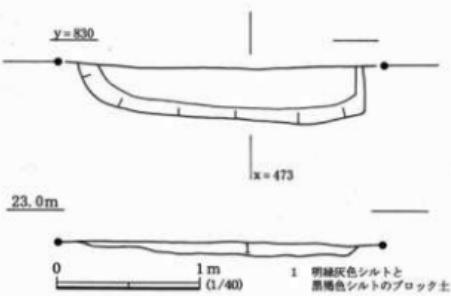


Fig.64 第1号土坑平面図・断面図

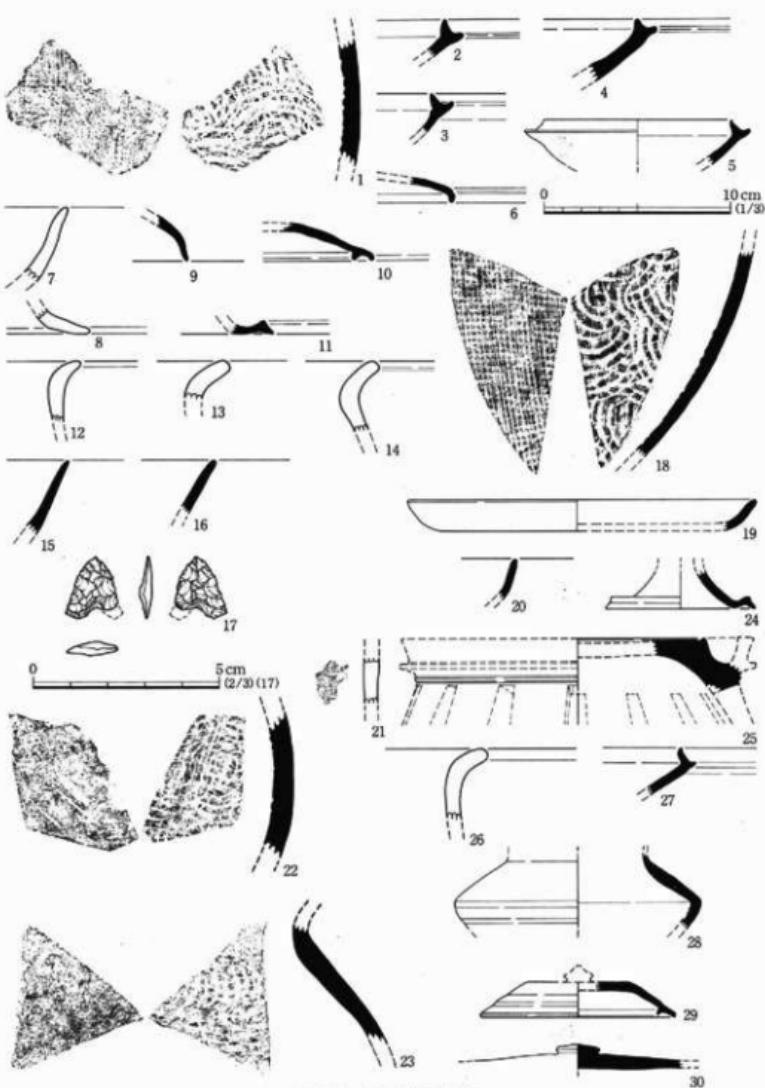


Fig.65 出土遺物実測図

観察表を参照されたい。清掃時、排土採集遺物についても、出土状況から本来大半が第Ⅰ層、もしくは第Ⅱ層に含まれていたと考えられる。

21は六連式製塙土器の胴部片である。外面はナデで内面に布目を残す。22・23は須恵器壺の胴部片である。22は外面が平行タタキ後、カキメ、内面には同心円のあて具痕を残す。土師質で焼成は不良。23は外面に自然釉が付着し、内面に同心円のあて具痕を残す。24は須恵器高杯の据部である。据端部はくぼみ、緩やかに広がる。25は須恵器円面鏡である。海部に墨が付着し、陸部は研磨されている。脚部に縱方向の透かし穴を持つ。内面には自然釉が付着する。26は土師器壺の口縁部で、内外面にナデを施す。27は須恵器壺身の口縁部である。28は須恵器壺の胴部である。胴部中位で屈曲する。胴部下位に回転ヘラ削り後、ナデを施す。29・30は須恵器壺蓋である。29は天井部に回転ヘラ削りを施し、口縁部内面に小さなかえりが付く。30は天井部に扁平な摘みが付く。内外面に回転ナデを施す。

(5) 小結

今回の調査は吉田構内東部の実験水田における初めての発掘調査である。調査の結果、7世紀後半以降の古代の河川3条、溝1条、土坑1基を検出した。ただし、出土遺物が少なく、時期については今後の調査による検討が必要である。調査区は姫山から派生する丘陵と家畜病院から西に下降する段丘に挟まれた谷地形を呈している。今回検出した河川は、構内東部に源があり、標高の低い構内の中央部にかけて流れていると考えられる。

出土した須恵器は壺身の立ち上がり、壺蓋の内面のかえりが小さいことを特徴とする防府市末田9号・10号窯出土土器と近似したものが目立った。³⁾ 調査区周辺に当該期の遺構が存在する可能性が考えられる。また、吉田遺跡において、円面鏡は2点目、製塙土器は3点目の出土である。両者とも遺構に伴う出土ではないが、古代における官衙関連施設が調査区周辺にも存在していた可能性が高い。今後の調査が期待される。 (田畑)

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「農学部附属農場倒斜面排水溝修復整備に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報V』、1987年)
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内農学部環境観測実験施設新設に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報X』、1992年)
- 3) 吉瀬勝康編『敷山・末田須恵器窯跡調査報告』(防府市教育委員会、2000年)

Tab.9 出土遺物観察表（土器）

法量()は復元値

遺物 番号	出土場所	層 段	器 種	測定	口径 (cm)	底径 (cm)	算高 (cm)	色 調 〔内面〕	物 土	備 考
1	河川1	1層	灰窓器 壺	胴部				①灰白色・黒 褐色②灰白色	1~3mmの砂粒を含む	焼成不良
2	河川1	1層	灰窓器 壺身	口縁部				灰白色	1~3mmの砂粒を含む	外面に自然釉付着
3	河川1 (断面底土)	1層	灰窓器 壺身	口縁部				灰白色	1~3mmの砂粒を含む	
4	河川1	1層	灰窓器 壺身	口縁部~胴部				灰色	1mmの砂粒を含む	
5	河川1	1層	灰窓器 壺身	口縁部~胴部 (10.1)				青灰色	粗砂粒を含む	
6	河川1	1層	灰窓器 壺身	口縁部				灰白色	粗颗粒土	
7	河川2	20層	土器器 高壺	口縁部				褐色	1~3mmの砂粒を含む	風化が激しい
8	河川2	28層	土器器 高壺	胴部				褐色	1~3mmの砂粒を含む	風化が激しい
9	河川2	29層	灰窓器 壺身	口縁部				オリーブ灰色	粗颗粒土	
10	河川2	21層	灰窓器 壺身	天井~ 口縁部				暗灰色	粗颗粒土	
11	河川2	20層	灰窓器 高壺	胴部				明オリーブ灰色	粗颗粒土	
12	河川2	28層	土器器 壺	口縁部				暗灰褐色	1~3mmの砂粒を含む	
13	河川2	44層	土器器 壺	口縁部				灰褐色	1~3mmの砂粒を含む	
14	河川2	44層	土器器 壺	口縁部				黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	
15	河川2	32層	灰窓器 壺身	口縁部				灰色	1~3mmの砂粒を含む	
16	河川3	49層	灰窓器 壺身	口縁部				灰色	1~3mmの砂粒を含む	
17	第1号塚	1層	灰窓器 壺	胴部				①灰色②明 オリーブ灰色	1mmの砂粒を含む	
18	第1号塚	1層	灰窓器 壺	口縁部~ 胴部 (19.2) (1.7)				灰白色	1~5mmの砂粒を含む	
19	第1号塚	1層	灰窓器 高壺	口縁部				灰白色	1~3mmの砂粒を含む	他器種の可能性あり
20	第1号塚	1層	灰窓器 高壺	胴部				灰白色	1~3mmの砂粒を含む	
21	清掃時	六連式瓶塙土器	胴部					①灰褐色 ②にぶい褐色	1~2mmの砂粒を含む	
22	清掃時	灰窓器 壺	胴部					①灰白色・黒 褐色②灰白色	1~3mmの砂粒を含む	焼成不良
23	第1層	灰窓器 壺	胴部					灰色	1~3mmの砂粒を含む	外面に自然釉付着
24	昭和 (x=440~445)		灰窓器 高壺	胴部				明黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	
25	第2層 (x=440~445)		灰窓器 円錐瓶	底部~ 胴部				灰白色	粗颗粒土	海部に墨が付着
26	表探		土器器 壺	口縁部				①褐色 ②にぶい黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	
27	表探		灰窓器 壺身	口縁部				青灰色	1mmの砂粒を微量に含む	
28	表探		灰窓器 壺	胴部				灰色	1~3mmの砂粒を含む	
29	表探		灰窓器 壺身	天井~ 口縁部				①灰白色 ②灰色	1mmの砂粒を含む	
30	表探		灰窓器 壺身	天井部				灰色	1~5mmの砂粒を含む	

Tab.10 出土遺物観察表（石器）

法量()は現存値

遺物 番号	出土場所	層 段	器 種	長 径 (cm)	横 幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 量 (g)	石 質	備 考
17	河川3	49層	石鉋	1.7	(1.4)	0.35	0.53	安山岩	

第2節 小串構内の試掘調査

1 医学部慰靈碑・納骨堂新営に伴う試掘調査

(1) 調査の経過

小串構内に所在する附属図書館医学部分館の周辺が環境整備されるに伴い、図書館南側の前庭部に慰靈碑・納骨堂の新営が計画された。このうち納骨堂新営は地下1.5mに及ぶ基礎掘削工事を伴うため、埋蔵文化財資料館運営委員会の判断に基づき、埋蔵文化財資料館では新営予定地に東西4m、南北3.8m、面積15.2m²の調査区を設定し、10月28・29日の2日間にわたり試掘調査を行った。

(2) 基本層序 (Fig.68, PL.34)

基本層序は、現地表下約85cmまでが第Ⅰ層：マサ土による表土、約85~110cmが第Ⅱ層：旧建物基礎、約110~140・260cmが第Ⅲ層：暗黒茶色土・黒色石炭灰（せきたんばい）の造成土、約140~152cmが第Ⅳ層：暗灰色粘質砂の水田耕土、約152~160cmが第Ⅴ層：暗緑黄色土の水田床土、約160~178cmが第Ⅵ層：暗白黄色・灰白色・暗白紫色粘質砂の整地土、約178cm以下が第Ⅶ層：暗白色粘質砂の地山となる。第Ⅲ-2b層は、小串構内で広範にみられる石炭の灰を主体とする黒色の造成土である。西壁にみられるように、地山を大きく削り込んでいる部分もみられる。なお、土層断面図は各壁面の土層の一部を示した。



Fig.66 調査区位置図

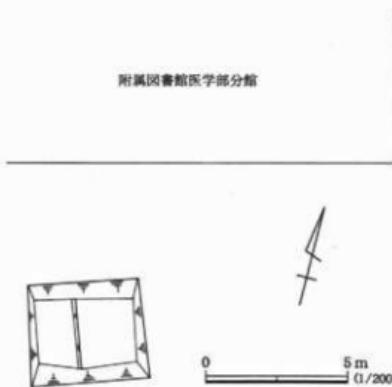


Fig.67 調査区設定位置図

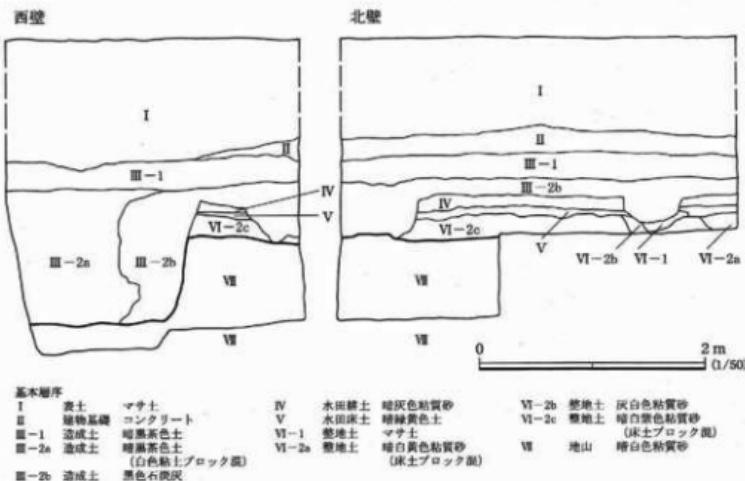


Fig.68 調査区土層断面図

(3) 小結

今回の調査地では、第Ⅲ層の堆積状況から良くわかるように、地山層に及ぶ大規模な搅乱がみられた。そのため、良好な状態での地下状況の把握が困難で、調査規模が小さいこともあり遺構は検出することができなかった。遺物の出土も少量で、近世以降の磁器小片が僅かに出土したのみである。小串構内の既往調査では、旧石器時代の遺物包含層が確認されている。今回も、これに関連する遺物の出土層を検出することを目的の一つとしていたが、可能性のある上層を確認することはできなかった。地山である第VII層については、調査区西側の約1.5mの範囲で、土層全体を上面から約70cmの深さまで掘り下げて遺物の有無を調査したが、遺物を検出することはできなかった。土層の状態から遺物を含む可能性は低いと判断した。今回の調査では、調査面積が小さかったために、安全面の配慮からこれ以上の深さに及ぶ調査は断念したが、より深い場所での埋蔵文化財の所在は未だ否定されたわけではない。今後の施設整備では、状況に応じて対応していく必要があろう。

(村田)

第7章 平成9年度山口大学構内の立会調査

第1節 吉田構内の立会調査

1 カーブミラー新設工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 M-11, N-21

調査期間 平成9年8月19日

調査面積 約0.8m²

調査結果 工事は、交通安全上の危険が多いM-11区とN-21区にカーブミラーを設置するため、支柱の基礎部分について、直径約70cmの円形の範囲内を現地表から約90cm掘り下げるものである。M-11区は吉田寮への入口と農道との交差点、N-21区は樅野寮の入口部分にあたる。

立会調査の結果、M-11区については、現地表下約23cmで、橙色砂礫土の地山を確認した。調査地近辺では崖面が露出しており、統合移転時に大規模な削平を受けたと考えられる。N-21区については、現地表下約25cmまでがマサ土の表土で、以下は造成土の範囲内にとどまった。

(田畑)



Fig.69 M-11区調査区位置図



Fig.70 N-21区調査区位置図

2 基幹環境整備（外灯新設）工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 J・K-21, K・L-22, L-23

調査期間 平成9年8月27日、9月1・8・9日

調査面積 約23.5m²

調査結果 吉田地区基幹整備の一環として、毎年計画的に構内の外灯が新設されてきている。本年度の整備は、平成8年度に試掘調査を実施した、南門から遺跡保存地区にかけての外灯整備に続くもので、遺跡保存地区から人文学部までの道路、ハンドボール場の周囲、南門門柱脇に合計6基の外灯が新設された。B～D・F～H地点は新設される外灯の基礎部分、平面形約90cm×90cmについて6ヶ所、A・E地点は電気配線中継のために新設されるハンドホール部分、平面形約60cm×60cmについて2ヶ所、I地点は遺跡保存地区的南東縁を通る管路部分、1～4地点はハンドボール場内の管路部分、平面形70cm×70cmについて4ヶ所の立会調査を行った。

A～E地点は、遺跡保存地区から人文学部へ至る道路に沿って新設された外灯ライン上の調査地点である。A地点は、現地表下約30cmまでが表土、約30～50cmまでが水田耕土、約50～70cmまでが水田床土、約70～110cmと以下が茶褐色土の地山となる。B地点は、現地表下20cmまでが表土、約20～40cmまでが白色砂とバラスの工事埋土、約40～60cmが水田床土、約60cm以下が茶褐色土の地山となる。C地点は、現地表下約35cmまでが表土、約35～50cmまでが整地土、約50～70cmが暗灰色土の水田耕土、約70～90cmが茶褐色土の水田床土、約90～120cmが黒褐色土の河川堆積土、約120～130cmと以下が暗灰色砂礫の河川堆積



Fig.71 調査区位置図

土となる。黒褐色土からは土器片が出土した。D地点は、現地表下約17cmまでが表土、約17cm以下が青灰色シルトの地山となる。ここでは、一部で地山上面に厚さ約15cmの黒褐色土からなる遺構埋土を確認した。調査範囲が狭いため遺構の性格は不明である。D地点付近の管路でも、暗灰色土による埋土の直径約25cmの柱穴を検出した。E地点は、現地表下約30cmまでが統合移転時造成土、約30~50cmが水田耕土、約50~80cmが水田床土、約80~110cmと以下が黄青灰色シルトの地山となる。

F・G地点は、それぞれハンドボール場の東側と南側に新設された外灯基礎部分の調査地点である。F地点は、現地表下約35cmまでが表土、約35~70cmまでが造成土、約70~100cmまでが水田耕土、約100~110cmまでが水田床土、約110~130cmと以下が暗青灰色シルトの地山となる。G地点は、現地表下40cmまでが表土、約40~90cmまでが造成土、約90~140cmと以下が暗灰色粘質砂の地山となる。

H地点は、南門の北側に新設された外灯基礎部分の調査地点で、現地表下約40cmまでが表土、約40~90cmまでが整地土、約90~120cmまでが暗灰茶色砂礫の統合移転時造成土、約120~150cmまでが暗灰色砂礫の河川堆積土、約150cmと以下が茶褐色礫の河川堆積土となる。暗褐色砂礫の河川堆積土からは少量の土器片が出土した。平成6年度実施のグランド屋外照明施設新設に伴う発掘調査のDトレーナー及び平成8年度実施の基幹環境整備（外灯新設）に伴う発掘調査のB調査区南西端でも粗い砂礫を埋土とする河川が検出されている。今回調査のH地点で検出した河川堆積土もこれらと一連のものになると考えられる。

I地点は、グランド屋外照明塔から遺跡保存地区の南東縁を通り、道路を横断してA地点のハンドホールへと布設される管路部分の調査である。遺跡保存地区的南東縁の幅30~40cm、深さ20~30cm、全長約50mの管路について掘削開始から立ち会った。土層は、現地表下約20~30cmの表土直下で黒褐色の包含層及び黄灰色シルトの地山を検出した。

ハンドボール場内の4地点の土層の状況はほぼ同様で、現地表下約10cmまでがマサ土のグランド表土、約10~20cmがグランド整地土、約20~70cmと以下が造成土となる。

今回の調査では、吉田構内南側ほぼ中央部に位置する野球場を囲むようにして、広範囲に地下の土層の状況を確認することができた。今回調査した地点は、大学建物から離れた位置にあり、建物新設工事による搅乱の影響が少ないと予想されたが、統合移転時造成に伴う削平の影響もほとんど受けていないことが明らかとなった。一部の調査地点で、遺構・遺物を確認していることから、今後の施設整備に際しては埋蔵文化財の保護に十分留意することが必要である。

(村田)

3 共通教育棟エレベーター新設工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 K-16

調査期間 平成9年10月2・8日

調査面積 約42m²



Fig.72 調査区位置図

調査結果 挖削工事は共通教育棟に接して、東西約7m×南北約6m、深さ約1.8mの範囲で行われた。掘削範囲の南側の部分では、現在は使用されていない汚水浄化槽が埋存していた。また、これに伴う配管等の埋設工事や、建物本体工事による掘削が広範囲で行われており、調査範囲は搅乱が激しく埋蔵文化財の確認が期待できる土層は消滅していた。

(村田)

4 九田川河川局部改良工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 E-14

調査期間 平成9年11月21・26日、12月15日

調査面積 約48m²

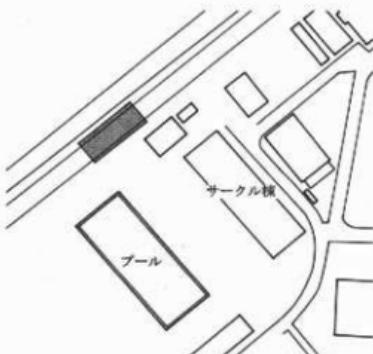


Fig.73 調査区位置図

調査結果 この工事は昭和62年度から行われてきている。今年度は長さ24m分の工事が実施され、大学構内の樹木移植と護岸改修工事に立会調査を行った。土層は、現地表下約1.3mまでが統合移転時造成土、約1.3~2.0mが水田耕土か床土、以下は地山で約2.0~2.3mが黒褐色土、約2.3~3.4mが暗黄灰色粘質土、約3.4~4.0mが黄灰色粘質土、約5.0~6.0mと以下は暗灰色礫からなる基底河床疊となる。遺構・遺物は検出できなかった。

(村田)

5 本部2号館西側バリカー新設工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 L-13

調査期間 平成10年3月12日

調査面積 約0.5m²

調査結果 工事は本部2号館の西側に車止めのバリカーを設置するため、基礎部分の2ヶ所について、50cm×50cmの範囲で現地表から約30cm掘り下げるものである。立会調査の結果、掘削は造成土の範囲内にとどまった。

(田畠)



Fig.74 調査区位置図

6 教育学部附属養護学校時計塔新設工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 D-21

調査期間 平成10年3月24日

調査面積 約1.4m²

調査結果 工事は時計塔の設置に伴い、花壇敷地のA・B地点の2ヶ所について、60cm×120cmの範囲で現地表から約50cm掘り下げるものである。その結果、両地点とも、現地表下約45cmで遺物包含層と考えられる黒褐色粘質土を確認した。

この層の厚さは2~8cmと薄く、その直下が緑灰色シルトの地山であった。遺物包含層からは、磨滅した土器片が出土した。

(田畠)

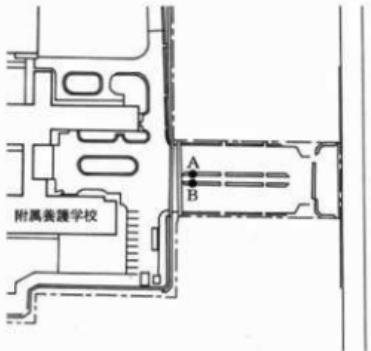


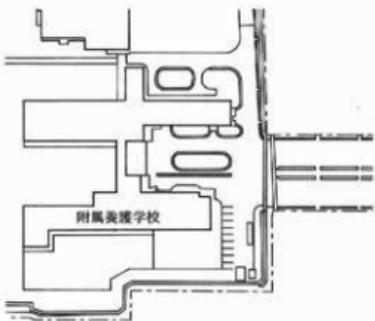
Fig.75 調査区位置図

7 基幹環境整備（教育学部附属養護学校排水管取替）工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 C・D-21

調査期間 平成10年4月6日

調査面積 約17m²



調査結果 工事は教育学部附属養護学校の排水管の取り替えを行うものである。工事による掘削は幅約1m×長さ約17mで、深さは現地表から約80cmであった。調査区の大部分では既設管の埋土の範囲内であったが、一部の地点で、現地表下約65cmで厚さ約15cmの黒褐色シルト、その下に厚さ約10cmの灰色砂を確認した。河川の埋土と考えられる。遺物は出土しなかった。（田畠）

Fig.76 調査区位置図

8 基幹環境整備（焼却場裏表土すきとり）工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 O-16

調査期間 平成10年4月6日

調査面積 約40m²



Fig.77 調査区位置図

調査結果 工事はボイラー室の北側にゴミ置場を設置するために、設置場所の整地を行うものである。調査地近辺では、河川が検出されているため、状況確認のため立会調査を行った。しかし、工事による掘削は表土層内にとどまった。（田畠）

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「基幹環境整備（ボイラー室配電盤設置）工事に伴う立会調査」『山口大学構内遺跡調査研究年報 XIV』、2000年)

第2節 小串構内の立会調査

1 基幹環境整備（看護婦宿舎浄化槽撤去）工事に伴う立会調査

調査地区 小串構内

調査期間 平成9年11月25日

調査面積 約4m²

調査結果 浄化槽部分北東隅を調査した。

現地表下約1.2mまでは表土及び造成土、約1.2~1.3mが水田耕土、約1.3~1.5mが水田床土、約1.5~1.8mが暗青灰色粘土、約1.8~2.5mと以下が黒灰色粘土となる。暗青灰色粘土は昭和58・59年度の医学部体育館新営に伴う調査で遺物包含層として報告された土層に対応すると考えられる。今回は遣構・遺物は検出できなかったが、今後周辺の工事には注意が必要である。（村田）



Fig.78 調査区位置図

2 医学部剖検棟移設工事に伴う立会調査

調査地区 小串構内

調査期間 平成9年12月7日

調査面積 約10m²

調査結果 宇部市小串地区土地区画整理事業の一環となる医学部北西側道路の拡幅工事に伴い、病理剖検棟を移動する必要が生じた。工事は、建物北隅を軸として南東方向にわずかに回転させるものである。工事による掘削は建物に接して深さ1m以内にとどまり、造成土の範囲内で行われたことを確認した。このため、遣構・遺物は検出できなかった。（村田）



Fig.79 調査区位置図

第8章 平成7・10～14年度山口大学構内遺跡調査の概要

1 平成7年度山口大学構内遺跡調査の概要

平成7年度は、事前調査2件、試掘調査8件、立会調査9件の計18件の調査を実施した。吉田構内では事前調査2件、試掘調査6件、立会調査7件を実施した。農学部RⅠ実験研究施設新営に伴う発掘調査では、井戸1基、大溝1条と小溝5条を検出した。井戸は大溝によって南側部分が削平を受けている。時期は16世紀前半と考えられる。大溝及び小溝は、近世水田に伴うものであった。調査区は近世における水田の間壁によって著しい削平を受けており、水田開墾以前の遺構や遺物包含層については、井戸1基を除いて検出できなかった。公共下水道接続に伴う発掘調査では、弥生時代前期の溝4条、土坑13基、多数の柱穴など多くの遺構を検出した。出土した弥生時代前期の土器は前期中頃のものが主体である。この調査で、吉田遺跡が山口県内でも数少ない、弥生時代全般にわたって継続的に営まれた集落であることが判明した。農学部附属農場牛舎新営に伴う試掘調査では造成による削平が著しく、顕著な遺構・遺物は検出できなかった。独身宿舎改修に伴う試掘調査では、旧水田耕土下に摩耗した土器片を含む層が堆積していたが、遺構ではなく、土器片を含む層は流れ込みによって形成されたものと考えられる。第2学生食堂増築に伴う試掘調査では、A、B、2ヶ所のトレンチを設けて調査を行った。Aトレンチには遺構は認められなかつたが、Bトレンチでは柱穴2基を検出した。また、立会調査では、基幹環境整備工事に伴う立会調査で河川を検出した。その他の立会調査では顕著な遺構・遺物は検出できなかつた。

亀山構内では、立会調査1件を実施したが、顕著な遺構・遺物は検出できなかつた。

小串構内では試掘調査1件を実施した。医学部看護婦宿舎新営に伴う試掘調査では、顕著な遺構・遺物は検出できなかつた。

常盤構内では試掘調査1件を実施した。国際交流会館新営に伴う試掘調査では、旧地形は大きく削平されていたが、北端と南端部分で遺物包含層の可能性がある土層を確認した。また、隣接した烟地からは、縄文時代の石鏃1点を採集した。

2 平成10年度山口大学構内遺跡調査の概要

平成10年度は事前調査3件、試掘調査2件、立会調査7件の計12件の調査を実施した。

吉田構内では、事前調査1件、試掘調査1件、立会調査6件を実施した。第2学生食堂の増築及び改修に伴う発掘調査では、弥生時代前期末の土器溜まり1ヶ所、平安時代の大



Fig.80 第2学生食堂調査区位置図

溝1条、掘立柱建物2棟、中世の掘立柱建物5棟、古代～中世の多数の柱穴、遺物包含層などを検出した。また、弥生土器、8～10世紀の土師器、須恵器をはじめ、縄文～弥生時代の石器など、縄文時代～中世の遺物が出土した。検出した遺構のうち、平安時代の大溝は昭和46年調査部分と合わせて、長さが約50mに及ぶことが判明した（Fig.80）。溝の東側に同時期の建物や柱穴が分布することから、大溝はこれらの施設の区画を意図したものと考えられる。調査地から約100m北西に位置する大学会館敷地では、木簡、石帯、縄釉陶器、墨書き土器、円面鏡など、官衙関連施設に特有な遺物が検出されている。この調査で検出した遺構群はこれらを表付けるものとして評価できる。教育学部附属養護学校給食室改修に伴う試掘調査では、調査面積は狭小であったが、近世～近代の水田に伴う杭列や弥生～古墳時代の土坑、縄文時代の河川を検出した。立会調査は小規模なものが多く、顕著な遺構、遺物は検出できなかった。

小串構内では事前調査2件を実施した。宇部市土地区画整理事業に伴う発掘調査（1次）では、弥生時代終末～古墳時代初頭の土器の集中部、近世～近代の木組用水路、小溝、杭列及び歓溝などの遺構を検出し、旧石器時代の剥片類、縄文時代～近世・近代の土器片などが出土した。特に弥生時代終末～古墳時代初頭の土器については、医学部構内はもとよ

り、近辺でもこの時期の遺物が出土した例がないことから貴重な発見となった。宇部市土地区画整理事業に伴う発掘調査（2次）では、弥生時代終末～古墳時代の土器集中部と近世～近代の小溝を検出した。またほぼ完形に復元できる縄文時代後期の鐘ヶ崎式土器が1点出土した。1・2次調査の意義は宇部市域の低地部における遺物の出土を確認したことにして集約される。縄文土器、弥生土器、土師器が出土したことから、調査地付近に集落が形成されていた可能性を示すものであり、今後の調査が期待される。

亀山構内、光構内では教育学部附属小・中学校の給食室改修に伴い、試掘調査・立会調査を実施したが、顕著な遺構・遺物は検出できなかった。

3 平成 11 年度山口大学構内遺跡調査の概要

平成11年は事前調査1件、試掘調査1件、立会調査6件の計7件の調査を実施した。

吉田構内では立会調査5件を実施した。第2学生食堂新営その他に伴う屋外電力線路施設整備工事に伴う立会調査では、農学部実験畑のC地点で古墳時代～古代の遺物包含層と柱穴、ボイラー室北側のD地点で平安時代の河川を検出した。その他の立会調査では顕著な遺構・遺物は検出できなかった。

小串構内では事前調査1件を実施した。宇部市土地区画整理事業に伴う発掘調査（3次）では、旧石器時代のメノウ製の剥片類、近世～近代の暗渠、木組用水路・土坑を検出し、これらに伴って陶磁器類が出土した。

光構内では試掘調査1件、立会調査を1件を実施した。教育学部附属光小・中学校上水道（給水管）改修に伴う試掘・立会調査では、古墳時代～中世の遺物包含層、古墳時代～中世の柱穴、土坑、近世～近代の土坑、埋甕を検出し、土師器、須恵器、近世～近代の陶磁器が出土した。特に小学校運動場のCトレントンからは古墳時代の遺物包含層から土師器、須恵器が多数出土し、全国的にも希な韓式系竈形土器が出土した。また、附属中学校体育館前のJ地点では、中学校体育館建設時に発見された黒褐色砂礫層と同一とみられる青黒色砂層を検出し、土師器、須恵器、竈形土器が出土した。この調査によって、光構内の広い範囲で、古墳時代、近世～近代の遺構・遺物が分布していることが明らかとなった。

4 平成 12 年度山口大学構内遺跡調査の概要

平成12年度は事前調査1件、試掘調査2件、立会調査11件の合計14件の調査を実施した。

吉田構内では試掘調査1件、事前調査1件、立会調査8件を実施した。総合研究棟新営に伴う発掘調査では、平安時代の河川、中～近世の柱穴、土坑を検出し、弥生土器、土師器、須恵器などが出土した。注目すべき遺物として、吉田遺跡で3点目となる円面鏡(Fig.82-1)

と製塩土器片がある。河川の遺物の分布は調査区東部に集中していることから、同時期の遺構は調査地の東に隣接する家畜病院付近に分布していると推測される。立会調査では災害復旧架空電線埋設工事に伴う立会調査、基幹環境整備（外灯新設）工事に伴う立会調査の一部で遺構・遺物を確認したほかは、顕著な遺構・遺物は検出できなかった。

常盤構内では試掘調査1件を実施した。福利厚生棟新営に伴う試掘調査では顕著な遺構・遺物は検出できなかった。

亀山構内では立会調査1件を実施したが、顕著な遺構・遺物は検出できなかった。

光構内では立会調査2件を実施した。このうち、災害復旧教育学部附属光小・中学校護岸石積改修工事に伴う立会調査では、一部の地点で近世～近代の石垣を検出し、陶磁器が出土した。

5 平成13年度山口大学構内遺跡調査の概要

平成13年度は試掘調査3件、立会調査9件の合計12件の調査を実施した。

吉田構内では、試掘調査1件、立会調査9件を実施した。経済学部校舎改修プレハブ校舎新営に伴う試掘調査では1条の河川を検出し、縄文土器、土師器、須恵器が出土した。立会調査では、総合研究棟新営屋外配管布設工事に伴う立会調査と環境整備（外灯）工事に伴う立会調査で河川を検出したが、遺物は出土しなかった。その他の立会調査では、顕著な遺構・遺物は検出できなかった。

小串構内では試掘調査1件を実施した。医学部附属病院立体駐車場新営に伴う試掘調査では、現地表下1.6m以上の深さの暗灰色砂、暗灰色粗砂から弥生時代～中世の土器が出土した。従来考えられていたより深い土層に遺物が含まれていることが明らかとなり、小串構内で地下掘削を伴う施設整備に際しては、より慎重に対応する必要が生じた。

常盤構内では試掘調査1件を実施した。インキュベーションセンター新営に伴う試掘調査では、顕著な遺構・遺物は検出できなかった。

6 平成14年度山口大学構内遺跡調査の概要

平成14年度は事前調査1件、試掘調査3件、立会調査8件の合計12件の調査を実施した。

吉田構内では、事前調査1件、立会調査6件を実施した。農学部校舎他改修（解剖実習棟校舎新営）に伴う発掘調査²⁾では、調査地の北部で8～10世紀の遺物包含層と柱穴、土坑、掘立柱建物跡6棟と柵列、調査地の南部では、平安時代の河川と3棟の掘立柱建物を検出した（Fig.81）。出土遺物（Fig.82）には、土師器、須恵器、墨書き土器（須恵器坏蓋）「官」（2）、綠釉陶器（3～9）、六連式製塩土器（10～18）、瓦片（19）、輪羽口（20・21）、鉈尾（22）。

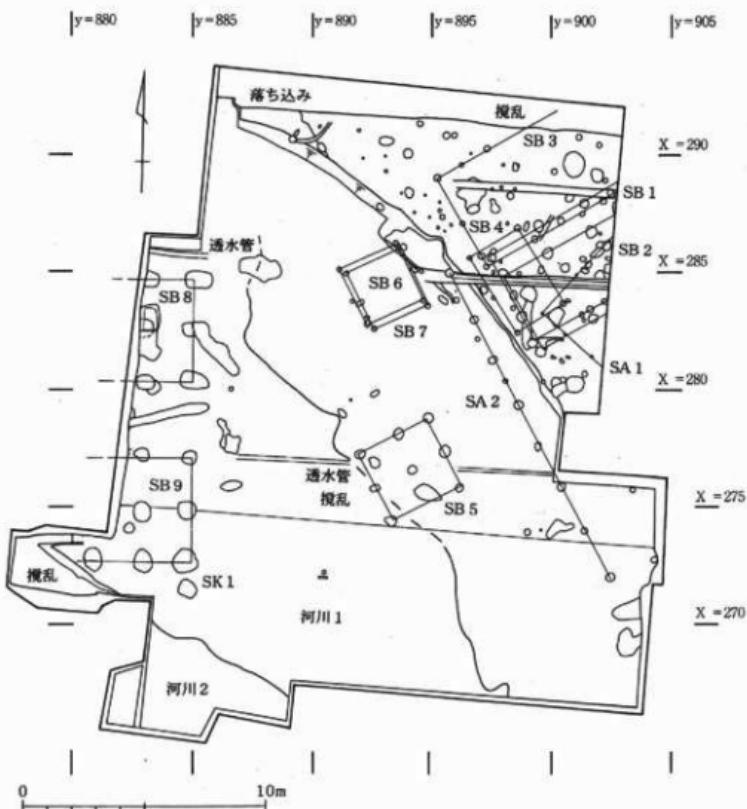


Fig.81 農学部解剖実習棟調査区造構概略図

銅鉱石、鉱滓などがある。墨書き土器は判読しにくいが、摘みと天井部の2ヶ所に「官」の文字が認められる。緑釉陶器には3・6・9のように赤褐色に発色しているものがあり、何らかの要因で還元状態で二次的に被熱したものと考えられる。^b 鉈尾は鉄棹とバリがついた未製品で、調査区近辺で製作されたことが明らかである。この鉈尾は最小の部類に属するもので、ほぼ同規格の製品が大阪府船橋遺跡、平城京、山形県牛森古墳などで出土しており^c、腰帶具の生産及び流通を探る上で貴重な資料と位置づけられる。前述のように、調

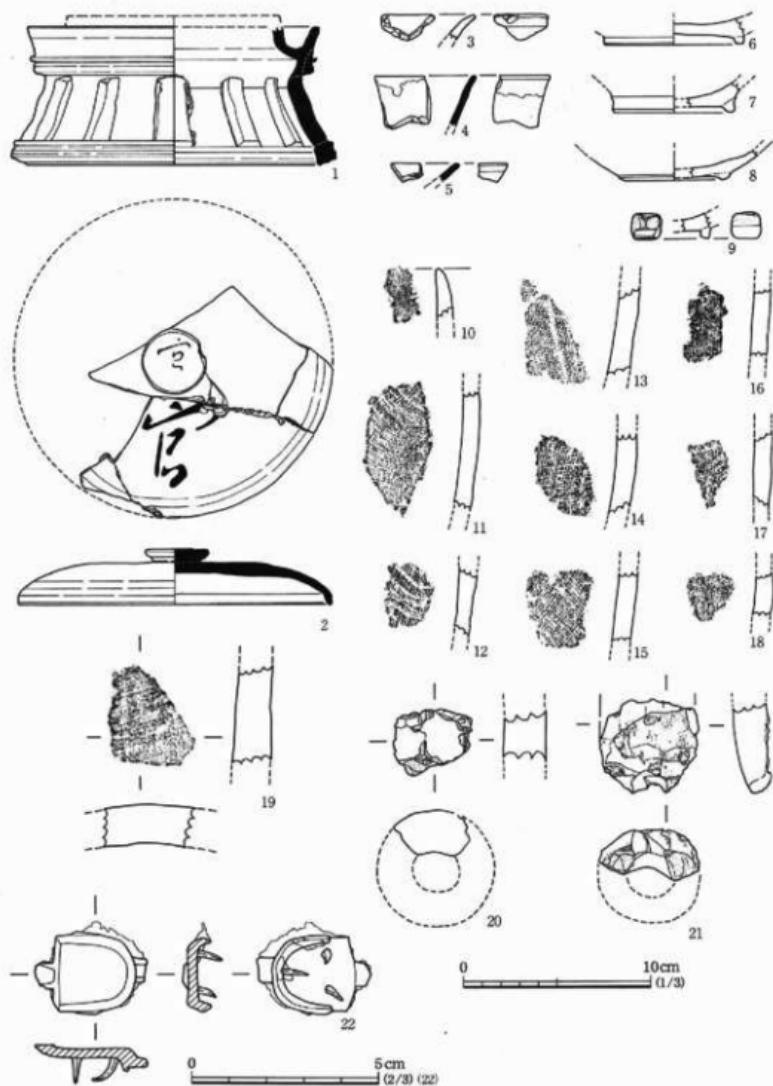


Fig.82 総合研究棟・農学部解剖実習棟敷地出土遺物実測図

査区に隣接する総合研究棟の新營に伴う発掘調査では、同じ河川から円面鏡、墨書き土器などが出土している。また、北西に約300m離れた第2学生食堂敷地では、平安時代の大溝、掘立柱建物、大学会館敷地では、円面鏡、墨書き土器、石帯など特殊な遺物が出土している。しかし、これらの調査においては、金属生産に係わる遺物はほとんど出土しておらず、解剖実習棟敷地周辺には工房域が存在していた可能性が考えられる。いずれにせよ、吉田構内の東半部の広い範囲で何らかの官衙関連施設が存在したことが確実となった。詳細については、本報告時に検討したい。

立会調査では、農学部附属農場実験圃場整地工事に伴う立会調査で、遺物包含層を検出した。また、農学部校舎改修工事に伴う立会調査では、現地表下約10~40cmで、連合獣医学科棟で検出されたものと同一と考えられる縄文時代の河川を検出した。

亀山構内では立会調査2件を実施した。このうち、教育学部附属山口中学校給水設備改修工事に伴う立会調査では、運動場で現地表下約40cmで河川堆積土、テニスコート敷地で現地表下約50cmで柱穴6基を検出し、土師器小片が出土した。

小串構内では試掘調査2件を実施した。総合研究棟新營に伴う試掘調査では、現地表下1.6m以上の深さの砂層から、縄文土器、土師器、須恵器、瓦質土器、土師質土器、陶器など多様な遺物が出土した。このうち、1点ではあるが、六連式土器の胴部片が出土したことが注目される。字部市域では東岐波波雁ヶ浜遺跡に続いて2例目となり、遺跡の性格を解明する上で、貴重な手がかりが得られた。高エネルギー棟新營に伴う試掘調査では、顯著な遺構・遺物は検出できなかった。

常盤構内では試掘調査1件を実施した。総合研究棟新營に伴う試掘調査では、顯著な遺構・遺物は検出できなかった。

(田畠)

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館新營に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年)
- 2) 田畠直彦 「山口大学構内吉田遺跡 - 農学部校舎改修(解剖実習棟新營)に伴う発掘調査略報 - 」(『山口考古』第22号、37~40、2002年)
- 3) 防府市教育委員会 杉原和恵氏のご教示による。
- 4) 秋山浩三 「大阪府の縄帶」(奈良文化財研究所編『縄帶をめぐる諸問題』、2002年)

Tab.11 出土遺物觀察表（土器）

注量（）は復元値

番号	出土遺物	器種	直径 (cm)	高さ (cm)	断面 (cm)	主な 外観的特徴	断面	備考
1	考古研究標本地 河川	縦窓器 円窓型 舟形部	(15.6)	(15.6)		①灰色 ②明黄色	0.5~1.5 mmの砂粒を含む	海部に付着
2	考古学解剖実習標本地 河川 1	縦窓器 扁盤	天井~ 口縁部	(16.6)		3.0	灰~青灰色	0.5~4 mmの砂粒を含む 「S」の巻きあり 内面 にも墨付有、軋用脱少
3	考古学解剖実習標本地 河川 1	縦窓器 坂	口縁部				灰地 灰白色 壁 壁褐色	0.5~1 mmの砂粒をわず かに含む
4	考古学解剖実習標本地 太田路上	縦窓器 坂	口縁部				灰地 青灰色 壁 壁オーバーフロー	上斜質
5	考古学解剖実習標本地 河川 1	縦窓器 坂	口縁部				灰地 青灰色 壁 オーバーフロー	精良
6	考古学解剖実習標本地 木村路上	縦窓器 坂	底部	(7.2)			灰地 灰白色 壁 壁褐色	0.5~1.5 mmの砂粒を含む
7	考古学解剖実習標本地 河原野	縦窓器 坂	底部	(6.4)			灰地 灰白色 壁 壁褐色	0.5 mmの砂粒を含む
8	考古学解剖実習標本地 河川 1	縦窓器 坂	底部	(5.1)			灰地 灰~一様色 壁 オーバーフロー	0.5~1 mmの砂粒を含む
9	考古学解剖実習標本地 河川 1	縦窓器 坂	底部				灰地 灰白色 壁 壁褐色	0.5~2 mmの砂粒を含む
10	考古学解剖実習標本地 河川 1	六式製陶土器	口縁部				橙色	土斜質
11	考古学解剖実習標本地 河原野	六式製陶土器	胴部				橙色	0.5~3 mmの砂粒を含む
12	考古学解剖実習標本地 河川 1	六式製陶土器	胴部				①青灰色 ②褐色	1~3 mmの砂粒を含む
13	考古学解剖実習標本地 河原野	六式製陶土器	胴部				③にぶい褐色 ④褐色	0.5~2 mmの砂粒を含む
14	考古学解剖実習標本地 河原野	六式製陶土器	胴部				⑤灰褐色 ⑥褐色	0.5~3 mmの砂粒を含む
15	考古学解剖実習標本地 河原野	六式製陶土器	胴部				⑦灰褐色 ⑧褐色	0.5~3 mmの砂粒を含む
16	考古学解剖実習標本地 河原野	六式製陶土器	胴部				⑨灰褐色 ⑩褐色	0.5~2 mmの砂粒を含む
17	考古学解剖実習標本地 河原野	六式製陶土器	胴部				⑪灰褐色 ⑫褐色	0.5~3 mmの砂粒を含む
18	考古学解剖実習標本地 河原野	六式製陶土器	胴部				⑬灰褐色 ⑭褐色	0.5~3 mmの砂粒を含む
19	考古学解剖実習標本地 河原野	瓦					⑮灰白色 ⑯褐色	0.5~3 mmの砂粒を含む
20	考古学解剖実習標本地 河原野	輪II	胴部				⑰暗灰~灰白色 ⑱淡黄褐色	1~3 mmの砂粒を含む
21	考古学解剖実習標本地 SK 1	輪II	胴部		輪部径 (5.8)		⑲黄灰色 ⑳褐色	1~3 mmの砂粒を含む
								被熱 ガラス質付着

Tab.12 遺物觀察表（青銅製品）

番号	出土遺物	名 称	最大径 (cm)	最大高 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	備 考
1	考古学解剖実習標本地 河川 1	鉄 銛	3.0	2.2	1.1	9.65	バリと脱片が残る本製品、全面に錆跡が吹いている。爪は 裏面側に折れ曲がったもの。

付篇 I

山口大学構内吉田遺跡における官衙遺構立地前後の植生変化

野井 英明※

1 はじめに

山口大学構内吉田遺跡において平成14年度に農学部解剖実験棟敷地で行われた発掘調査によって得られた試料について花粉分析を行った。今回は、その概要を報告する。

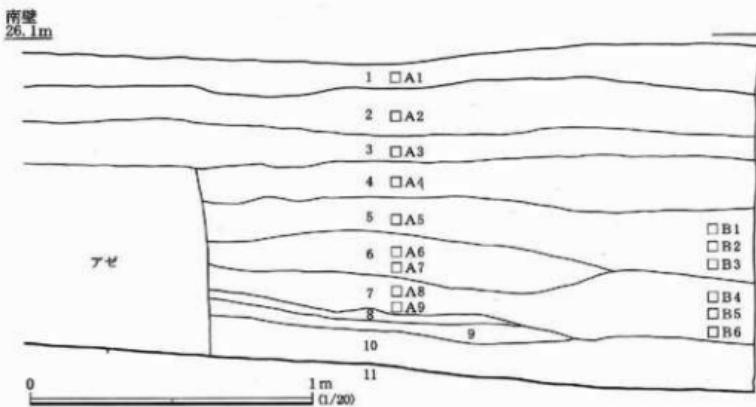
2 試料

試料は、調査区域南部、河川2の南壁から採取した(Fig.83)。これらのうち、試料A9～A8、B6～B4は無遺物層にA7～A1、B3～B1は9世紀以降に堆積をはじめた地層に相当する。¹⁾吉田遺跡では広い範囲で官衙関連施設が存在したことが推測されており、この調査区でもその一部と考えられる掘立柱建物が検出されている。²⁾これらのうち、SB-8、SB-9が存在していた時期に堆積した堆積物は、この調査区では特定できないため、花粉分析によってその時期の植生や環境について議論することは難しいと思われる。しかし、今回採取した試料のうち、第7層(試料B6～B4、A9～A8)は無遺物層であることからその築造前、第4層(試料A4～A1)は柱穴を覆っていることから、その放棄後の堆積物であることは明らかである。第5層、第6層(試料B3～B1、A7～A5)はその存在時期と同時期あるいは直前の堆積物である可能性も考えられる。本論では、これらの前提をもとに、花粉分析によって、官衙関連施設(SB-8、SB-9)の設営前後の植生変化について検討することを目的とし、採取した試料のうち、B5(第7層)、B2(第5層)、A4(第4層)、A3(第3層)の4点について、概観的な花粉分析を行った。

3 結果

結果は、各分類群の出現率を木本類を基準とする百分率で表したダイアグラムで示した(Fig.84)。

※北九州市立大学文学部



層序			
1	水田灰土	黄灰色シルト	7 河川2堆土 灰色粘土
2	河川1堆土	純灰色シルト	8 河川2堆土 灰色粗砂 (10cm大の礫を含む)
3	河川1堆土	墨褐色シルト	9 河川2堆土 黑色粘土
4	河川1堆土	灰色シルト (数cm大の礫・粗砂を多く含む)	10 河川2堆土 灰色粗砂
5	河川2堆土	灰色シルト (粗砂・シルトブロックを含む)	11 地山 黄褐色粘土
6	河川2堆土	灰色シルト (粗砂を多く含む)	

Fig.83 花粉分析試料採取層準 (河川1・2南壁)

試料B5では他の試料と比べて、照葉樹林構成要素のアカガシ亜属、シイノキ属を主とする常緑広葉樹の比率が高く草本類は比較的低率である。また、マツ属が比較的低率であるのも特徴である。試料B2、A4、A3は、ほぼ同様な花粉組成を示す。木本類はアカガシ亜属を主としシイノキ属を交える常緑広葉樹と、マツ属が優占する。草本類は、イネ科が圧倒的に優占しヨモギなども交える。下位から上位に向かって、イネ科、マツ属花粉が増加する傾向がみられる。

4 考察

今回の調査地区の中で検出された掘立柱建物(SB-8,SB-9)は、河川2に隣接している。河川2を埋める堆積物のうち第7層(試料A9～A8, B6～B4)からは遺物が検出されていないことから、これらの堆積時期には、この区域では人間の活動はさほど活発ではなかったものと考えられる。それを裏付けるように、今回の花粉分析(試料B5)においても、この時期の植生は潜在自然植生であるシイ類・カシ類を主とする照葉樹林が今回の調査区

周辺の広い範囲で残されていたことがわかる。しかし、イネ科花粉も60%程度検出され、マツ属花粉もみられることからすると、調査区の範囲に限ってみると、人間の植生への干渉がすでに始まっており、住居・水田・畑地などの開発を目的とした照葉樹林の破壊が行われ、イネ科雑草が茂る地域や二次林のマツもみられたであろう。

その後、河川の流路が移動しこの地区を流れなくなったころ、掘立柱建物（SB-8、SB-9）が築造されたと考えられる。この時期の堆積物は特定できないが、仮に第5層（試料番号A5、B3～B1）の時期がその時期に近いとすると、この時期は草本類、特にイネ科が急増し、ヨモギ属、タデ属、ナデシコ科などの雑草類も試料B5より比較的多くなることから考えて、人間の植生への干渉が大きくなった時期にあたる。ここで検出されたタデ属、ナデシコ科は畑に特徴的にみられる畠雑草であり、調査区周辺で農耕地が新たに開発されたと推定される。しかし、照葉樹林要素も、多少減少するものの下位とほぼ同様にみられる事から、この開発は今回の調査地区を中心に行われ、それほど広い範囲には及ばなかつたのではないかと考えられる。

掘立柱建物（SB-8、SB-9）の柱穴は第4層で覆われている。この第4層は、河川2とともに河川1の一部を埋めて堆積していることから、河川2の流路がこの第4層の時期から拡大したと考えられる。しかしながら、これらの遺構の柱穴は第4層以前の堆積物で充てんされていることから、第4層の堆積が放棄の直接の原因とは考えられず、第4層の堆積前に放棄されたと考えられる。第4層の堆積に

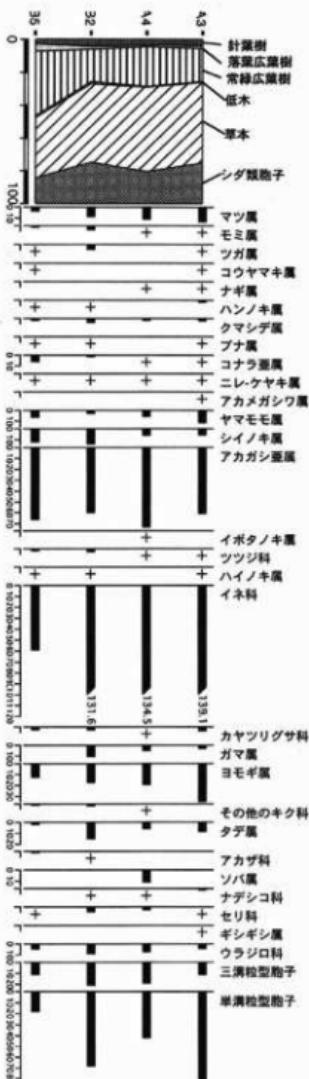


Fig.84 花粉ダイアグラム

先立って、掘立柱建物（SB-8、SB-9）は洪水や土石流にしばしば見舞われるようになったことが推察され、それが原因で放棄されたのであろう。第4層は河川2の流路から溢れて堆積しており、淘汰の悪い比較的疎粒な堆積物であるところから、第4層自身も洪水堆積物あるいは土石流堆積物である可能性がある。また、柱穴を充填する堆積物は、柱穴の周囲には広がっていないことから考えると、第4層の堆積直前には何らかの形で掘立柱建物（SB-8、SB-9）の立地地点が侵食される時期があったと推測され、その侵食の原因のひとつとして土石流もあげられよう。

第4層から採取した試料A4ではソバ属花粉が検出され、掘立柱建物（SB-8、SB-9）放棄後には、近くの畑地ではソバの栽培も始まっている。草本類の花粉は樹木花粉と比べて比較的近くの植生を反映しており、雑草類には下位と同様に烟雜草が多いことから、調査区の比較的近くで烟が営まれたであろう。第3層から採取した試料A3ではマツ属、イネ科やヨモギ属などの草本類が増加し、開発はさらに進んだことを示している。

5 まとめ

今回の花粉分析によって、以下のことが明らかになった。

官衙関連施設と考えられている堀立柱建物（SB-8、SB-9）の築造前は、本調査地域では環境への人間の干渉は比較的少なかったが、それらの築造時あるいはその直前になると、烟の開墾や建物の敷地の開発などと思われる環境への干渉が急に大きくなつた。また、このような干渉は、堀立柱建物（SB-8、SB-9）の放棄後もしだいに大きくなつていつたと考えられる。

[注]

- 1) 田畠直彦 「山口大学構内吉田遺跡－農学部校舎改修（解剖実習棟新設）に伴う発掘調査略報－」（『山口考古』第22号、37-40、2002年）
- 2) 前掲注1文献

付篇Ⅱ

吉田構内農学部附属農場の分布調査

田畠 直彦

1はじめに

第6章で報告した農学部バイオ環境制御施設新館に伴う試掘調査時に、調査対象となつた5号田では須恵器を主体とする多数の土器片を採集し、周辺の水田や畑においても土器片が散布しているのを確認した。実験水田においては、過去においても土器が採集されている。しかし、統合移転時の調査以来、附属農場敷地における発掘調査は少なく、分布調査が行われたことはない。また、土器片の分布を確認した際、一部については耕土中に含まれる礫とともに畦道などに廃棄されていたうえ、採集した土器には、耕作により破碎された痕跡を持つもののが多かった。そこで、早急に現状における遺物の分布を把握し、埋蔵文化財の遺存状況を探るために、農学部の許可を得て分布調査を行った。

現地調査の方法は図示した地区を1単位として、田畠が単独で踏査した。調査期間は平成9年12月から平成10年5月の間で、水田の刈り入れ後、耕されている状態で行った。なお、位置図で記載のない箇所は、耕作のため立ち入れなかったか、休耕等の理由で耕されていなかったため、調査を行うことができなかつた。

2 調査結果

以下では、各地点ごとに概要を述べたい。

A地区（正門東側実験水田・Fig.85）

平成10年2月21日に踏査を行った。本地區では踏査の結果、A-1地点で2点、A-2地点で2点、合計4点の須恵器片を採集するにとどまった。構内東側の実験水田（G～K地区）と比較すると、採集点数が極端に少ない。本地区では、過去に発掘調査が行われたことはなく、埋蔵文化財の有無は不明である。掲載遺物はA-1地点出



Fig.85 調査区位置図①

土遺物で、1は須恵器坏身の底部、2は須恵器坏蓋の口縁部である。

B地区（大学会館北側牧草地・Fig.85）

平成10年2月14日に踏査を行った。本地区は統合移転時に第I地区D区とされ、吉田遺跡調査団により発掘調査が行われた。¹⁾また、埋蔵文化財資料館が大学会館敷地の発掘調査を行っている。これらの調査で、谷地形と縄文～近世の遺物包含層、近世大溝、古墳時代の井戸などが検出されている。ただし、本地区では、現状で約1m前後の盛土がなされているため、採集遺物が本地区以外からの客土に含まれていた可能性がある。

遺物は、B-1地点で須恵器坏身の底部を1点、須恵器坏蓋片を1点、合計2点を採集するにとどまった。

C地区（貯水池南側水田・Fig.86）

平成9年12月13日、10年2月21日、3月15日に踏査を行った。なお、これに前後して、平成9年3月12日、平成10年5月9日にも遺物を採集した。本地区は統合移転時に第IV地



Fig.86 調査区位置図②

区と呼ばれた地域に含まれる。第3章で報告したように溜池の東側では、農学部附属農場排水管布設に伴う試掘調査で、古代から中世にかけての遺物包含層、ピット群を検出している。また、西に隣接する丘陵斜面には横穴墓の存在が指摘されている。²⁾本地区では、全域で耕土中に礫を多く含んでいる。

本地区的採集遺物は64点である。須恵器が主体であるが、姫島産黒曜石の剥片を1点採集しており、周間に縄文～弥生時代の遺構と遺物が分布する可能性を示唆する。3は須恵器坏身の口縁部、4は須恵器坏蓋の口縁部、5は須恵器壺の口縁部である。6は須恵器

B～D地区

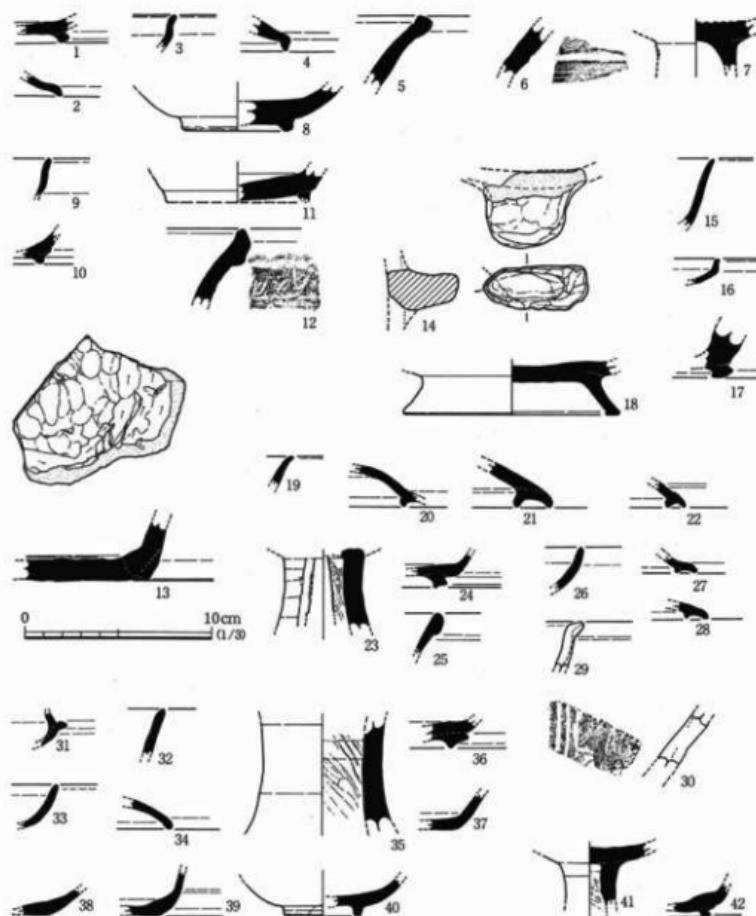


Fig.87 採集遺物実測図

壺の頭部と考えられる。沈線の上下に横描波状文を施す。7は須恵器高壺の壺部～脚部である。8は龍泉窯系青磁碗の底部である。高台内は露胎で内外面に施釉する。

D地区（観測所北側水田・Fig.86）

平成9年12月5日、平成10年1月13日、2月21日、3月4日、3月15日に踏査を行った。

本地区は道路を挟んだ東側が統合移転時の第Ⅳ地区、西側が第Ⅰ地区に相当する。調査当時、一部については耕作中であったが、須恵器片を主体として、47点の遺物を採集した。古代の遺構と遺物が確認された農業観測観測実験施設に隣接しており、同時期の遺構群が展開している可能性が高い。9は須恵器坏身の口縁部か。10、11は須恵器坏身の底部、12は須恵器壺の口縁部である。13は近世粗陶器壺の底部と考えられる。

E地区（第2学生食堂東側畠・Fig.86）

平成10年5月9日に踏査を行った。本地区にはビニールハウスが多く建ち並んでおり、また、耕作中の箇所が多かったため、ごく限定された範囲での調査となった。そのため、器種不明の須恵器片を1点採集したに過ぎない。ただし、平成11年度に行った電柱布設に伴う立会調査で古代の遺物包含層と遺構を確認していることから、南半部を中心に同時期の遺構群が分布しているものと推測される。

F地区（観測所西側畠・Fig.86）

平成10年3月4日、4月27日、5月5日、5月6日、5月9日に踏査を行った。本地区は昭和62年、平成3年にも遺物が採集されている。農業観測観測実験施設の西に隣接しており、古代の遺構群が分布している可能性が高い。37点の遺物を採集した。14は土師器壺または瓶の把手である。15は須恵器坏身の口縁部である。16は須恵器盤の口縁部か。17は須恵器坏身の底部である。18は須恵器壺の底部と考えられる。

G～K地区（構内東側実験水田 1～5号田・Fig.86）

平成9年11月26日、12月3日、6日、12月11日、12日、12月13日、平成10年1月10日、1月13日、2月14日、2月21日、2月26日、3月5日、4月27日に踏査を行った。また、平成9年3月12日にも遺物を採集した。過去には、J地区（4号田）で昭和60年、61年に弥生土器、須恵器が採集されている。なお、K地区（5号田）はバイオ環境制御施設新営に伴う試掘調査を行っていた関係で踏査回数が多くなった。いずれの地区も耕土中に礫を多く含んでおり、同調査で検出された河川が存在する可能性が高い。また、遺物は北半部で多く採集しており、遺構の密度と関連する可能性がある。以下各地区ごとに述べたい。

G地区（構内東側実験水田 1号田）

北半部を中心に40点の遺物を採集した。19は須恵器坏身の口縁部、20・21は須恵器坏蓋の口縁部である。

H地区（構内東側実験水田 2号田）

北半部を中心に24点の遺物を採集した。22は須恵器坏蓋の口縁部である。

I 地区（構内東側実験水田 3号田）

北半部を中心に29点の遺物を採集した。23は須恵器高壺の脚部である。透かし穴の一部が残存する。24は須恵器壺身の底部である。25は白磁の口縁部である。口縁部が玉縁状を呈する。

J 地区（構内東側実験水田 4号田）

39点の遺物を採集した。26は須恵器高壺の壺部か。27・28は須恵器壺蓋の口縁部である。29は瓦質土器の口縁部である。30は瓦質土器擂鉢の胴部である。

K 地区（構内東側実験水田 5号田）

72点の遺物を採集した。31は須恵器壺身の口縁部か。32は須恵器壺身の口縁部、33は須恵器皿の口縁部、34は須恵器壺蓋の口縁部である。35は須恵器長頸壺の頸部である。36～38は須恵器壺身の底部である。39は須恵器壺の底部か。40は施釉陶器の碗か。内外面に施釉し、貫入が認められる。

L 地区（椹野寮北側牧草地・Fig.86）

本地区は統合移転当時、第Ⅱ地区と呼ばれていた地区に相当し、吉田遺跡調査団の発掘調査によって古代～中世の柱穴・溝が検出されている。また、古墳の埋葬施設の一部と推測される板石、埴輪片が出土したとされる。しかし、保存のためすぐに埋め戻されており、詳細は不明である。その後、昭和54年に山口大学考古学部によって円筒埴輪片が採集された。昭和60年に吉田寛氏は採集された埴輪片の検討を行い、時期は川西編年V期に相当する6世紀前半頃のもので、埴輪の存在から本地点に首長墓クラスの古墳が存在する可能性を指摘している。また、本地区では昭和60年段階でも多数の土器片が散布していたという。

本地区は、平成10年2月22日に踏査を行った。図示した範囲全域を踏査したが、L-1地点でのみ14点の遺物を採集した。41は須恵器高壺の壺部～脚部である。42は須恵器壺身の底部である。図示した以外に瓦質土器片、磁器片なども採集したが、古墳に関連する遺物は採集することができなかった。

3 まとめ

今回調査を行った農学部附属農場は統合移転前の水田を造成したため、耕土・表土の下に造成土がみられる。このため、採集遺物が他から持ち込まれた客土に含まれていた可能性がある。また、A・B・L地区では採集点数が少なかったが、B・L地区では発掘調査で遺構と遺物が確認されているように、現況が地下の遺構・遺物の存在を反映していない

可能性もある。したがってA地区でも遺構・遺物が存在する可能性がある。一方、比較的採集遺物が多いC～K地区が注目される。附属農場関係者によれば、C～K地区では統合移転直後から耕作時に遺物が出土し、耕作の障害になることが多かったという。これらの状況から、地下に遺構・遺物が存在する可能性が高い。採集遺物の約9割が須恵器で、時期が判断できるものは7世紀後半から10世紀にかけてのものが主体であることから、C～K地区及びその周辺には古代の遺構・遺物が存在するのであろう。

調査後、構内の中央部には空閑地がほとんどないため、平成12年度の総合研究棟や平成14年の解剖実習棟など、新営建物の敷地が構内東部の農学部附属農場敷地に求められるようになった。調査の結果、第8章で述べたように、この一帯には古代における何らかの官衙関連施設の存在が確実となった。また、埴輪を伴う古墳の存在も注目されよう。以上により、吉田構内東部の農学部附属農場敷地は、構内全体における埋蔵文化財保護の観点から、第1学生食堂と大学会館前庭部の遺跡保存地区に匹敵する重要な地区であり、今後の施設整備にあたっては、埋蔵文化財の保護に十分な注意を払う必要がある。

〔注〕

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「付属I 吉田遺跡第I地区D区の調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報XIII』、1995年)
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館新宮に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報III』、1985年)
- 3) 石川卓美『平川文化散歩』(山口市平川公民館、1972年)
- 4) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内農学部農業環境観測実験施設新宮に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報X』、1992年)
- 5) 山口大学埋蔵文化財資料館「污水排水管整備に伴う立会調査」(『山口大学埋蔵文化財資料館調査研究年報VI』、1987年)
- 6) 山口大学埋蔵文化財資料館「農学部仮設プレハブ設置に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報XI』、1993年)
- 7) 山口大学埋蔵文化財資料館「農学部附属農場飼料園排水溝修復整備に伴う立会調査」(『山口大学埋蔵文化財資料館調査研究年報V』、1986年)
- 8) 山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』(山口大学、1976年)
- 9) 吉田寛「吉田遺跡採集の円筒埴輪について」(『山口大学埋蔵文化財資料館調査研究年報IV』、1985年)

Tab.13 採集遺物一覧表

地 区	陶生	土器	磁器	瓦質	陶器	磁器	石器	合計	備 考
A地区 (正門東側水田)	0	0	4	0	0	0	0	4	1、2
B地区 (大学会館北側牧草地)	0	0	2	0	0	0	0	2	
C地区 (野木池南水田)	0	3	58	0	1	1	1	64	3~8
D地区 (親水実験施設北側水田)	0	3	42	0	1	1	0	47	9~13
E地区 (第2学生食堂東側畑)	0	0	1	0	0	0	0	1	
F地区 (親水実験施設西側畑)	0	2	34	0	0	1	0	37	14~18
G地区 (1号田)	0	0	39	0	0	1	0	40	19~21
H地区 (2号田)	0	1	22	1	0	0	0	24	22
I地区 (3号田)	0	7	19	0	1	2	0	29	23~25
J地区 (4号田)	0	2	31	3	2	1	0	39	26~30
K地区 (5号田)	0	1	63	4	2	2	0	72	31~40
G~K地区 (1~5号田)	0	3	5	1	0	0	0	9	附属農場技官諸氏の表採
L地区 (福野寮北側牧草地)	0	1	10	1	1	1	0	14	41、42
合計	0	23	330	10	8	10	1	382	

Tab.14 採集遺物観察表 (土器)

法量 () は復元値

遺物番号	地 点	器 形	部 位	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	性 質 内外面状況	胎 土	備 考
1	A-2地点	磁器器 壺身	底部				青灰色	0.5~1mmの砂粒を含む	
2	A-1地点	磁器器 壺身	口縁部				①灰白色 ②灰褐色	0.5~1mmの砂粒を含む	
3	C地区	磁器器 壺身	口縁部				灰白色	0.5~1mmの砂粒を少量含む	
4	C地区	磁器器 壺身	口縁部				灰白色	0.5~1mmの砂粒を含む	
5	C地区	磁器器 壺	口縁部				灰白色	1mm以下の砂粒をわずかに含む	断面アンコ状 断面がみられる
6	C地区	磁器器 壺身	底部				①灰白色 ②灰褐色	粗粒	大型壺の底部から 外表面粗粒状
7	C地区	磁器器 高壺	壺身~ 肩部				灰白色	0.5~1mmの砂粒を含む	
8	C地区	磁器 壺	底部	(5.1)			素地 灰白色 釉 オリーブ灰白色	稍粗	龍泉窯系青磁 高台内 底胎 内外面施釉
9	D地区	磁器器 壺身	口縁部				灰白色	0.5~1mmの砂粒を含む	
10	D地区	磁器器 壺身	底部				灰白色	0.5~1mmの砂粒を含む	
11	D地区	磁器器 壺身	底部	(7.8)			オリーブ灰白色	1mm程度の砂粒を含む	
12	D地区	磁器器 壺	口縁部				灰白色	0.5mm程度の砂粒を含む	外表面粗粒状 自然釉のため羽裂剥離
13	D地区	近世粗陶器 壺身	底部				灰白色	0.5~2mmの砂粒を含む	磁器質内底面謎なナダ 粗面多數現る

吉田構内農学部附属農場の分布調査

法量()は復元値

番号	地 区	都 働 器	都 部	D径 (cm)	底径 (cm)	深 真 (cm)	外 内面	都 土	備 考
14	F地区	土耕器 極もしくは 鋸	把手				にぶい黄褐色	0.5~2mmの砂粒を含む	
15	F地区	根懸器 环身	口縁部 ~柄部				灰白色	微砂粒をわずかに含む	内外面回転ナダ
16	F地区	根懸器 鋸か	口縁部				灰色	0.5mm程度の砂粒をわずかに含む	表面アンコ状を呈する
17	F地区	根懸器 环身	底部				灰色	1mm程度の砂粒をわずかに含む	内底面自然粒付着
18	F地区	根懸器 鋸か	底部	(11.3)			灰白色	1mm程度の砂粒をわずかに含む	
19	G地区	根懸器 环身	口縁部				灰白色	精緻	
20	G地区	根懸器 环身	口縁部				①灰白色 ②灰褐色	精緻	
21	G地区	根懸器 环身	口縁部				灰白色	1mm以下の砂粒を少度含む	
22	H地区	根懸器 环身	口縁部				黄灰~灰白色	精緻	外表面自然粒付着
23	I地区	根懸器 高环	脚部				灰色	0.5~1mmの砂粒を少量含む	2方向通かし孔 2枚か
24	I地区	根懸器 环身	底部				灰色	0.5~1mmの砂粒を少量含む	
25	I地区	苗耕 殿	口縁部				素地 灰白色 精緻 オリーブ色	精緻	白磁玉棒状口縁内外面 無地
26	J地区	根懸器 高环环脚か ~柄部					灰色	0.5~1mmの砂粒を少量含む	風化している
27	J地区	根懸器 环身	口縁部				①灰白色 ②暗灰褐色	精緻	
28	J地区	根懸器 环身	口縁部				灰白色	精緻	表面アンコ状を呈する
29	J地区	瓦質土器	口縁部 ~柄部				暗灰色	1mmの砂粒をわずかに含む	内外面回転ナダ 口縁端部磨滅
30	J地区	瓦質土器 植株	頂部				①淡黄色 ②灰白色	0.5~3mmの砂粒を少量含む	風化している
31	K地区	根懸器 环身か	口縁部				灰色	0.5~1mmの砂粒を含む	蓋の可塑性あり
32	K地区	根懸器 环身	口縁部				灰色	0.5~1.5mmの砂粒を含む	
33	K地区	根懸器	口縁部				灰白色	0.5~1mmの砂粒を含む	
34	K地区	根懸器 环身	口縁部				灰白色	0.5~1mmの砂粒を少量含む	
35	K地区	根懸器 長搬運	頂部				灰白色	0.5~1mmの砂粒をわずかに含む	上下反転して別容器になる可能性あり
36	K地区	根懸器 环身	底部				①灰色 ②灰白色	0.5~2mmの砂粒を含む	
37	K地区	根懸器 环身	底部				灰色	0.5~1mmの砂粒を含む	
38	K地区	根懸器 环身	底部				灰白色	0.5~1mmの砂粒を含む	
39	K地区	根懸器 鋸か	底部				①灰色 ②灰白色	0.5~1mmの砂粒を少量含む	
40	K地区	施釉陶器 殿か	底部~ 底部	(4.0)			素地 淡黄色 精緻 オリーブ灰色	精緻	陶器であるが確實で組合に近い
41	L-1地点	根懸器 高环	底部~ 脚部				灰色	0.5~1mmの砂粒をわずかに含む	
42	L-1地点	根懸器 环身	底部				①灰褐色~灰白色 ②灰褐色	0.5~1mmの砂粒を含む	高台内に沈澱あり ヘラ記号もしくは鑄か

山口大学構内遺跡調査要項

山口大学埋蔵文化財資料館規則

(設置)

第1条 山口大学に山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）を置く。

(資料館の業務)

第2条 資料館は、学内の共同利用施設として、次の各号に掲げる業務を行う。

- 一 山口大学構内等から出土した埋蔵文化財の収藏・展示及び調査研究
- 二 山口大学構内等における埋蔵文化財の発掘調査並びに報告書の刊行
- 三 その他埋蔵文化財に関する必要な業務

(運営委員会)

第3条 資料館に関する事項を審議するため、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

2 委員会に関する規則は、別に定める。

(館長)

第4条 資料館に館長を置く。館長は委員会の議を経て学長が委嘱する。

2 館長の任期は2年とし、再任を妨げない。

3 館長は、資料館の業務を掌理する。

第5条 資料館には調査員若干名を置く。

2 調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

3 調査員は、資料館の業務を処理する。

(特別調査員)

第6条 埋蔵文化財に関する特別な分野の調査研究を行うため、資料館に特別調査員若干名を置くことができる。

2 特別調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

(雑則)

第7条 この規則に定めるもののほか、資料館に必要な事項は別に定める。

山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則

(趣旨)

第1条 この規則は、山口大学埋蔵文化財資料館資料館規則（以下「資料館規則」という。）第3条第2項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 委員会は、次の各号に掲げる事項について審議する。

- (1) 山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）に関する基本的なこと。
- (2) 資料館の管理運営に関すること。
- (3) 資料館の整備充実に関すること。
- (4) 資料館の運営に要する経費に関すること。
- (5) その他必要な事項

(組織)

第3条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 資料館規則第4条第1項の館長
- (2) 各学部の教官各1名
- (3) 事務局長

2 前項第2号の委員は、それぞれの部局の推薦に基づいて学長が委嘱する。

(任期)

第4条 前条第1項第2号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

(委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選とする。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

(幹事)

第6条 委員会に幹事を置き、庶務部長、経理部長及び施設部長をもって充てる。

(委員以外の出席)

第7条 委員会が必要と認めたときは、委員以外の者を委員会に出席させることができる。

(事務)

第8条 委員会の事務は、庶務部庶務課において処理する。

(雑則)

第9条 この規則に定めるものほか、委員会の運営に関し必要な事項は委員会が定める。

Tab.15 山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会委員 (平成8年度)

部局名	氏名	官職	任期	備考
経済学部	及川 順	教授	平7. 4. 1 ~ 平9. 3. 31	委員長
人文学部	森 茂 晓	教授	平7. 6. 7 ~ 平9. 3. 31	資料館長
人文学部	尼川 創二	教授	平7. 5. 29 ~ 平9. 3. 31	
教育学部	来島 浩	教授	平8. 4. 10 ~ 平10. 3. 31	
理学部	吉川 学	教授	平7. 4. 1 ~ 平9. 3. 31	
医学部	福本 哲夫	教授	平8. 4. 1 ~ 平10. 3. 31	
工学部	水田 義明	教授	平7. 4. 1 ~ 平9. 3. 31	
農学部	白水 完治	助手	平7. 4. 1 ~ 平9. 3. 31	
事務局	山木 俊助	事務局長	平8. 4. 1 ~ 平10. 3. 31	

(平成9年度)

部局名	氏名	官職	任期	備考
人文学部	橋本 義則	助教授	平9. 4. 1 ~ 平11. 3. 31	委員長
人文学部	中村 友博	教授	平9. 4. 1 ~ 平11. 3. 31	資料館長
教育学部	来島 浩	教授	平8. 4. 10 ~ 平10. 3. 31	
経済学部	及川 順	教授	平9. 4. 1 ~ 平11. 3. 31	
理学部	小国 信樹	教授	平9. 4. 1 ~ 平11. 3. 31	
医学部	福本 哲夫	教授	平8. 4. 1 ~ 平10. 3. 31	
工学部	中國 真人	教授	平9. 4. 1 ~ 平11. 3. 31	
農学部	西山 雅也	助手	平9. 4. 1 ~ 平11. 3. 31	
事務局	山木 俊助	事務局長	平8. 4. 1 ~ 平10. 3. 31	

Tab.16 山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員

部局名	氏名	官職	専攻等	備考
人文学部	中村 友博	教授	考古学	平成8年度
教育学部	前塙 英明	助教授	地理学	平成9年度
農学部	白水 完治	助手	生物学(動物)	平成9年度

山口大学構内の主な調査

Tab.17 山口大学構内の主な調査一覧表

吉田構内

調査 年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和 41年	第Ⅰ地区A・B区	L～N-15	1	30?	土壤・柱穴	弥生土器、土師器、 須恵器	事前	調査担当 小野忠然	年報 XI
	第Ⅱ地区家畜病院新宮	R-20・21 S-T-19・20	2	2,000	溝、柱穴	弥生土器、土師器、 瓦質土器、須恵器	*	*	
	第Ⅲ地区		3			弥生土器、土師器	試掘	*	
	第Ⅳ地区牛舎新宮	S-T-10・11	4	300	弧溝・土壤、 古墳堅穴住居、 中世住居跡・溝	弥生土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 陶磁器	事前	*	
	第Ⅴ地区		5				試掘	*	
昭和 42年	第Ⅲ地区桃列区 および跡上競技場	D-19・20 E-17・19-21 F-17・18	6	1,600	桃列、弥生堅穴住居	弥生土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 矢板状木杭	事前	*	①
	第Ⅲ地区南区	G-21-23 H-22	7		河川跡、柱穴	縄文土器、弥生土器、 木器、石器	*	*	
	第Ⅲ地区北区	H-20 I-19-21 J-20-21	8	1,400	堅穴住居、溝、土壤、 柱穴		*	*	
	第Ⅲ地区東南区	G-23 H-23-24 I-J-24 K-23-24 L-23	9		弥生堅穴住居	弥生土器	*	*	
	第Ⅲ地区野球場		10		中世柱穴	瓦質土器	試掘	*	
昭和 43年	第Ⅴ地区学生食堂	J-20	11		弥生溝、古墳土壤	弥生土器、土師器	事前		調査担当 山口大学吉田 遺跡調査班
	第Ⅴ地区		12		河川跡、柱穴、土壤	弥生土器、土師器	試掘		
昭和 44年	第Ⅰ地区C区 大学本部新宮	K-L-14	13	600	堅穴住居、溝、土壤	土師器、須恵器、瓦質 土器	事前	*	年報 XII
	第Ⅴ地区教育学部				河川跡	弥生土器、土師器、 須恵器	試掘	*	
昭和 45年	第Ⅰ地区D区第1地点	L-13	14		近世大溝	弥生土器、木炭屑	*	*	年報 XIII
	第Ⅰ地区D区第2地点	L-13	15			弥生土器、土師器、 瓦質土器、石器	*	*	
	第Ⅰ地区D区第3地点	M-13-14	16		土壤、柱穴	弥生土器、瓦質土器	*	*	
	第Ⅰ地区D区第4地点	M-N-14	17		土壤、柱穴	弥生土器、土師器、 瓦質土器、石器	*	*	
	第Ⅰ地区D区第5地点	L-12-13	18		弥生溝	弥生土器、土師器	*	*	
	第Ⅰ地区D区第6地点	M-13	19		柱穴	弥生土器、土師器、 石器	*	*	
	第Ⅰ地区D区第7地点	M-N-13	20			須恵器	*	*	
昭和 46年	第Ⅰ地区E区 第2学生食堂新宮	M-N-14-15 O-15	21	900	古墳堅穴住居、土壤 溝、柱穴	弥生土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 石器、鉄製品	事前	*	年報 XIV
	第Ⅲ地区					弥生土器	試掘	*	
昭和 51年	第Ⅲ地区				堅穴住居	弥生土器、土師器、 須恵器	*	*	①
	人文学部校舎新宮	M-N-21	22	160			*	調査担当 近藤尚一	
昭和 53年							*	年報 X	

調査 年度	調査名	構内地區別	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査 区分	備考	文献
昭和 54年	教育学部附属幼稚学校新宮	A - 20 - 21 B - 19 - 20 C - 19	23	410	溝、土壤	縄文土器、弥生土器	試掘	山口大学埋蔵文化財資料館 山口市教育委員会	年報 IX
	理学部校舎新宮	N - O - 19 - 20	24	250			*		年報 X
	農学部動物舍新宮	P - 19	25	380			*		年報 X
	本部管理棟新宮	L - 14	26	740	溝、土壤、柱穴、 中世井戸、土壤窓、 住居跡	弥生土器、土師器、 石製品	事前		年報 X
昭和 55年	経済学部校舎新宮	K - 21	27	66			試掘		年報 X
	農学部農業技術実験施設新宮	P - Q - 15	28	50	溝、土壤		事前		
	本部図書整備	E - 14 - 16 F - 15 - 16	29				立会		
	農学部環境整備	N - 11 O - 10 - 11 P - 9 - 10	30				*		
昭和 56年	教育学部校舎新宮	H - 19	31		弥生堅穴住居 土壤、溝、柱穴	弥生土器、石製品	事前		年報 I
	教育学部音楽棟新宮	H - 16	32		溝		*		
	教育学部美術科・ 技術科実習実験施設新宮	J - K - 19 - 20	33		旧河川、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、 須恵器、土師器	*		
	正門機脚新宮	I - 11	34				立会		
	時計塔根盤	I - 14	35				*		
	本部構内廻避取扱	K - L - 13 - 14	36				*		
	教委部構内廻避取扱	I - 15 - 17 J - 17	37				*	工法等変更	
	構内循環道路舗装	J - M - 15 M - N - 16	38				*		
	農学部中央整備	N - O - 17	39				*		
	理房施設改修	O - 16	40				*	工法等変更	
昭和 57年	学生部社会奉原新宮	M - S - 9	41				*	工法等変更	年報 II
	学生部馬場整備	M - N - S - 9	42				*		
	附属園芸部栽培部	L - M - 16	43	600	弥生～古墳溝、 土壤、柱穴、枝列	弥生土器、土師器、 須恵器、石器	事前		
	大学会館新宮	M - N - 14 - 15	44	130	弥生堅穴住居、溝	弥生土器	試掘		
	教育学部附属幼稚園 学校ゴルフ研修	A - B - 21	45	880			立会		
昭和 58年	放射性同位元素結合実験室 排水樹脂新宮	O - 18	46	2			*		年報 III
	教養部小範草屋場 昇降口新宮	L - 17	47	10			*		
	教養部中庭環境整備	J - K - 16	48	150			*		
	大学会館新宮	M - N - 12 - 13	49	2,000	古墳井戸、土壤、 柱穴、中世井戸、 擬立柱建物	弥生土器、土師器、 須恵器、輪入陶器、 因縫陶器、瓦質土器、 鉢輪陶器、木簡、石器	事前		
	タグビー場防球ネット新宮	G - 18 - 19 H - 19 - 20	50	114	弥生溝、弥生～古墳 堅穴住居、土壤	弥生土器、土師器、 石製品	*	堅穴住居は工法 変更により現地 保存	
昭和 59年	理学部大学院校舎新宮	M - N - 20	51	409			立会		年報 III
	正門・南門二輪車渡場 および正門花壇新宮	I - J - 12 - 13 H - 23	52	183			*		
	学生部アーチェリー場 的台、電柱設置	N - S - 9	53	33			*		
	学生部庭園整備	M - T - 8	54	16			*		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	学生部野球場敷地水栓取扱	I - 21 K - 22	55	1			立会		年報III
	教養部環境整備	I - 15 - 16 J - 15 K - 17 - 18 L - 18	56	81			*		
	学生部テニスコート改修	C - 18 D - 17 E - 15 - 16 F - 16	57	12			*		
	大学会館ケーブル布設	N - 12	58	160	弥生土墳、柱穴	弥生土器	事前		
昭和59年	大学会館排水管布設	J - L - 13	59	180	弥生～中世遺物包含層、古墳土壤。古代～中世土墳、溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、青磁、白磁、瓦質土器	*		年報IV
	学生部テニスコート フェンス改修	B - 17 C - 16 - 17 D - 16 E - 15	60	25	古墳以降の遺物包含層	土師器	試掘		
	経済学部樹木移植	K - 19 - 21	61	8			立会		
	大学会館環境整備	L - 14 - 15 M - N - 15	62	592	弥生～中世遺物包含層、弥生聚穴住居、防護穴、土塁。古代～近世土墳、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、輸入陶器、國產陶器、土製品、石斧、原石、鐵器、麻繩	試掘		
昭和60年	経済学部環境整備(樹木移植)	K - L - 20	63	5			立会		年報V
	農学部附属農場肥料 園排水溝修復整備	R - 17 - 19	64	30	古代末～中世河川跡	須恵器、土師器、輸入陶器、輪口、石器、鐵滓	*		
	農学部附属農場島造改修	V - 15 - 17	65	325			*		
	教育学部前庭環境整備 (樹木移植)	I - J - 19	66	430			*		
	中央ボイラー棧車止陥装置	O - P - 16	67	25		須恵器	*		
	大学会館環境整備 (樹木移植)	M - 15	68	9		弥生土器、土師器、須恵器、石器、瓦片、鐵滓	*		
	交通標識設置	J - 20 N - 14 P - 18	69	3			*		
	農学部解剖室背面屋根瓦埋設 (実験動物運動場設置)	Q - 18	70	16			*		
	理学部環境整備(藤森設置)	N - 21	71	4			*		
	農学部附属医系病院施設	S - T - 19	72	270			*		
昭和61年	国際交流会館新宮	M - 22 - 23 N - 22	73	70	弥生～古墳河川跡 中世～近世墓	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、須恵土器、陶器器、鐵滓、加工痕のある剝片	試掘		年報VI
	山口銀行現金自動支払機設置 (電線路埋設)	J - 19	74	11	包含層(河川跡か)	弥生土器	立会		
	農学部附属農場農道整備	S - 20 T - U - 19	75	165	中世溝、柱穴	土師器、瓦質土器	*	工法変更	
	農学部附属農場農道交通規制 (施設ポール設置)	M - 10 P - 15 Q - 15 - 17	76	12			*		
	正門横(水田内)境界 杭設置	J - 10	77	0.25	包含層か		*		
	経済学部環境整備 (樹木移植・紀元碑建立)	L - 20	78	3			*		

調査 年度	調査 名	構内地区別	地点	面積 (ha)	遺構	遺物	調査 区分	備考	文献
昭和 61年	古田構内交通標識設置	G - 23 K - 9 O - 22 S - 20 V - 17	79	3		須恵器	立会		
	市道神郷1号線および 間田神郷線の沿水管理設	B - 17・18 C - 18・19 D - 19・20 E - 20・21 F - 21・22 G - 22・23 H - 23・24 I - J - K - 24 L - 23・24 M - N - 23 O - 22・23 P - Q - 22 R - 21・22 S - 21 T - 20・21 U - 19・20 V - 18・19 W - X - 18	80	2.100	古墳・弥生溝、古代 河川跡、弥生瓦合層	弥生土器、土師器、 須恵器（墨書きのある もの含む）瓦質土器、 製塙土器、石斧、板石	立会	山口市教育委 員会 山口大学歴史文 化財資料館	
	教委船自衛隊充荷取扱 (原板設置および駆逐艦移動)	K - L - 18	81	35			*		
	教養船身体障害者用 スロープ取扱	L - 15・16	81	3			*		
	経済学部教水練取扱	L - 20	83	4			*		
	古田構内水泳プール 改修等	E - 15 F - 15・16 H - 15	84	26.5	包含層		*		
	農学部附属農場 水道管埋設	S - 12	85	3			*		
	古田構内汚水排水管等 改修等	M - 18 O - 15	86	15.5		土師質土器	*		
	本部新作障害者用 スロープ取扱	L - 14	87	12			*		
	経済学部身体障害者用 スロープ取扱	K - 18・20 L - 18	88	78			*	工法等変更	
	附属施設能荷物運搬用 スロープ取扱	L - 16	89	8		弥生土器	*		
	教養部37番教室改修	K - 16	90	1			*		
昭和 62年	教育学部附属教育実践 研究指導センター新宮	J - K - 18・19	91	240		ブランク、削器、 種子遺体	事前		
	教養部複合棟新宮	J - K - 17	92	35	埋甕土器、縄、柱穴	土師器、須恵器、 土師質土器、石斧	試掘		
	教養部複合棟新宮	I - J - 16	93	30	溝状遺構	弥生土器	立会		
	教養部複合棟新宮	J - K - 17・18	94	900	溝し穴、河川跡、堅 穴住居、土塼、縄、 舟戸、埋甕土器、掘 立柱建物跡、谷状遺 構、柱穴	绳文土器、土師器、 須恵器、土師質土器、 須生質土器、陶器器、 石斧、木製品	事前		
	九里川局部改修	B - 16・17 C - 16	95	20			立会	山口市教育委員会 山口大学歴史文 化財資料館	
	国際交流会館新宮	M - N - 22・23	96	195			*		
	教育学部附属医療学校 自転車置場移設	B - 20	97	1			*		
	農学部附属農場E7園場 排水管埋設及び E6園場進入路拡幅	L - N - 12	98	55	中世土壤基か	弥生土器、土師器、 須恵器、椎入白石、 圓底鉢形、鐵石	*		
	農学部植栽	N - 17	99	3			*		
	経済学部集水網取扱	J - 20	100	0.5			*		

年報
貢年報
貢

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和63年	教養部複合施設新宮に伴う白駒車置場移設	I - 16	101	1	包含層か		立会		年報 Ⅸ
	国際交流会館新宮に伴う排水管設置	N・O - 22	102	35	河川路(廣か)、包含層	陶生土器、須恵器	*		
	教養部複合施設新宮に伴うケーブル埋設	J - 18	103	1			*		
	サッカー・ラグビー場改修	F - 19・21 G - 18	104	25	性格不明	陶生土器	*		
平成元年	消防用水設置	K - M - 22	105	7.5			*		年報 Ⅹ
	水銀灯新宮	J・L - 15	106	4	古墳形状遺構 柱穴	陶生土器、土師器、須恵器、六連式製塙土器	事前		
	軽野営ガイドー施設改修	O - 20・21	107	25			立会		
	野球場防球ネット新宮	H - 22 I - 21・22 J - K - 21	108	7	包含層	陶生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶器	*		
	防火水槽配管設置	K - 21・22	109	15	柱穴		*		
	吉田寮ガイドー施設改修	M - 8	110	4			*		
	体育施設系水管改修	G - H - 16	111	50		陶器	*	工法等変更	
	大学会館前記念植樹	M - 13	112	6			*		
	吉田寮ガイドー棟地下貯蔵槽設備改修	M - 8	113	45	包含層	土師器、須恵器、土師質土器、陶器、洞片、二次加工のある洞片	*		
	第2武道場排水溝新宮	G - 15	114	2	溝		*		
	案内標識設置	I - 14 L - 18	115	0.5			*		
	本部車庫給水管改修	L - 13	116	6.5		陶生土器	*		
	大学会館前庭環境整備	N - 14・15	117	35	中世溝		*		
平成2年	大学会館前庭環境整備	M - 15	118	2			*		年報 Ⅺ
	第1学生食堂設備改修	I - J - 19	119	7			*		
	教育学部附属農場過疎化室案内板設置	E - 20	120	1			*		
平成3年	農学部連合歯医学科棟新宮	O - P - 17	121	76	純文河川	縄文土器、石器	試掘		年報 Ⅻ
	農学部仮設プレハブ倉庫設置	P - 17	122	6		須恵器	立会		
	農学部微生物実験室その他機械器具機械設備改修	P - 17	123	8			*		
	大学会館前庭記念植樹	L - M - 15	124	2			*		
	サークル棟新宮	F - 14	125	1			*		
平成4年	農学部連合歯医学科棟新宮	O - P - 17	126	980	純文河川	縄文土器、石器	事前		年報 Ⅼ
	交通規制標識及びバリカーセンサ	H - 22 M - 10 O - 22 R - 19 S - 20	127				立会		
	吉田寮内道路(南門ロータリー)取設	H - 23	128	40			*		
	ボイラー・給水管漏水修理	O - 16	129	4			*		
	農学部附属農場ガラス室新宮	S - 14	130	35			*		
	大学会館前庭記念植樹	L - M - 15	131	3			*		
	泉町平川橋緊急地方道路整備工事及び山口大学吉田田地環境整備(正門附近)	E - 11・12	132				*		
	泉町平川橋緊急地方道路整備(信号機設置)	I - 11	133	7			*		

調査 年度	調 査 名	機内地区割	地點	面積 (m ²)	遺 構	遺 物	調査 区分	備 考	文献
平成 5年	本部裏給水管埋設	K～M-13	134	70	溝、柱穴	弥生土器、土師器 造石製模造品	事前		年報 XIII
	人文学部・理学部 講義棟新宮	M-20	135	4			試掘		
	第2屋内運動場新宮	G・H-16	136	144	溝	弥生土器、須恵器 礫石	*		
	農学部給水管埋設	N～P-18	137	9			*		
	基幹整備 (屋外排水管改修)	L-15 M-17・18	138	16			立会		
	農学部連合獣医学科棟新宮 電気設備	O-16	139	4			*		
	大学会館前庭バリカーセット	N-14	140	1			*		
	大学会館前庭記念植樹	L-15	141	1.5			*		
	大田川河川局部改良	C-16 D-15・16	142	40			*		
	農学部電柱立替	V-17	143	0.2			*		
	農学部ガラス室設置	S-14	144	10			*		
	教育学部給水管埋設	H・J-19	145	15			*		
	環境整備 (大学会館前庭)	L-14 M-13～15 N-14・15	146	140.9			*		
		H-20 I-19～21 J-20・21	147	361			*		
		G-13 H-12	148	350			*		
平成 6年	グランド屋外照明施設新設	E-29 F-21 G-18・22 H-19・20 I-21	149	600	縄文河川、弥生住居、 溝、土坑、弥生～古 墳河川、近世溝	縄文土器、弥生土器、 土師器、ガラス小玉、 礫石、磨石、鐵石	事前	工法等変更	年報 XIV
		G・I-15・16	150	725	弥生～古代溝、貯藏 穴、土坑、近世溝、 土坑	弥生土器、須恵器、 鐵石、磨石、鐵石、 銅片、須恵器、瓦質土 器、土師質土器、陶器、 磁器、瓦、下駄	*		
	グランド屋外照明施設 配線埋設	F-21 G-20・21 H-19・20	151	200	縄文河川、弥生住居、 溝、土坑、弥生～古 墳河川、近世溝	縄文土器、弥生土器、 土師器、ガラス小玉、 礫石、磨石、鐵石	*	工法等変更	
	経済学部商品資料館新宮	K・L-21	152	87.5	河川	陶器、磁器	試掘		
	実験廐液処理施設棟新宮	H-12・13	153	2	河川		*		
	体育器具庫及び便所新宮	G・H-17	154	60	河川		*	工法等変更	
	経済学部商品資料館 假設電柱設置	L-22 M-22・23	155	5			立会		
	人文学部前駐車場整備	K-23 L-22・23	156	6			*		
	教育部附属養護学校 生活訓練施設棟新宮	F-19	157	2			*		
	テニスコート改修	B-17 C-16・18 D-15～17 E-15・16	158	15			*		
		B-20～22 C-20	159	16			*		
		C-18 D-18・19	160	200			*		
	ハンドボール場改修 (プレハブ設置)	K-22	161	30			*	*	

調査年	調査名	境内地区別	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成6年	野球場フェンス改修	H - 22 I - 21・22	162	3			立会		年報XIV
	基幹環境整備 (ボイラー室配電盤設置)	O - 16	163	4	河川か		*		
	九田川河川局部改良	D - 15 E - 14・15	164	100			*		
	第2区内運動場電柱仮設	G - 14・15	165	0.5			*		
	教養部水管被覆修理	I - 16	166	2			*		
	グランド屋外照明施設配線埋設	E - 20 F - 20-21 G - 18・19・22 H - 19・20 I - 20・21	167	150			*		
	公共下水道接続 (教育学部附属農場学校ブル橋水施設設置)	A - 21	168	4			*		
	サークル棧道水管埋設	F - 14	169	1			*		
	ブル新營給水管埋設	E - 15 F - 15・16	170	10			*		
	公共下水道接続 (汚水管雨水排水施設設置)	C - 18	171	6	河川	土師器	*		
	教育学部スロープ設置 (音楽棧)	H - 17	172	10			*		
	農学部R I 実験研究施設新常	Q - R - 17	173	75	近世唐	磁器	試掘		
	農学部R I 実験研究施設新常	Q - R - 17	174	520	中世舟戸、近世唐	石斧、須恵器、磁器、瓦器	事前		
	公共下水道接続	C - 18 E - 16 G - 14	175	70	漢、土坑、河川跡、柱穴	弥生土器、土師器	試掘		
	公共下水道接続	C - D - 18 D - E - 17 E - F - 16	176	240	土坑、河川跡、柱穴	弥生土器、石器、骨角器	事前		
平成7年	農学部附属農場牛舎新常	T - 10	177	22			試掘		年報XV
	独身宿舎改修	N - O - 22	178	25.5	河川		*		
	第2学生食堂増築	N - O - 15	179	48	柱穴、仮合層	石器	*		
	第2区内運動場外照明施設新設	G - 15・16	180				立会		
	機器分析センター新工事用電柱仮設	O - 19-21 P - 22	181				*		
	農学部附属農場畜病院パリカー新設	S - 20	182				*		
	吉田寮可燃ゴミ収集場新設	N - 10	183				*		
	農学部R I 実験研究施設電気・情報ケーブル及びガス・給排水管布設	Q - R - 17	184				*		
	情報処理センタースロープ新設	O - 19	185				*		
	基幹環境整備 (ATMネットワークケーブル布設)	E - 19・20 F - 18・19 G - 18	186				*		
	基幹環境整備 (外灯新設)	I - 15・16 J - 20 K - 19 M - 10・11 N - 12 O - 16-18・20 P - 18・19 Q - 17・18	187				*		
	平成8年 基幹環境整備 (独身宿舎・国際交流会館排水管布設)	M - 23 O - 22	188	22.5	河川		試掘		

調査年	調査名	構内地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成8年	基幹環境整備（外灯新設）	H - I - 21 - 22	189	306	河川	縄文土器、弥生土器、土器、石器	試掘		年報XVI
	農学部附属農場排水管取替	S - 10 - 11	190	93	包含層、ピット	土器、須恵器	*		
	施上鍛冶場移築取替	G - 18	191	55	包含層		立会		
	農学部附属農場排水溝改修	R - 11	192	22			*		
	樺野寮パリカー新設	O - 20 - 21	193	7			*		
	サッカー場給水管取替	H - 19 - 20 I - 19	194	12	包含層		*		
	基幹環境整備（共通教育センター・ロープ・テラス新設）	J - K - 17	195	143	河川	縄文土器、須恵器	*		
	九田川河川局部改良	E - 14	196	18			*		
	農学部附属農場道路舗装	K - 12 - 13 L - 12 M - 11	197	27.6	近世用水路、津状遺構	弥生土器、土器、須恵器、陶器、磁器	*		
	本部農耕排水管取替	K - 14	198	2			*		
	農学部附属農場家畜病院患者舍西隣取替	S - T - 19	199	1			*		
平成9年	農学部附属農場堆肥合新宮	S - 10	200	41.5			試掘		年報XVII
	農学部バイオ環境制御施設新宮	Q - 15 - 16	201	140	河川、溝	土器、須恵器、製塩土器、石器	*		
	カーブミラー新設	M - 11 N - 21	202	0.8			立会		
	基幹環境整備（外灯新設）	J - K - 21 K - L - 22 L - 23	203	23.5	包含層		*		
	共通教育棟エレベーター新設	K - 16	204	42			*		
	九田川河川局部改良	E - 14	205	48			*		
	本部2号館西側パリカー新設	L - 13	206	0.5			*		
	教育学部附属農業学校時計塔新設	D - 21	207	1.4	包含層	土器	*		
	基幹環境整備（教育学部附属農業学校排水管取替）	C - D - 21	208	17	河川		*		
	基幹環境整備（焼却場裏表土さとり）	O - 16	209	40			*		
平成10年	第2学生食堂増築及び改修	N - O - 15	210	730	獨立柱建物、溝、土坑、柱穴	弥生土器、土器、須恵器、陶器、磁器、石器、鐵製品	季前		年報XVIII
	教育学部附属農業学校給食室改修	C - 21	211	9	縄文河川、土坑、柱穴	縄文土器、弥生土器	試掘		
	九田川河川局部改良	E - F - 14 F - 13	212				立会		
	基幹環境整備（パリカー新設）	H - 15 I - J - 20 O - 16 - 18	213				*		
	農学部動物用焼却炉改修	Q - 18	214				*		
	基幹環境整備（外灯新設）	L - 17 - 19 M - N - 18	215				*		
	理学部スロープ新設	M - 18	216				*		
	ステンレス回転モニュメント新設	M - 13	217				*		
	第2学生食堂増築その他に伴う屋外電力配路施設整備	O - 14 - 16	218		包含層、柱穴、河川	土器、須恵器	*		
	九田川河川局部改良	F - G - 13 G - H - 12	219				*		
平成11年	第2学生食堂北西隣壁新設	N - 14	220				*		年報XIX
	サッカー場南側防球ネット新設	G - H - 22	221				*		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成11年	第1体育館・共通教育本館 スロープ新設	H - 15 K - 16	222				立会		
	基幹環境整備（外灯新設）	I - 12 K - L - 18 L - 15 M - N - 17	223				*		
平成12年	総合研究棟新宮	Q - 18 R - 17-19	224	250	河川	土師器、須恵器	試掘		
	総合研究棟新宮	Q - R - 18 - 19	225	830	河川、土坑	縄文土器、土師器、須 恵器、製造土器、瓦質 土器、石器	事前		
	既存及び周辺施設改修	M - 8	226				立会		
平成13年	無空電線取り外し無設	O - 15 P - 15 - 16 Q - 14 - 15 - 18 - 19 R - 13 - 14 R - S - 19 S - 14	227		包含層		*		
	九田川河川局部改良	H - 11 - 12 I - 10 - 11 J - 9 - 10 K - L - 9	228				*		
	山口合同ガスガバナー室新設 及びガス配管布設	O - P - 22	229				*		
平成14年	基幹環境整備 (パリカー新設)	N - 22 M - 10 V - 17	230				*		
	あずまや新設	L - 18	231				*		
	共通教育センター空調設備 新設	J - 16	232				*		
平成15年	基幹環境整備（外灯新設）	J - K - 21 M - 10	233				*		
	経済学部校舎改修 (プレハブ校舎新設)	K - 21	234	40	河川	縄文土器	試掘		
	九田川河川局部改良 (平成12年度工事追加分)	L - 8 - 9	235		河川		立会		
平成16年	総合研究棟新宮屋外配管布設	Q - 18	236				*		
	理学部改修1期工事 屋外配管布設	M - 18 - 19 M - N - 20 N - 19	237				*		
	九田川河川局部改良	L - 8 - 9	238				*		
平成17年	基幹環境整備（外灯新設）	I - 14 - 15 J - 15 K - L - M - 15 N - 16 Q - T - V - 17	239		河川		*		
	理学部校舎改修2期工事 ポンプ室配管布設	M - 19	240				*		
	理学部校舎改修2期工事 自転車置場新設	N - 20	241				*		
平成18年	第1学生食堂トイレ改修	I - J - 19	242				*		
	経済学部校舎改修（プレハブ 校舎新設配管布設）	L - 21	243				*		
	農学部校舎改修（解削実習棟 プレハブ校舎新設）	R - S - 19	244	520	獨立建物、柱穴、 土坑、包含層、河川	土師器、須恵器（墨書き 土器）、製陶土器、繩輪 陶器、瓦、縁口、鉢底、 圓盤石	事前		
平成19年	農学部農業農場実験圃場整地	O - 14	245				立会		
	農学部校舎改修	N - Q - 17 - 18	246		河川	縄文土器	*		
	理学部改修3期工事（衛生庫 掲示板・自転車置場新設）	N - 19 - M - 19 - 20	247				*		

調査年度	調査名	都内地区別	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成14年	東アジア研究科ブレハブ校舎新宮	N-21	248				立会		
	農学部校舎改修(解説実習棟 ブレハブ校舎新宮)	R-S-19	249		河用、包装繩		*		
	教育学部トイレ改修	I-18	250				*		

小串構内

調査年度	調査名	都内地区別	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	医学部体育館新宮		1	260		土師器、瓦質土器、石器	試掘		年報Ⅲ
	医学部図書館増築		2	4			立会		
	医学部体育館新宮		3	1			*		
昭和59年	医学部文化棟新宮		4	44	近世焼	土師器、瓦質土器、陶器	事務		年報Ⅳ
	医学部体育館新宮		5	65		土師器、瓦質土器、陶器	*		
	医学部基幹整備 (特高受電塔設置)		6	28		動物遺体(貝殻)	試掘		
昭和60年	医学部附属病院 外来診療棟新宮		7	38			*		年報Ⅴ
	医学部基礎研究棟新宮		8	390		土師質土器、瓦質土器、陶器	*		
	医学部看護婦宿舎改修		9	10		近世陶器	*		
昭和61年	医学部看護婦宿舎改修		10	25.5		近世陶器	立会		年報Ⅵ
	医学部看護婦宿舎改修		11	20			*		
	医学部環境整備 (樹木移植)		12	40			*		
昭和62年	医学部附属病院 外来診療棟新宮		13	5			*		年報Ⅶ
	医学部附属病院 近畿模擬施設(雨水構造設)		14	18			*		
昭和63年	医学部附属病院東駅前場改修		15	6			*		年報Ⅷ
昭和64年	医学部附属病院新宮		16	104		削器、ナイフ形石器 細石刃核	試掘		年報Ⅸ
	医学部附属病院遺跡場整備		17	300		二次加工のある剝片、 使用痕のある剝片、削 片、敲石、砸、磨石、 土師器、土質質土器、 瓦質土器、陶器	立会		
	医学部附属病院遺跡場整備		18	220			*		
平成元年	医学部附属病院MRI棟新宮		19	45		削器、磨石刃、 二次加工のある剝片、削 片、石核	試掘		年報Ⅹ
平成2年	医学部附属病院動物・ 昆虫標本新宮		20	40		剝片	*		年報Ⅺ
平成3年	医学部歯科実験施設新宮 電気工事		21	0.5			立会		年報Ⅻ
平成4年	施設構造監視調査		22				*		年報Ⅼ
平成5年	医学部附属病院実験施設新宮 その他		23	9			*		年報Ⅽ
	医学部附属病院基幹設備 (後述新宮)		24	6			*		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成6年	医学部附属病院MRI-CT装置棟新設		25	300			立会		年報XIV
平成7年	医学部附属病院看護棟新設		26	40			試掘		
平成8年	医療技術短期大学部屋外排水管布設		27	6			立会		年報XVI
平成9年	医学部駐車場・納骨堂新設		28	152			試掘		年報XVII
	墓地環境整備(看護棟新設化粧便所)		29	4			立会		
	医学部創建後移設		30	10			*		
平成10年	宇都宮市土地区画整理事業(柳ヶ瀬丸河内線)		31	134	包含層、近世～近代 用水路	調片、弥生土器、 土師器、陶器、磁器	事前	宇都宮市教育委員 会と共同調査	
	宇都宮市土地区画整理事業(柳ヶ瀬丸河内線・医学部敷地西側特殊道路)		32	37	包含層、近世～近代 窓	調片、繩文土器、弥生 土器、土師器、陶器、 磁器	*	宇都宮市教育委員 会と共同調査	
平成11年	宇都宮市土地区画整理事業(柳ヶ瀬丸河内線)		33	792	近世～近代用水路、 土坑	陶器、磁器、鐵製品	*	宇都宮市教育委員 会と共同調査	
平成13年	医学部附属病院立体駐車場新設		34	229	包含層	繩文土器、弥生土器、 土師器、陶器、磁器	試掘		
平成14年	医学部附属病院高エネルギー 核新設		35	13.25			*		
	総合研究棟新設		36	382	包含層	繩文土器、土師器、重 忠器、瓦質土器、陶器、 磁器	*		

常盤構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	工学部校舎新設		1	70		磁器	試掘		年報III
	工学部図書館増築		2	70			*		
昭和59年	工学部尾山宿舎 排水管布設			20			立会		年報IV
	工学部尾山宿舎 櫛櫛取設等			65			*		
昭和60年	工学部受水槽改修		3	15			*		年報V
	工学部尾山宿舎排水管改修			6			*		
	工学部身体障害者用 スローブ取設		4	29			*		
昭和61年	情報処理センター (常盤センター) 空調設備取設		5	30			*		年報VI
	工学部焼却炉上屋新設		6	225			*		
昭和63年	工学部夜間照明装置 及び競球ネット設置		7	2			*		年報VII
	工学部記念植樹		8	25			*		
平成元年	工学部ガス管改修		9	45			*		年報VIII
平成3年	大学祭展示物設置		10	7			*		年報XI
平成4年	工学部レハブ研究・ 実験棟新設		11	6			試掘		年報XII

調査年度	調査名	県内地図割	地点	面積(m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成4年	工学部・工業短期大学部の改組再編・博士課程設置に伴う建築物等の新設		12	40			試掘		年報 XII
	工学部および工業短期大学部職員宿舎取壇		13	9			立会		
	大学祭展示物設置		14	7			*		
平成5年	工学部リハビ研究・実験棟新設		15	12			試掘		年報 XIII
	工学部地域共同研究開発センター新設		16	16			*		
平成7年	国際交流会館新設		17	8		石獅	*		
平成8年	国際交流会館新設		18	352	柱状造構	ナイフ形石器、網片	事前		年報 XVI
平成12年	工学部福利厚生棟新設		19	385			試掘		
平成13年	工学部インキュベーションセンター新設		20	60			*		
平成14年	総合研究棟新設		21	135			*		

龜山構内

調査年度	調査名	県内地図割	地点	面積(m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属山口小学校・幼稚園運動場整備		1	60	古墳堅穴住居、構状造構	土師器、須恵器、瓦質土器、瓦、石製品、木製品	試掘		年報 III
	教育学部附属山口小学校敷水栓改修		2	1			立会		
	教育学部附属山口中学校電柱コード整備		3	2			*		
昭和61年	教育学部附属幼稚園庭園整備(樹木植樹)		4	1			*		年報 V
	教育学部山口小学校部分汚水管布設	幼稚園・小学校部分	5	57	中世土壤か	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、土師質土器、陶器、不明焼製品、石器、網片、植物遺体	試掘		
	教育学部山口小学校電柱移設		6		河川跡か杭列		立会		
昭和62年	教育学部附属幼稚園遊戲室試張		7	40			*		年報 VI
昭和63年	教育学部附属山口中学校屋外消火栓設置改修		8	35	包含層	土師器、磁器、網片	*		年報 VII
平成元年	教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水管布設		9	260	弥生・古墳堅穴住居、土壤、溝、住穴、河川跡	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、須恵質土器、黑色土器、弦器、一次加工のある網片、使用痕のある網片、網片、石核、砾石	事前		年報 IX
	教育学部附属幼稚園バレーコート支柱設置		10	0.3			立会		
	教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水管布設		11	170	先史遺構	弥生土器、土師器、打製石斧、削器、網片、石核	*		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成2年	教育学部附属山口中学校 汚水排水管布設		12	70	溝状遺構	縄文土器、弥生土器、土器片、瓦質土器、不明焼製品、石器、鐵石、扁平打製石斧、紙石、網片	事前	年報X	
			13	130		弥生土器、土器片、須恵器、土器質土器、瓦質土器、圓底陶器、扁平打製石斧、紙石	立会		
平成6年	教育学部附属山口小学校 プール新設給水管埋設		14	3			*	年報XIV	
			15	7			*		
平成7年	教育学部附属山口中学校 自転車置場新設		16				*		
平成10年	教育学部附属山口小学校 給食室改修		17				試掘		
平成12年	教育学部附属山口中学校 防球ネット新設		18				立会		
平成14年	教育学部附属山口中学校 給水設備改修		19				*		
			20		河川、柱穴	土器器	*		

光構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属光小学校 自転車置場設置		1	6	近世～近代石組	瓦質土器、陶器器、瓦	試掘	年報III	
			2				立会		
昭和59年	教育学部附属光小・中学校 焼却炉新設							年報VII	
			3	1		土器器	*		
昭和61年	教育学部附属光小学校創立 記念事業（プロンズ像建立）		4	25		弥生土器、土器片、瓦質土器、土器質土器、瓦	*	年報VI	
			5	2			*		
昭和62年	教育学部附属光小学校 グラウンド防球ネット設置					弥生土器、土器器、瓦質土器、土器質土器、瓦	*	年報VII	
			6	10		土器器、土器質土器、陶器器	*		
昭和63年	教育学部附属光小学校 運動場移設					土器器、土器質土器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶器器、土器	*	年報VIII	
			7	05			*		
平成2年	教育学部附属光小学校 運動場改修		8	15		縄文土器、土器器、須恵器、瓦質土器、輪輪陶器、船形、土器、網片、紙津	試掘	年報X	
			9	23	土壤	土器器、須恵器、須恵器横放土器器	事前		
平成3年	教育学部附属光小学校 武道館新設		10	38	溝状遺構	土器器、罐器、陶器	試掘	年報XI	
			11	18		土器器、石錐	立会		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成3年	教育学部附属光中学校パックネット新設		12	0.5		土器	立会		年報XII
平成4年	教育学部附属光中学校 武道館新設		13	500	土塁、柱穴	縄文土器、須恵器、 土器、瓦	事前		年報XIII
	教育学部附属光中学校 武道館地盤調査		14				立会		
平成5年	教育学部附属光中学校 武道館新設その他		15	6			*		年報XIII
平成6年	教育学部附属光中学校 パール新宮給排水管設置		16	19			*		年報XIV
平成8年	教育学部附属光小・中学校 西隣(外周フェンス・防球ネット)取設		17	7		陶器	*		年報XVI
平成10年	教育学部附属光中学校給食室 改修		18	6			*		
平成11年	教育学部附属光小・中学校 上水道(給水管)改修		19	132	古墳包丁塙、柱穴、 近世-近代土坑	土器、須恵器、輪式 系土器、電磁土器、 陶器、磁器	試掘 立会		
平成12年	教育学部附属光小・中学校 護岸土槽改修		20		石垣	陶器	立会		
	教育学部附属光小・中学校 上水道(給水管)改修		21				*		

その他構内

調査年度	調査名	構内地区割	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和59年	学生部ポート型 合宿研修所整備	宇都宮市大字小野宇土井	0.5			立会		年報V
	学生部ヨット型 合宿研修所整備	吉敷郡秋田町東宇中通				*		
昭和60年	郷野莊鶴湯機器取設	山口市郷野町3-21	7			*		年報V
昭和61年	湯田宿舎給水管改修	山口市湯田温泉6丁目 8-29	35	杭		*		年報VI
	経済学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市旭通り2丁目3-32	1		土器質土器	*	6号宿舎	
	山口市水の上町6-9	7			瓦	*	2号宿舎	
昭和63年	経済学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市白石二丁目8-7	1		埴輪器、土器、土器 質土器、瓦質土器、陶 磁器	*	7号宿舎採集	年報VII
平成元年	本部職員宿舎 公共下水道切替	山口市水の上町6-1	1			*	1号宿舎	年報VII
平成2年	人文・理学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市石瓶音町1-25	12		陶器	*	2号宿舎	年報VIII
	経済学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市香山町3-1	0.5			*	3号宿舎	
	山田宿舎八幡給配水 その他改修	山口市山田温泉6丁目	30			*		
平成3年	経済学部職員宿舎 電柱設置	山口市旭通り2丁目3-32	0.5			*		年報IX
	人文・理学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市花田922-2	1			*		

調査 年度	調査名	構内地区割	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査 区分	備考	文献
平成 4年	上堅小路共同下水管布設	山口市上堅小路字久保 7-4	7			立会		年報 XII
平成 6年	湯田宿舎公共下水道接続 及び排水施設改修	山口市湯田温泉象6丁目 8-29	44			*		年報 XIV

*文献① 山口大学吉田遺跡調査団「吉田遺跡発掘調査概報」(山口大学、1976年)

*昭和41年以降、吉田構内においては、工事に際し随時継続的に調査を実施しているが、昭和52年以前の吉田遺跡調査団が開与した調査については、調査名をすべて把握しているわけではなく注意が必要である。

Summary

Ch. I : A summary of archaeological excavation carried out on the campus of Yamaguchi University in the 1996 fiscal year.

In the archaeological survey on the Tokiwa campus, salvage excavation was carried out once, On the Yoshida campus, trial excavation was performed three times, and examination were done nine times. On the Kogushi campus, examination was done once, On the Hikari campus, examination was carried out once.

Ch. II : salvage examination in the 1996 fiscal year

On the Tokiwa campus in Ube, In the salvage excavation that involved planning for the construction of the International House, a blade retouched as a knife and a flake of the Old Stone Age and a step of the Modern Age were detected. The blade retouched as a knife is not accompanied with any features. However, there is a group of well-known Tokiwaike sites which are remains from the Old Stone Age near the campus, remains and features related to these sites may be found.

Ch. III : trial excavations in the 1996 fiscal year

During the trial excavation that involved planned constructions of the drainage pipes in the International House-Yamaguchi and Single Lodging, rivers were detected. But no archaeological remains were detected.

In the trial excavation that involved planning for the construction of the outdoor lamps, three rivers were detected. From river 1, stakes for bank protection were detected. and a lot of pottery which belonged to the period ranging from the late Yayoi Age to the early Kofun Age were excavated. A little of pottery which belonged to the period ranging from the late Jomon Age to the early Yayoi Age were excavated from river 3.

In the trial excavation involving the plan of constructions of drainage pipes in the University farm, layers containing cultural remains and pillar holes that belonged to the period from the Kofun Age to the Middle Ages were detected.

Ch. IV : examinations in the 1996 fiscal year

Through the examinations joint with construction of the horizontal bar for the athletic field on the Yoshida campus, we confirmed the existence of layers containing Yayoi potterys. During the examination which accompanied the ground drainage pipe explosion repair construction on the

Yoshida campus, we confirmed layers containing some cultural remains. Through the examination which accompanied improvement of the surroundings on the Yoshida campus, we detected layers containing Jomon potteries. During the examinations which accompanied farm road paving work on the Yoshida campus, we detected ditches that belonged to the period from the Yayoi Age to the Kofun Age and irrigation canals that belong to the period from the Early Modern Age to Modern Age. A lot of pottery which belonged to the period from the Yayoi Age to the Kofun Age were excavated from the former. A lot of earthenware and porcelain were excavated from the latter. No archaeological remains or features were detected during examinations in any other areas.

Ch. V : A summary of archaeological excavation carried out on the campus of Yamaguchi University in the 1997 fiscal year

In the archaeological survey on the Yoshida campus, trial excavation was performed twice, and examination were done eight times. On the Kogushi campus, one trial excavation and one examination were completed.

Ch. VI : trial excavations in the 1997 fiscal year

In the trial excavation that was involved the plan of the construction of the agriculture compost, No archaeological remains or features were detected.

In the trial excavation that was involved the plan for the construction of the Bio Environment Control Institution, we detected three rivers and a ditch and a earthen pit from the latter portion of the seventh century onward. In addition, a broken piece of sue ware of the inkstone with flat, round grinding surface and a broken piece of salt making pottery were excavated. But they were not accompanied with any special features.

In the trial excavation that involved the plan of the construction of the School of Medicine Memorial Service Monument / Charnel House, no archaeological remains or features were detected.

Ch. VII : examinations in the 1997 fiscal year

During the examinations accompanied construction of the clock tower in the Handicapped children's school, we confirmed layers containing cultural remains. Through the examination accompanying the improvement of the surroundings on the Yoshida campus, we detected layers containing cultural remains and a pillar hole and a river. No archaeological remains or features were detected during examinations in any other areas.

Ch. VIII : A summary of archaeological excavation carried out on the campus of Yamaguchi

University in the 1995,1998-2002 fiscal year

On the Yoshida campus, in the salvage excavation that was involved the plan of the construction of the Water Purification Facility and General Study Ridge, Dissection Training Ridge, remains and features concerned with the government office of the Nara-Heian Age were detected form the 1998-2002 fiscal year.

On the Kogushi campus, in the salvage excavation that was involved the plan of the Ube-city land division rearranging business for 1998-1999 fiscal year, one point of Kanegasaki-type Jomon pottery which belonged to the late Jomon Age to know of a complete form was excavated. In addition, a lot of pottery which belonged to the period from the late Yayoi Age to the early Kofun Age were excavated.

On the Hikari campus, in the 1999 fiscal year, we detected layers and pillar holes of the Kofun Age. In this trial excavation and these examinations involved the plan of the construction of the Water-supply pipes, we also detected pits that were founded between the Early Modern Age to the Modern Age.

Appendix

I This is a summary report of a pollen analysis in the Dissection Training Ridge site on the Yoshida campus by Noi Hideaki. The layers of river of the same period as the building with a base of pillars placed directly in the earth are not clear. Judging from the layers that can be supposed to belonged to the same time period, he suggested that interference for human vegetation was big because Gramineae, amugwort, pollen of weeds such as a knotweed increased.

II This is a report of the distribution survey in the University Farm on the Yoshida campus by Naohiko Tabata. He surveyed the University farm and collected the 382 points of broken pieces of pottery. He collected these mainly from the rice field of the eastern part of the campus. On the eastern part of the campus, remains and features about government office of the Nara-Heian Age were detected by excavation of later years. From this thing, he pointed out that it was very likely that there were remains and features related to the government office of the Nara-Heian Age in the eastern part of the campus.



Fig.88 山口大学吉田構内地図及び主な調査区位置図



Fig.89 山口大学小串構内調査区位置図

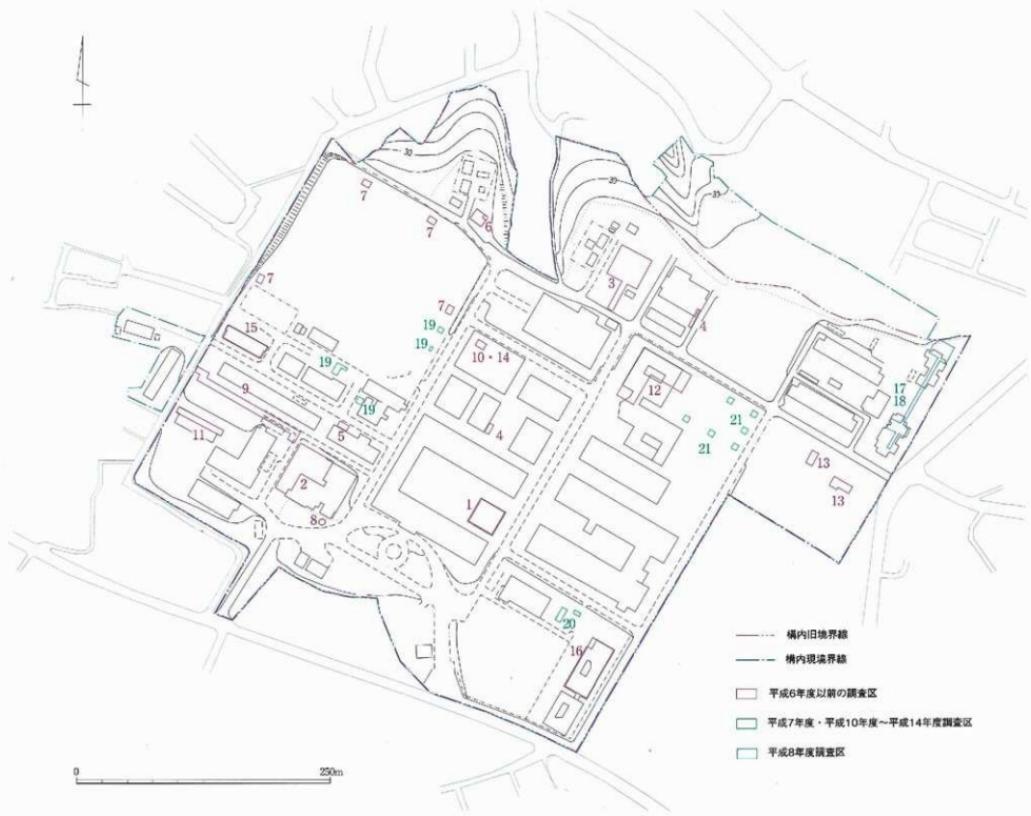


Fig.90 山口大学常盤構内調査区位置図

■ 平成6年度以前の調査区
■ 平成10年度・14年度調査区

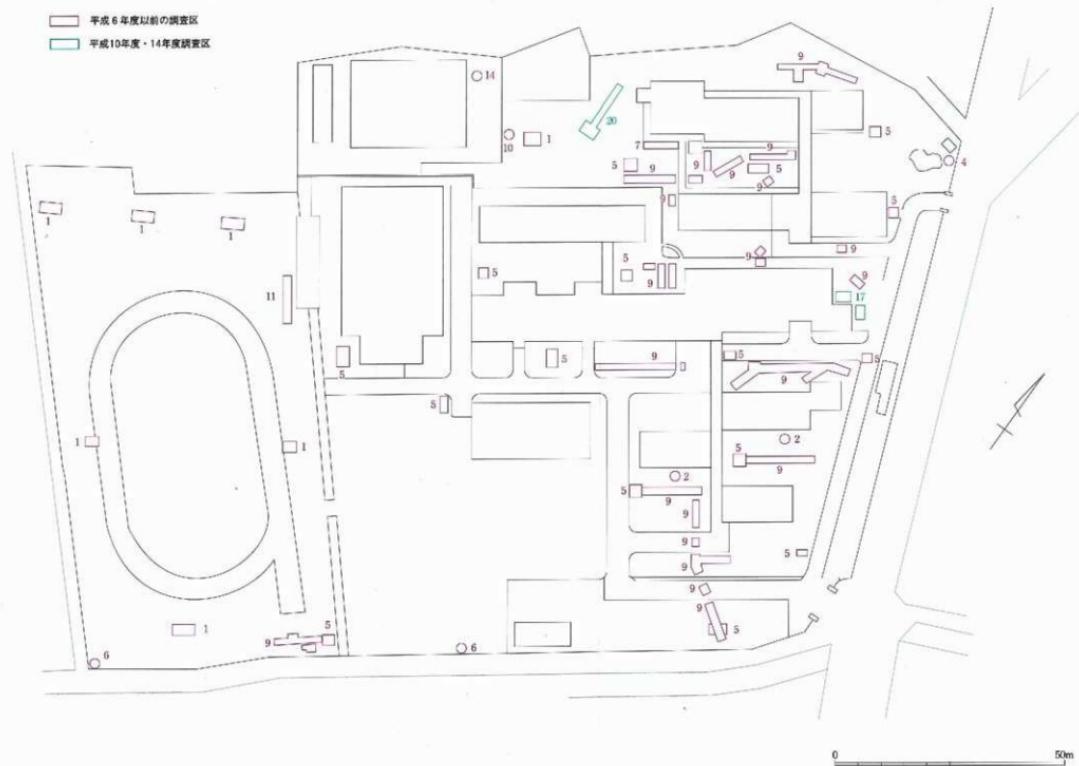


Fig.91 山口大学亀山構内(幼稚園・小学校)調査区位置図

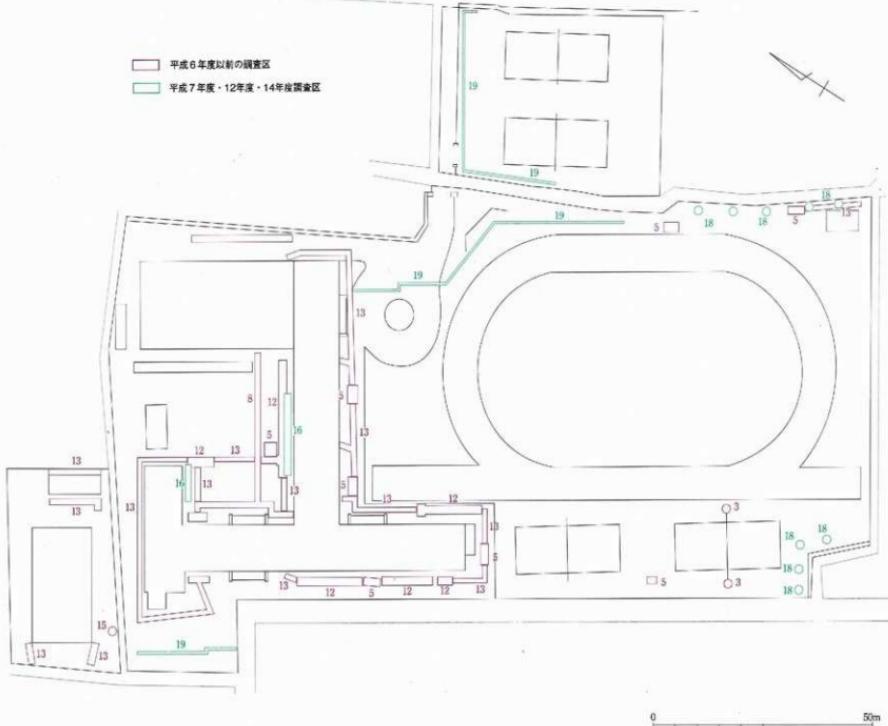


Fig.92 山口大学亀山構内(中学校)調査区位置図



Fig.93 山口大学光構内調査区位置図